



BULLETIN of  
Archaeological Research Center  
Okayama University  
2010

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要

2010

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要  
2010



岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

Archaeological Research Center, Okayama University  
3-1-1 Tsurushima-Naka Kita-ku Okayama-city, 700-8530 Japan  
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>

2012年3月  
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2010

2012年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



## 序

2010（平成22）年度は、鹿田キャンパスを中心に、古代以来の土地区画制度である条里制や、有力な莊園であった「鹿田莊」についての理解が大きく進んだ一年でした。

鹿田地区では、岡山大学病院の正面玄関を中心に環境整備が実施され、徒歩でのアプローチはガラスの庇で雨を避けることができるようになりましたが、この工事に先立つ調査で、小さい発掘ながら大きな発見を得ることができました。第21次調査A・B地点と名付けられた、一辺10mにも満たない小さな二つの発掘区で、両方を結ぶとわずかに「く」の字に屈曲する溝がみつかったのです。注意をしなければそのままで終わってしまう屈曲でしたが、これこそ岡山平野の北半に広がる正方位に近い条里と、やや傾いた「鹿田条里」との接点であり、両者の関係をつかむ大きな手がかりが得られました。

こうした発見もふまえ、2011（平成23）年1月には、「謎の莊園 鹿田莊—集落・条里・領域—」と題して第12回岡山大学キャンパス発掘成果展が開催され、シンポジウムではこの地域の発掘調査を実施している岡山県教育委員会や岡山市教育委員会の方々とともに、それぞれの遺跡の実態や動態を比較検討することができ、参加された多くの方々からも好評の声が聞かれました。鹿田莊の謎は、解明に向かって大きく動いているように感じられます。展示とシンポジウムにご協力いただきました皆様に厚くお礼申しあげます。

この年度が終わりに近づくころ、東日本が甚大な災害に襲われました。遺跡に残されていた過去の津波の痕跡を発掘していた研究者の間では、もっと警鐘を鳴らしておくべきだったと悔やむ声も聞かれます。岡山平野の遺跡にはそれほど激しい災害の痕跡は確認されていませんが、弥生時代の終わりごろに広い範囲を襲った洪水の痕跡をはじめとして、水害は比較的頻繁に生じていたようです。しかし、水田を埋め尽くし甚大な被害をもたらした洪水も、一方では土砂の堆積によって新しい耕地を生みだし、災害に立ち向かう新しい技術が農業の発達を支えていったようにみえます。「鹿田条里」の地域も、そうして生みだされた＜再開発地域＞の新興拠点として新しい物資流通を担っていったものと思われます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事）

北尾善信

副センター長（大学院社会文化科学研究科教授） 新納泉

# 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010

## 目 次

### 第Ⅰ部 2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸活動・業務報告

#### 第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要	1
1. 津島岡大遺跡第33次調査（薬学部）	(野崎貴博) 1
2. 津島岡大遺跡第34次調査（国際交流会館）	(光本 順) 7
第2節 試掘・確認調査の概要	7
1. 国際交流会館新営予定地	(岩崎志保) 7
2. 生協プレハブ設置予定地	(野崎) 10
第3節 立会調査の概要	11
1. 調査の実施状況	11
2. 薬学部改修電気設備工事	12
3. その他の調査地点	13
第4節 津島岡大遺跡の研究	17
縄文時代後期～「突帯文期」におけるマメ・イネ圧痕	(山本悦世) 17

#### 第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要	27
1. 鹿田遺跡第20次発掘調査C・D地点（中央診療棟）	(岩崎) 27
2. 鹿田遺跡第21次発掘調査（外来診療棟周辺環境整備）	(光本) 30
第2節 試掘・確認調査の概要	31
1. 岡山県地域医療総合支援センター予定地	(野崎) 31
第3節 立会調査の概要	33
1. 調査の実施状況	(野崎) 33

#### 第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理・研究	(野崎) 36
1. 調査資料の整理	36
2. 調査資料の保存処理	36
第2節 調査成果の公開・活用	36
1. 公開・展示	(光本) 36
2. 資料・施設等の利活用	(野崎) 38
第3節 2010年度調査研究員の個別研究活動	41
1. 科学研究費	41
2. 論文・資料報告	41
3. 研究発表など	41

4. 講演など	41
5. 資料収集・実態調査	42

## 第4章 2010年度における調査・研究のまとめ ..... (野崎) 43

### 付 編

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程	44
2. 2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織	46
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項	46

## 第II部 岡山大学構内遺跡発掘調査報告

### 第1章 津島岡大遺跡第34次調査

第1節 調査の経緯と経過	(光本) 67
1. 調査に至る経緯	67
2. 調査体制	67
3. 調査の経過	68
第2節 調査の記録	69
1. 調査地点の位置	69
2. 層序と地形	69
(1) 層序	69
(2) 地形	73
3. 遺構と遺物	73
(1) 弥生時代の遺構・遺物	75
a. 畦畔	75
b. 溝	75
(2) 近世の遺構・遺物	76
a. 土坑	76
(3) 包含層出土遺物・遺縫遺物	81
第3節 自然科学的分析	(考古環境研究所) 82
1. 植物珪酸体分析	82
2. 花粉分析	86
第4節 結語	(光本) 90

### 第2章 鹿田遺跡第21次調査

第1節 調査の経緯と経過	(光本) 95
1. 調査に至る経緯	95
2. 調査体制	95
3. 調査の経過	95
第2節 調査の記録	98
1. 調査地点の位置	98

2. 第21次調査A・B地点	99
(1) 層序と地形	99
a. 層序	99
b. 地形	101
(2) 遺構と遺物	102
a. 平安時代の遺構・遺物	103
b. 鎌倉時代の遺構・遺物	104
3. 第21次調査D地点	106
(1) 層序と地形	106
a. 層序	106
b. 地形	107
(2) 包含層出土遺物	108
第3節 自然科学的分析	(能城修一) 109
1. 鹿田遺跡第21次調査で出土した木製品の樹種	109
第4節 結語	(光本) 110
写真図版	111

## 挿 図 目 次

### 第Ⅰ部

#### 第1章

図1 調査地点の位置	2	図16 座痕土器と圧痕写真1	21
図2 土層柱状図	3	図17 座痕土器と圧痕写真2	22
図3 縄文時代の遺構平面図	4	図18 座痕土器と圧痕写真3	23
図4 弥生～古代の遺構平面図	5		
図5 中世の遺構平面図	6		
図6 調査地点の位置	7		
図7 土層柱状図	8		
図8 調査地点の位置	10		
図9 土層断面図	11		
図10 土層断面図	12		
図11 土層柱状図	13		
図12 土層柱状図	13		
図13 2010年度の調査地点【1】 －津島地区－	15～16		
図14 調査遺跡の位置	17		
図15 レプリカ作成作業風景	18		
		図19 調査地点の位置	28
		図20 土層断面図	29
		図21 第20次調査C・D地点遺構全体図	30
		図22 調査区の位置	31
		図23 土層断面図	32
		図24 土層柱状図	34
		図25 2010年度の調査地点【2】 －鹿田地区－	35
		第2章	
		図26 展示会風景・シンポジウム風景	38
		図27 第12回成果展アンケート結果	38
		第3章	

## 第Ⅱ部

第1章	
図28 津島岡大遺跡構内座標と各調査地点	68
図29 調査地点の位置	69
図30 調査区区割りと土層断面の位置	69
図31 調査区土層断面（1）	70
図32 調査区土層断面（2）	71
図33 検出遺構全体図	74
図34 溝1～6	76
図35 土坑1～8全景	77
図36 土坑（1）	77
図37 土坑（2）	78
図38 土坑（3）	79
図39 土坑出土遺物	80
図40 包含層出土遺物および遊離遺物	81
図41 土壤サンプル採取地点	82
図42 津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における植物珪酸体分析結果	83
図43 津島岡大遺跡第34次調査の植物珪酸体（プラント・オパール）	84
図44 津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における花粉ダイアグラム	87
図45 津島岡大遺跡第34次調査の花粉、寄生虫卵	87
第2章	
図46 調査状況	96
図47 発掘調査地点と構内座標	97
図48 調査地点位置図	98
図49 21A・B地点の調査区の土層（1）	100
図50 21A・B地点の調査区の土層（2）	101
図51 近現代の井戸	102
図52 21B地点河道内遺物出土状況	103
図53 河道内出土遺物	103
図54 21A・B地点の鎌倉時代遺構	104
図55 溝1	105
図56 21D地点の調査区の土層	107
図57 21D地点平面図	108
図58 21D地点出土遺物	108
図59 鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の光学顕微鏡写真	109

## 表 目 次

### 第Ⅰ部

第1章	
表1 2010年度津島地区調査一覧	14
表2 広域調査一覧	19
第2章	
表3 2010年度鹿田地区調査一覧	34
第3章	
表4 津島岡大遺跡第32次調査分析一覧	36
表5 第9期のPEG保存処理工程	36
表6 2010年度非常勤講師への委嘱依頼内容	39

## 第Ⅱ部

第1章	第2章
表7 檜出遺構一覧.....	73 表11 本調査地点と第1次調査地点の標高差.....
表8 土坑分類表.....	80 表12 A・B地点検出遺構一覧.....
表9 津島岡大遺跡第34次調査における 植物珪酸体分析結果.....	83 表13 鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の 樹種.....
表10 津島岡大遺跡第34次調査における 花粉分析結果.....	86 109

## 写 真 図 版

図版1 土器・木製品・石製品.....	111
---------------------	-----

## 付 表 ・ 付 図

付表1 1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）.....	48
付表2 2009年度以前の構内主要調査（1983～2009年度）.....	48
付表3 埋蔵文化財調査研究センター収藏遺物概要（2010年度現在）.....	56
付表4 埋蔵文化財調査室刊行物.....	58
付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物（2011年3月まで）.....	58

付図1 岡山大学の位置と周辺の遺跡分布.....	60
付図2 津島地区全体図.....	60
付図3 2009年度までの調査地点【1】－津島地区－.....	61～62
付図4 2009年度までの調査地点【2】－鹿田地区－.....	63
付図5 2009年度までの調査地点【3】－三朝地区－.....	64
付図6 2009年度までの調査地点【4】－東山地区－.....	64
付図7 2009年度までの調査地点【5】－倉敷地区－.....	64

## 例 言

1. 本書の書名は「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010」とする。
2. 本書は二部構成とし、第Ⅰ部には岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの2010年度における諸活動記録をまとめた「2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸活動・業務報告」、第Ⅱ部には当該年度に実施した津島岡大遺跡第34次調査および鹿田遺跡第21次調査の正式報告である「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」を掲載した。

## 第Ⅰ部

2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの  
諸活動・業務報告

## 例　　言

1. 第I部は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2010年4月1日から2011年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 第I部において報告している津島周大遺跡は岡山市北区津島中一丁目1-1、二丁目1-1、三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 本文は岩崎志保・野崎貴博・光木本・山本悦世が分担執筆し、執筆者名は日次および文末に記した。
4. 編集は新納泉副センター長・山本悦世調査研究室長の指導のもと、野崎が担当した。

## 凡　　例

1. 岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年4月1日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界割地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
  - 1）津島地区では、国土座標第V座標系の座標北を基準とし、(X, Y) = (-144,156,4617m, -37,246,7496m) を起点とする構内座標を設定する。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いる。
  - 2）鹿田地区では、国土座標第V座標系の座標北より東に15°振り出した座標軸を基準とし、(X, Y) = (-149,456,3718m, -37,646,7700m) を起点とする構内座標を設定する。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区割りを用いる。
  - 3）挿図中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、その他は緯北を用いる。
2. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、道筋ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものについては、任意の名前を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
3. 土層記号では、鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
4. 遺物の総量は1箱27ℓ容量の箱に換算して表記した。
5. 付表2に記載した既往の調査一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
6. 本文などで使用している調査番号は表と一致する。
7. 付図2は、岡山市域を複写したものである。

# 第1章 津島岡大遺跡の調査研究

## 第1節 発掘調査の概要

### 1. 津島岡大遺跡第33次調査（薬学部講義棟新営、調査番号1、津島南BB・BC17・18区）

#### a. 調査の成果

縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物を検出した。

縄文時代では、中期～後期にかけての土層の堆積状況および中期の遺物包含層・遺構・遺物を確認した。縄文中期～後期にかけては砂質土が厚く堆積しており、中期以降の急速な沖積化の進行をしめす。中期の遺構・遺物は、これまで数地点で確認されていたが、本調査により、さらに西へ分布が広がることとなった。弥生時代では、土坑群および地形の方向に沿った溝群等を検出した。古墳時代～古代では、縦柱建物、道路状遺構、溝等を検出した。縦柱建物は津島岡大遺跡では初例となる。道路状遺構は中世遺構面においても確認された。

本調査区で確認された古代および中世の道路状遺構には、①素掘りの並行する溝と溝間の路面で構成されるもの、②「波板状凹凸面」を下部構造に有するもの、③浅く掘りくぼめた溝の底面にいくつもの小穴を連ね、溝状のくぼみや小穴の中に砂を充填して埋め戻すもの、があり、時期の異なる道路状遺構の構造を比較検討できる資料が得られた。

調査期間 2010年7月16日～11月11日（表土掘削：6月29日～7月9日、発掘調査：7月16日～11月11日）

調査面積 972.2m<sup>2</sup>

調査担当 野崎 貴博（助教、調査主任）・池田 駿（助教）

遺構・遺物

【遺構】 縄文時代中期：ピット1、縄文時代後期：炭・焼土散布域4、ピット1、弥生時代：溝14、土坑19、ピット17、古墳時代後期～古代：道路状遺構3、ピット列4、溝3、縦柱建物1、土坑2、中世：道路状遺構5、ピット22、近世：耕作痕

【遺物】 縄文時代：縄文土器・石器、弥生時代：弥生土器、古墳時代後期～古代：須恵器（総量12.6箱）

その他 2010年10月26日に現地説明会を開催、見学者140名

#### b. 調査に至る経緯と経過

##### (1) 調査に至る経緯

薬学部講義棟新営計画が具体化し、新営地には津島南地区西半に位置する薬学部棟西側の緑地が割り当てられた。新営地周辺における発掘調査、試掘・確認調査、立会調査の成果から、縄文時代後期～近世にいたる各時期の遺構・遺物の分布が予測されたため、施設の建設に先立ち発掘調査を実施することとなった。

##### (2) 調査の経過

発掘調査に先立ち、6月29日から7月9日の期間で近・現代の造成土と擾乱埋土を除去した。その際、旧陸軍歩兵第十聯隊兵舎建物の基礎を確認し、撤去した。

発掘調査は7月16日より開始した。擾乱内の清掃と並行して2層（近代層）の掘り下げを実施し、以降、近世、中世と通りながら調査を進めた。8月下旬からは6層上面で中世の遺構群の調査を進め、道路状遺構等を確認した。9月中旬から10月は中世～古代層の掘り下げを行い、8～10層上面で弥生時代～古代の遺構を検出した。10月下旬からは9層（黒色土層）を掘削し、10層上面で縄文時代後期の起伏のある地形と炭や焼土の散布域、ピッ

トを確認した。

10層上面で検出された遺構はわずかであり、側溝や擾乱部分からも10層に属する遺物はなかったため、この層が縄文時代後期段階の基盤層と予想されたが、同層の性格を最終的に確認するため、南側微高地では南半部、北側微高地では東西・南北方向に幅3mのトレンチを設定し、0.2~0.3mの厚さで掘削した。その結果、遺構・遺物は確認されず、10層は当該期の基盤層であると判断した。

さらに10層以下の土層の堆積状況を確認する目的で調査区北半東側の擾乱部分に設定したトレンチにおいて、10層上面から約0.5m下位に広がる12層で縄文時代中期の土器・石器が検出された。

そこで遺物出土地点を中心とした調査区北半中央部に東西約24m、南北約15mのトレンチ（北半中央トレンチ）と、調査区各所に土層観察および遺構・遺物の分布範囲の確認を目的とするトレンチを9か所設定した。間層となる10・11層は無遺物層と判断できることから、可能な範囲で重機を利用してしつつ、12層の調査を行った。

その結果、遺構分布は炭・焼土を含むピット1基と稀薄であること、出土遺物は縄文時代中期の土器片6点、石器2点とわずかであること、遺構・遺物を検出した12層はトレンチ内におさまる限局的な土層であることが確認できたため、調査範囲をさらに拡張する必要はないとの判断した。

掘削作業は11月11日に終了、12日に記録作業やサンプリング他の作業を行い、すべての調査を終了した。

なお、10月23日には古代の道路状遺構の成果を中心とした現地説明会を開催し、約140名の参加者を得た。

### c. 調査の概要

#### (1) 調査地点の位置（図1）

本調査地点は、津島南地区西半、津島地区構内座標ではBB17・18、BC17・18区に位置する。周辺で実施した発掘調査は、南西に第8次調査A地点（遺伝子実験施設）、第16次調査（動物実験棟）、第30次調査（岡山大インキュベータ）が、東に第26次調査（事務局本部棟）および第27次調査（創立五十周年記念館）がある。

これらの周辺調査のうち、最も近接している第30次調査地点では、縄文時代後期の土坑・ピット、弥生時代の溝群、古墳時代後期の溝、古代の道路状遺構、中世の条里関連遺構（溝・耕作痕）が確認されている。

#### (2) 層序（図2）

本調査区で確認された土層は大きく14層に大別される。以下に各層の概要を記載する。

**1層：1907（明治40）年の旧日本陸軍による第十七師団駐屯地造成以降、現在に至るまでの造成土である。**明治期の造成土は明黄橙褐色花崗岩バイラン土の真砂土を主体とする。現地表面の標高は約3.8mである。

**2層：淡灰色粘質土で、1907年までの近代耕作土層である。**径1cm未満の小礫を多く含む。上面高は約3.1mである。

**3層：淡灰黃褐色砂質土で、近世の土層である。**上面に鉄分の沈着がみとめられる。径1cmの大の小礫を含む。上面高は約2.95~3.05mである。

**4層：淡灰茶褐色砂質土で、近世の耕作土層である。**鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。土色・土質等により、3層に細分できる。上面高は約2.8~2.9mである。

**5層：淡灰黃褐色砂質土である。**上面に鉄分の沈着が著しく、マンガンの凝集も認められる。径1cmの大の小礫を含む。4層との層理面付近で永楽通宝が出土していることから、中世でも後半段階の耕作土と考えられる。上面高は約2.6~2.7mである。

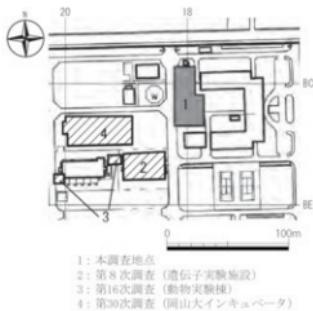


図1 調査地点の位置（縮尺1/4,000）

6層：明灰色弱粘質土である。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。地点によって細～粗砂を多く含む。層中に中世の遺物を包含しており、中世段階に形成された土層と考えられる。上面で中世の遺構を検出した。上面高は約2.5～2.6mである。

7層：明灰色粘質土である。粘性が強い。鉄分の沈着、マンガンの凝集が認められる。層中に古代の遺物を包含しており、古代の土層と考える。上面高は約2.5mである。

8層：暗黃褐色弱粘質土である。下層の9層上面が低く下がるたわみ部分にのみ観察される土層である。鉄分の沈着が著しく、マンガンの凝集も認められる。古墳時代後期の溝の埋没後に堆積した土層であり、古代の土層と考えられる。上面高は約2.3～2.4mである。

9層：暗褐色砂質土で、鉄分の沈着、マンガンの凝集が顕著に認められる。津島地区では「黒色土」と呼称している鍵層で、上面が弥生時代の前期にあたると考えている土層である。上面高は約2.1～2.5mである。

10層：淡黄灰褐色砂質土を主体とする縄文時代後期の基盤層である。マンガンの凝集が著しい。上面高は約1.65～2.5mである。

11層：黄茶褐色砂質土で、全体的によごれの少ない土層である。上面高は約1.7～2.4mである。

12層：茶褐色土で、縄文時代中期の遺物包含層である。北半中央トレーニチにのみみられる土層で、周囲にむかって漸移的に色調が薄れ、砂質を増す。上面高は約1.8～1.9mである。

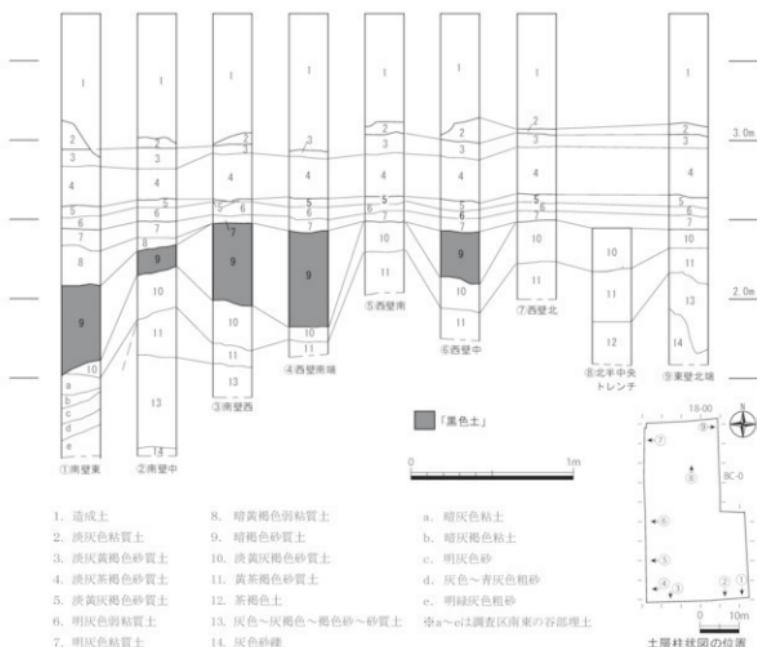


図2 土層柱状図（縮尺1/30）

13層：灰色～灰褐色～褐色の色調を呈する砂～砂質土である。調査区各所に設定した深掘りトレンチにおいて11層下面で確認された。北半中央トレンチでのみ認められた12層が周間に向かって退色し、砂質を増した土層であり、砂質を強く帯びる特徴をもつ。地点によって細分が可能である。上面高は1.6～2.2m前後であり、北から南に向かって低くなる傾向にある。

14層：灰色砂礫層である。径2～10cm前後の礫を主体とする。上面高は1.05～1.95mである。14層の高まりが認められる地点では微高地の形成がすんでおり、縄文時代中期の包含層である12層は14層の高まる範囲に形成されたものである。

### (3) 遺構・遺物

<縄文時代中期> 北半中央トレンチでピット1基を検出した。規模は径0.35m、深さ0.53mである。周辺には径約1.3mにわたって炭や焼土の小粒が散布しており、ピット周辺における火の使用が想定される。また、北半中央トレンチの東側でも少量の炭化物や焼土粒を含む弱い赤変域がみられた。

出土遺物は、土器6点、石錐1点、サスカイト洞片1点である。南西深掘りトレンチから出土した縄文土器1点以外はすべて北半中央トレンチからの出土である。

<縄文時代後期> 10層上面で確認された縄文時代後期の地形は、東北東～西南西方向を基調とする幅の狭い小微高地とその周間に入り込む低位部により小さな起伏を有する。微高地は後世の削平をうけており、本来有していた高さは不明である。遺構は中央部に延びる低位部の東半で炭や焼土の散布域4か所、南側微高地の西寄りでピット1基を確認した。

焼土散布域は2ヶ所で、いずれも被熱による弱い変色域が認められた。径は0.3～0.5mと小規模である。炭や焼土の含有量が少なく、恒常的な火処としての使用を想定できない。炭散布域は径0.4m前後的小規模なもの、約2.5×1.5mの範囲に広く散布するものがある。被熱による変色や焼土とともにあっておらず、周辺から流入した炭の可能性が高い。

遺物は少量の土器・石器が出土した。

<弥生時代> 9・10層上面で溝14条、土坑19基、ピット17基を確認した。

溝はいずれも北東～南西方向のもので、9層の堆積域やその縁辺部にあたる調査区北～中央、調査区南東角に掘削される。9層は10層階にみられた低位部上にのこる土層であり、溝の掘削には旧地形が影響を及ぼしたことがうかがえる。出土遺物から弥生時代後期に属すると考えられる。

調査区南東角の溝群は7条の溝が切り合っており、繰り返し掘削された状況がみられた。これらの溝の断面形はいずれも丸いボウル状を呈している。これに対し、調査区中央以北の溝は切り合い関係をもたない溝が5条並行して掘削され、その

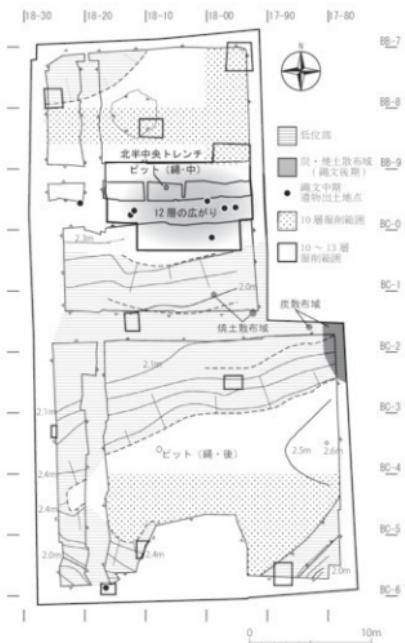


図3 縄文時代の遺構平面図（縮尺1/400）

断面形は、ほとんどが逆台形である。これらの溝群は位置・再掘削の有無・断面形等の差を有する2群に大別できる。

土坑は調査区南東部で検出した。遺物の出土が僅少で、時期の判定は難しいが、多くの土坑が弥生後期の溝群に切られており、弥生後期以前のものとの考えられる。平面形は円形、方形に分類できる。規模は、円形が径0.4~0.7m、方形が長軸長0.9~1.7mであり、顕著な差を示す。

ピットは調査区北側の微高地上において確認した。いずれも黒色土の埋土を有する。分布は不規則で、有意なまとまりを見出せない。

<古墳時代後期～古代> 道路状遺構3、ピット列4、溝3、総柱建物1、土坑2を確認した。道路状遺構は並行する数本の溝で構成される。

道路状遺構1は南北方向に並行する2条の溝で構成される。側溝となる溝の芯々間の幅は約2.3m、溝に挟まれた路面幅は約1.2mである。古墳時代後期の溝27を切っており、古墳時代後期を上限とするが、埋土が淡灰色粘土で7層に近い特徴を有することから、古代に属する遺構と考えられる。

道路状遺構2は北東～南西方向に並行する3条の溝で構成され、そのうち2条は切り合い関係を有している。補修等による再掘削の可能性もあり、本来は2条の溝が側溝として機能した道路状遺構と考えたい。その場合、溝の芯々間の幅は約2.2m、路面幅は約1.2mとなる。埋土はいずれも灰色を呈する弱粘質土で、古代に属すると考えられる。

道路状遺構3は北西～南東方向に並行する浅く短い4条の溝で構成される。溝の間隔は約0.5~0.6mである。この溝群を道路の下部構造である「波板状凹凸面」と考えれば、方向は北東～南西となり、本調査区における条里地割に斜行する他の道路状遺構と同方向となる。また、「波板状凹凸面」を構成する溝の長さが路面幅を示すとすれば、約2.4~2.5mとなる。埋土はいずれも灰色～明灰色砂質土である。その色調から、古代の範疇でとらえることができるとうと考えられる。

以上、本調査地点における古代の道路状遺構には、①側溝としての機能をもつ2条の並行する溝で構成されるもの（道路状遺構1・2）、②道路の下部構造と考えられる「波板状凹凸面」を有するもの（道路状遺構3）の2類型が存在していることが明らかとなった。

ピット列のうち3列はおむね北東～南西方向、1列はほぼ東西方向を志向している。ピットの径は約0.3~0.5m、深さ0.05~0.1mである。これらは道路状遺構を構成する溝群を切っており、道路が廃絶された後の所産である。ピット列の性格は明らかでない。

溝は調査区北半で確認した。溝27・42は北東～南西方向に掘削される。9層が堆積する調査区北西角および調査区中央に位置しており、旧地形の影響をうけたものである。規模・断面形が明らかな溝27は幅約1m、断面形

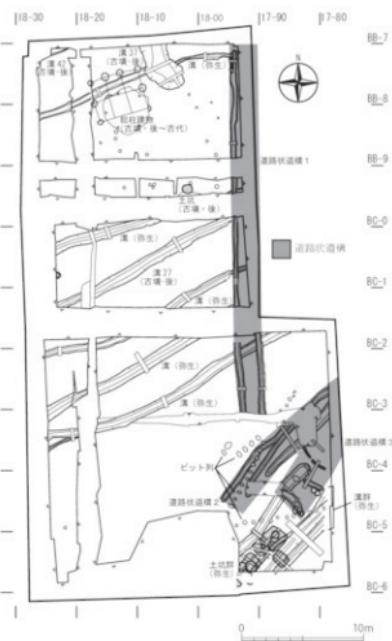


図4 弥生～古代の遺構平面図（縮尺1/400）

は逆台形を呈する。溝37は調査区北側の微高地上で検出した。北西-南東方向を志向し、低位部にむかって掘削される。幅は約22m、断面形はボウル状を呈し、底面には凹凸を有する。溝27・37・42からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、当該期の所産と考えられる。

土坑は調査区北半微高地上および調査区南半東壁でそれぞれ1基ずつ確認した。いずれも埋土は淡灰色粘質土である。調査区北半微高地上の土坑からは古墳時代後期の須恵器が出土した。

総柱建物は調査区北側の微高地上で検出した。中央から南北を近代以降の擾乱で破壊されている。建物の規模は2×3間(3.5×4m)である。長軸の方向は、東北東-西南西であり、微高地の延びる方向にはば並行している。柱穴は9本確認した。平面形は円形で、径は0.5~0.6m前後、深さ0.4m前後である。時期は柱穴から出土した古墳時代後期の須恵器小片を上限とするが、それ以上の特定は難しい。

＜中世＞ 6層上面で道路状遺構を構成すると考えられる5群の溝群、ピット22基を検出した。道路状遺構は、並行する数本の溝群およびピット列で構成されるものを認定した。

道路状遺構4は調査区北半中央で検出した。東西方向の溝群で、5条が切り合っている。溝13以外は浅い皿状の断面形を呈する深さ約0.1~0.2mの溝で、底面に小ピット列が連なる。溝13は幅1.7m、深さ0.4mの溝で、深いボウル状の断面形を呈する。この溝のみ規模・断面形が異なる。

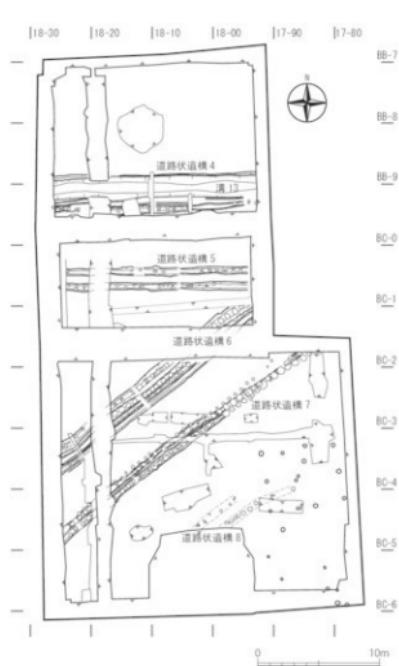


図5 中世の遺構平面図(縮尺1/400)

道路状遺構5は調査区中央で検出した。東西方向の溝群で、2条の溝が切り合い関係を有さずに並行する。浅い皿状の断面形を呈し、底面に小ピット列が連なる。

道路状遺構6は調査区中央で検出した。北東-南西方向の溝群で、4条の溝が切り合っている。溝3・4・6は底面にピット列が連なる。削平により溝3は調査区北東部ではピット列として検出した。

道路状遺構7は調査区中央で検出した。北東-南西方向の溝群で、3条の溝が切り合っている。いずれも底面にピット列が連なる。削平をうけており、溝1・2の北東側および溝7はピット列として検出した。

道路状遺構8は調査区南部で検出した。上部は削平をうけており、ピット列として検出した。検出面では切り合い関係は認められなかった。底面にピット列が連なる構造の溝が並行していたものと考えられる。

以上、6層上面で検出された道路状遺構は、いずれも浅く掘りくぼめた溝の底面に多数の小穴を連ねたもので、中には砂が充填される。路面の水はけなど、地盤の改良をはかったものとみられる。

ピット群は調査区南東で確認した。径0.2~0.3m、深さ0.15~0.4mで、いずれも小規模なものである。この範囲にのみ分布するが、建物としての

まとまりを確認するにはいたらなかった。

＜近世＞ 近世の遺構は3層上面で東西方向の畝を検出した。畝の高まり部分は近代の耕作により削平されているものの、高まり間の窪みがのこされていた。窪みの幅は約0.5mである。

なお、上記の内容は暫定的なものであり、今後の整理・検討を経て刊行する本報告をもって正式なものとする。

(野崎 貴博)

## 2. 津島岡大遺跡第34次調査（国際交流会館新営工事、調査番号2、AU・AVI3・14）

津島岡大遺跡第34次発掘調査（国際交流会館新営）の調査成果については、本書第II部第1章において正式報告として記載した。

(光本 順)

調査期間 2010年7月30日～9月28日（機械掘削と並行して発掘調査を実施、機械掘削は9月7日に終了）

※平面的調査としては中世上面で調査を終了。

調査面積 1,590m<sup>2</sup>

調査担当 光本 順（助教、調査主任）、山本悦世（教授）

遺構・遺物

【遺構】 平面調査：近世土坑10基 断面調査：弥生時代前期溝6条・畦畔3か所（1面）

【遺物】 近世陶磁器、石製品、中世土器、須恵器 （総量1箱）

## 第2節 試掘・確認調査の概要

### 1. 国際交流会館新営予定地（調査番号3、津島北AU13・14区）

#### a. 調査に至る経緯と調査の経過

2009年度末に岡山大学津島地区に国際交流会館の新設が計画された。新営予定地は、津島キャンパスの北西部、附属図書館の北側に位置する駐車場である。当該地点の近くでは、津島岡大遺跡第12次調査（附属図書館）<sup>1)</sup>、2009年度学童保育室試掘・確認調査<sup>2)</sup>等が実施されている。これらの調査成果では縄文時代後期以降、近世・近代までの各時期の遺構・遺物が確認されている。主な遺構としては、第12次調査地点の弥生時代前期の水田畦畔、古代における条里の坪境の溝と考えられている東西方向の大溝があげられる。この大溝は古代以降、近代にいたるまで、区画の溝として機能していたことが判明している。一方、学童保育室予定地の調査では、縄文時代後期～近代まで14枚の土層堆積状況を確認した。このうち標高1.9mで確認されている暗黒褐色粘質土層は、津島一帯で確認されている弥生時代

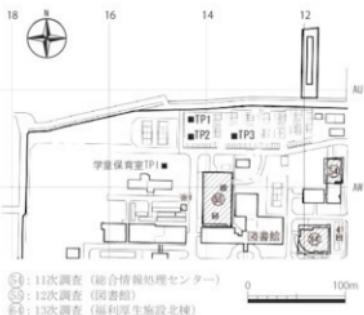


図6 調査地点の位置（縮尺1/5,000）

早期～前期の「黒色土」層にあたるものと考えられる。この層以下は湿地状堆積と見られる。

以上の二地点の土層堆積状況から、本調査地点では弥生時代前期以前は低位部にあたることが予測されたが、詳細なデータはないことから、計画建物予定地内の3ヵ所に試掘坑を設定し、確認調査を行うこととした。

調査は2010年4月23～28日に、調査員一名が担当して実施した。

### b. 調査の概要

3ヵ所の試掘坑のうち北西

部をTP1、南西部をTP2、

南東部をTP3とする（図

6）。

#### (1) 層序（図7）

1層：造成土である。上面の標高4.72～5.1mを測る。

<近代>（TP1：2・3層、TP2：2・3層、TP3：2・3層）

2層：暗青灰色粘質土で、上面の標高3.1～3.2mを測る。

TP1では粗砂が含まれる。

3層：暗灰色を呈する粘質土層である。上面の標高2.95～3.07mを測る。

<近世>（TP1：4・5層、TP2：5・6層、TP3：4～6層）

4～6層は黄褐色系の粘質

土を主体としており、鉄分・マンガンの沈着により分層される。TP3では灰～青色系の土色を呈し、何らかの要因でグライ化しているものと考えられる。

4層：TP1・2では黄褐色粘質土でマンガン・鉄分、細砂を含む。TP3では灰色粘質土である。上面の標高2.97～3.01mを測る。

5層：黄灰褐色を呈する粘質土でマンガンを少量、鉄分を含む。TP3では青灰色粘質土である。上面の標高2.85～2.88mを測る。

6層：TP3で確認した暗緑灰色粘質土である。上面の標高2.80mを測る。4～6層は近世と考えられる。

<中世>（TP1・TP2：7～10層、TP3：7・8層）

7層：黄灰色～褐灰色粘質土で、マンガン少量、鉄分を含む。TP3では灰色が強い色調を呈する。上面の標高2.78～2.80mを測る。

8層：淡灰～黄灰色を呈する粘質土で、マンガン・鉄分を含む。TP3ではグライ化が認められ、若干青みを帯びている。上面の標高2.65～2.68mを測る。

9・10層はTP1・2で確認され、TP3では認められなかった。

9層：淡灰色粘質土で、マンガン、鉄分を少し含む。上面の標高2.53～2.56mを測る。

10層：灰色～淡灰色粘質土である。TP2では若干青みを帯びる。上面の標高2.38～2.44mを測る。9・10層に

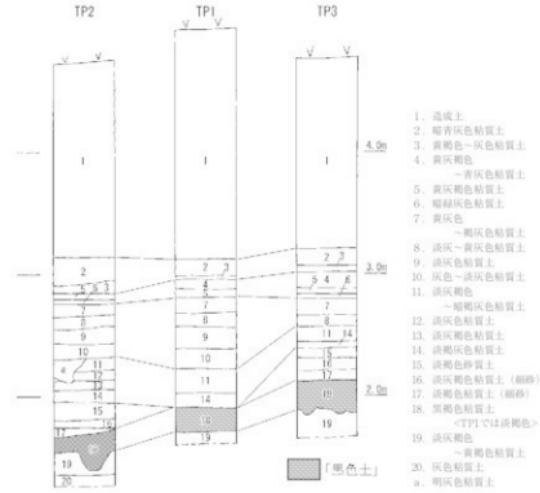


図7 土層柱状図（縮尺1/40）

については若干グライ化が認められ、あるいは溝の埋土の可能性も考えられるが、今回の試掘坑内では確認できていない。

<古墳時代～古代> (TP 1 : 11・14層、TP 2 : 11～14層、TP 3 : 11・12層)

11層：灰色粘質土で、古代の耕作土層と考えられる。TP 1・2では標高222～233mであるが、TP 3では255mと高い。

12層：淡褐色～暗褐色粘質土である。TP 2では標高221m、TP 3で標高241mである。

13層：淡灰色粘質土で、上面の標高2.13mを測る。

14層：淡褐色粘質土で、鉄分を多く含む。上面の標高2.02～2.05mを測る。12～14層は古代あるいは古墳時代層とみられるが、確定はできなかった。

<弥生時代> (TP 2 : 15・17層、TP 3 : 15～17層)

15層：淡褐色砂質土で、TP 2で標高1.95m、TP 3で標高2.39mを測る。

16層：淡灰褐色粘質土で、細紗を含む。TP 2で上面の標高1.80m、TP 3で標高2.30mを測る。

17層：淡褐色粘質土で、細紗を含む。TP 2で上面の標高1.73m、TP 3で標高2.22mを測る。

<弥生時代早～前期> (18層)

18層：黒褐色粘質土で、いわゆる「黒色土」層にあたる。上面の標高はTP 2で1.73m、TP 1で1.91m、TP 3で2.13mを測る。弥生時代早期～前期とされる。TP 1では色調が淡褐色と薄まり、TP 2と比較すると粘性が若干弱くなっている。

<縄文時代後期以前> (19・20層)

19層：淡灰褐色～黄褐色粘質土である。TP 1では炭化物、灰色粘土ブロックを含む特徴から、遺構埋土の可能性があるが、試掘坑範囲内では確定はできなかった。TP 2の標高1.56m、TP 1では標高1.70m、TP 3では標高1.90mである。標高の低いTP 2では灰色が強まり、粘性も高くなる。一方、標高の高いTP 3では黄褐色を呈する。

20層：TP 2で確認した灰色粘質土層である。上面の標高1.38mである。

## (2) 地形

南北方向の地形についてTP 1・TP 2の成果をみると、縄文後期層ではTP 2からTP 1に向けて、つまり北に向かって若干地形が高くなり、18層(「黒色土」)上面でもその状況は変わらない。一方東西方向については、TP 2とTP 3では東側が高く、西に下がる地形である。比高差は19層(縄文時代後期以前)で約50cm、18層上面(弥生時代前期)で40cmである。その後、15～17層(弥生時代)では砂質を主体とする土層の堆積により、低位部が埋まっていた状況がみられる。微高地にあたるTP 3にも15～17層の堆積は見られるが、TP 1では、18層の直上に14層の堆積が確認され、古代あるいは古墳時代に弥生時代の土層は削平されている。古代あるいは古墳時代層下面(TP 1・2 : 14層、TP 3 : 12層)の標高差も併せると、その時期にTP 1・2とTP 3の間では段があるものと予想される。この差は7層(中世層)上面には5cm程度とは解消され、以後、近世・近代ではほぼ水平堆積が認められる。

以上のように本調査地点の縄文時代以来の旧地形は、TP 3付近には微高地状の地形が広がり、TP 1・2側は低位部となっていることがわかる。第12次調査(図書館)地点と比較すると、同地点北端での「黒色土」上面の標高は20m、TP 2で17m、TP 1で19m、TP 3で213mである。同地点北端から南東方向のTP 3にかけて20～21mの微高地が広がり、これより北西方向に向けて低位部となる地形と考えられる。TP 3一帯には、第12次調査地点と同様、弥生時代前期の水田の存在も予測される。

## c.まとめ

本調査地点の成果から、縄文時代～近代にかけての土層堆積状況を確認し、津島キャンパスの北西端部の旧地

形を復元するためのデータを得ることができた。特に「黒色土」の上面レベルが第12次調査地点北端と近似する状況から、調査地点南東部（TP 3付近）では弥生時代前期の水田畦畔の存在が予測され、また北西部では低部位が拡がることがわかった。

なお、本試掘・確認調査の成果をうけ、同年7月から津島岡大遺跡第34次調査を実施しており、その報告を本書第II部第1章に掲載している。  
 (岩崎 志保)

- 註 1) 岩崎志保2003「津島岡大遺跡第12次調査」[津島岡大遺跡11] 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊  
 2) 岩崎志保2010「1. 学童保育室新設予定地」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009] 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 2. 生協プレハブ設置予定地（調査番号4、津島南BC12区）

### a. 調査の経緯

岡山大学生協が物販のためのプレハブ設置を計画した。予定地は岡山大学津島南地区東半の北西角にある福利厚生施設（ピーチュニオン）の南に位置する緑地帯である。周辺では津島岡大遺跡第10次調査（保健環境センター）、第14次調査（福利厚生施設）を実施しており、第10次調査地点では弥生時代や古墳時代の集落、第14次調査地点では弥生時代の水田や古墳時代から中世の溝が確認されている。

今回、プレハブという簡易建物で、包含層に影響のおよぶ深度の掘削はなく、敷地面積は約100m<sup>2</sup>と狭小であったため、発掘調査の必要は無かつたが、周辺調査区における遺構・遺物の検出状況を鑑みて、当地点についても状況把握が必要と判断し、試掘・確認調査を行うこととした。

調査は予定地の東寄りに試掘坑1か所（東西20m、南北12m）を設定、調査員1名が担当し、2011年1月17日に実施した。

### b. 調査の概要

#### (1) 層序（図9）

本調査地点では以下の13層を確認した。これらの土層の諸特徴は、隣接する第14次調査地点南壁の土層とはほぼ対応しており、その成果に基づき各土層の時期を推定した<sup>1)</sup>。

1層：明黄褐色マサ土を主体とする近・現代の造成土である。上面高約4.5m、層厚約0.9mである。

2～7層は、鉄分やマンガンが帶状に凝集すること、各層が水平堆積を示すことから、耕作土と考えられる。

2層：灰茶褐色砂質土で、上面で南北方向の畑の歓を確認した。砂質が強く、小穢を多く含む。上面高約3.6m、層厚約0.15mである。近代の耕作土である。

3層：茶褐色砂質土で、上面高約3.45m、層厚約0.15mである。

4層：淡茶褐色砂質土で、マンガンを多く含む。上面高約3.3m、層厚約0.1mである。3・4層は近世の耕作土である。

5層：灰褐色弱粘質土で、マンガンを多く含む。上面高約3.2m、層厚約0.1mである。

6層：暗灰褐色弱粘質土で、上面高約3.1m、層厚約0.05mである。5・6層は中世の耕作土と考えられる。

7層：明灰色弱粘質土で、鉄分の沈着が顕著である。須恵器小片が出土したが、細片のため時期は明らかでな



図8 調査地点の位置（縮尺1/4,000）

い。上面高約3.05m、層厚約0.05mである。

8層：灰褐色粘質土で、鉄分、マンガンを多く含む。上面高約3.0m、層厚約0.05mである。

9層：暗灰褐色砂質土で、マンガンを多く含む。北東から南西方向へ向かって下がる部分に認められる。暗灰褐色弱粘質土ブロックを多く含むことから、何らかの要因で緩い傾斜地に再堆積した土層の可能性がある。上面高約2.95m、層厚約0.1mである。

10層：黄茶褐色～茶褐色粗砂である。マンガンを多く含む。縄文時代後期の基盤層と考えられる。上面高約2.85～2.95m、層厚約0.05～0.15mである。

11層：灰茶褐色粗砂である。凝集の著しいマンガン塊が観察された。マンガン塊は9層から垂下する樹根の痕跡と思われる灰色粘土ブロックの周辺に形成されている。上面高約2.8m、層厚約0.1～0.35mである。

12層：茶褐色粗砂で、マンガンを多く含む。10～12層の変化は漸移的で、層理面が不明瞭な部分もある。上面高約2.45～2.7m、層厚は0.35m以上である。

13層：明灰茶褐色砂疊層である。砂疊層を構成する円礫は径3～10cm程度である。上面高約2.35～2.55m、層厚は0.2m以上である。

#### (2) 遺構・遺物

本調査区では遺構は確認されなかった。遺物は7層中から須恵器小片1点が出土した。

#### c.まとめ

本調査で確認された土層は、当地点の北に位置する第14次調査の土層に対応しており、同地点に広がる微高地はさらに南に続くものとみられる。また、同地点では、調査区の西半に北東～南西方向の谷が入り込むこともわかつており、本調査区のさらに西に第14次調査地点の谷のがびているものと考えられる。

以上、本調査の結果、第14次調査の成果を追認・補強するデータ、津島岡大遺跡のほぼ中央部における地形復元のデータを得ることができた。  
(野崎)

註 1) 横田美香・岩崎志保1997『津島岡大遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊

## 第3節 立会調査の概要

### 1. 調査の実施状況

2010年度の立会調査として、津島地区では15事業で47件を実施した。本年度の事業は新規の建物建設（薬学部講義棟・国際交流会館）に伴うものと、外灯整備やゲート取扱工事など、津島地区構内の安全管理対策事業に伴うものが大半を占める。近年の立会調査件数増加の一因となっていた耐震改修工事は薬学部以外では行われなかつたが、他の事業が実施され、立会件数が大幅に減少することはなかつた。

工事掘削によって中世層以下の包含層および特徴的な土層を確認した立会調査には以下の2事業がある。

本節では、縄文時代の土層および中世以前の包含層を確認した調査について個別に報告し、その他の調査につ

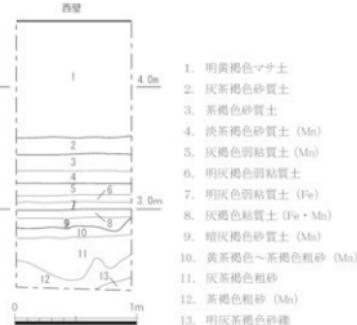


図9 土層断面図 (縮尺1/40)

いでは中世以前の包含層を確認したものについて触れておく。

その他、津島キャンパス北側に位置する半田山において、土砂流失防止を目的とした法面整備工事が実施されている（調査番号27）。自重で支持するふとん籠を設置するもので、根切りをほとんど伴わない施工法である。立ち会った際には、すでに土砂流失により地山が露出しており、遺構・遺物も確認されなかった。

## 2. 薬学部改修電気設備工事（調査番号34、津島南BC・BD18）

### a. 調査地点の位置

薬学部本館の改修工事および新館の建設とともに環境整備事業として、周辺の外灯整備が行われた。本調査地点は第30次調査地点の東、第33次調査地点南の植え込みに位置する。特に第30次調査地点では、東西方向に掘削された近世・近代の里境溝が確認されており、本調査地点でも検出されることが予想された。

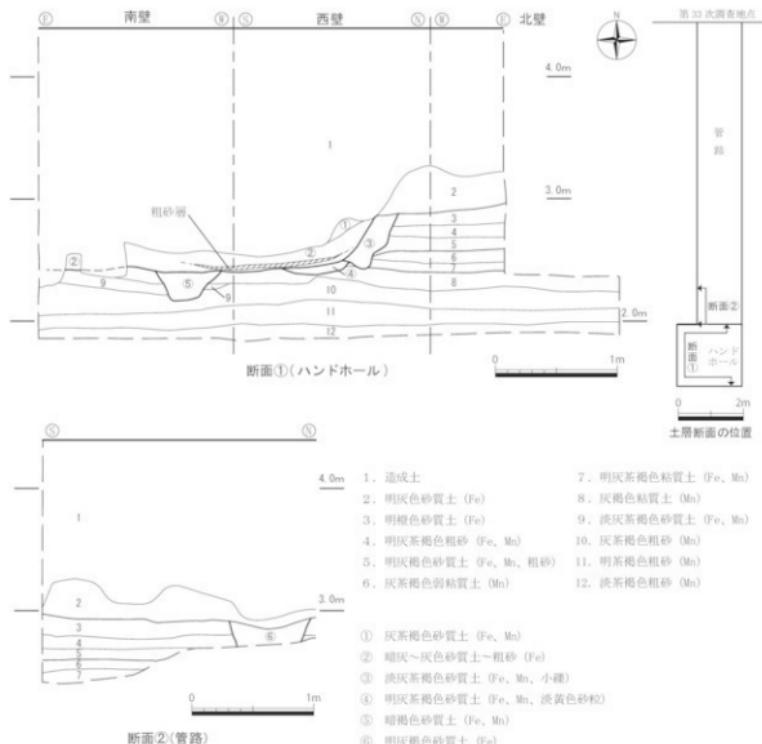


図10 土層断面図（縮尺1/40）

### b. 調査成果 (図10)

本調査区は第30次調査地点から南にのびる約9mの管路とその南に設定されたハンドホール部分からなる。管路部分では、ほとんどが近世層までの掘削にとどまっているが、南から約1mの範囲で古代・中世層と考えられる6・7層まで掘削がおよんでいる。また、南から約1.5mの位置では近世に属する溝を確認した。

ハンドホール部分では、現地表面から約2.6m、縄文時代後期の基盤層下まで掘削がおよぶ。ここでは縄文時代から近代に属する土層および近世・近代の溝1条を確認した。

**【層序】** 1層は近代の造成土で、条里の里塙溝を埋めている。2層は近代の耕作土である。3～5層は砂質土や粗砂が主体となる近世の土層である。6層は灰茶褐色粘質土で中世の土層である。7層は明灰褐色粘質土で、第30次・33次調査地点の成果を参考にすれば、古代の土層に比定できよう。8層は灰褐色粘質土で、弥生～古墳時代の包含層と考えられる。9層はハンドホール地点南壁で部分的に確認された灰茶褐色砂質土である。10～12層は茶褐色系の色調を呈する粗砂層で、縄文時代後期以前の土層に比定される。

**【遺構】** 東西方向に掘削された溝2条を確認した。管路部分のものは幅約0.65m、深さについては、掘削深度が浅く、底面を確認できていないため不明である。ハンドホール部分で確認した溝は、幅約1.4m以上、深さ約0.6mをはかる。溝の位置、規模、堆積状況などから、第30次調査地点で検出した近世・近代溝に連接するものである。

### 3. その他の調査地点

本年度の立会調査のうち、上記以外で中世以前の包含層を確認したものとして外灯整備工事（教育学部）＜調査番号8＞、国際交流会館排水桿掘削工事＜調査番号37＞がある。

＜調査番号8＞ 本調査地点では現地表面より0.9m掘削したところで、弥生時代前期の土層と考えられる黒褐色砂質土を確認した。直上には中世～近世の土層とみられる淡灰褐色砂質土があり、中世～近世段階に削平をうけたものと考えられる。黒褐色砂質土は、現地表（標高約4.5m）下約0.9mであり、津島地区のなかでは浅い深度で確認されている。この点は教育学部周辺におけるこれまでの成果<sup>11)</sup>を追認するものである。

註 1) 岩崎志保2008「3. 公共下水道接続工事（教育学部）に伴う立会調査」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006]など

＜調査番号37＞ 本調査は津島岡大遺跡第34次調査終了後、調査区内に排水桿を設置するため、1.5m四方で4か所を掘削したため実施した。津島岡大遺跡第34次調査は、新設建物の基礎による破壊のおよばない中世層上面で発掘を停止している。本調査における4地点の掘削はいずれも中世層上面からで、掘削深度は0.55mである。

土層はいずれの掘削箇所も4層に分層される。1層は緑灰色粘質土で鉄分を多く含む。2層は暗灰白色粘質土で鉄分を多く含む。3層は暗灰色粘質土である。4層は暗灰黄色粘質土で鉄分を多く含む。土層の時期は、発掘調査の成果から、1層が中世、4層が弥生時代後期と考えられる。

遺構はいずれの掘削箇所においても確認されていない。（野崎）



図11 土層柱状図（縮尺1/30）



図12 土層柱状図（縮尺1/30）

表1 2010年度津島地区調査一覧

種類	番号	構内座標	調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容
発掘	1	BB17-18, BC17-18	農学部講義棟【津島岡大道跡第33次発掘調査】	7.36~11.31	274	0.7	繩文時代中期～近世の遺構・遺物、 繩文時代中期のピット、弥生時代 の土坑・溝、古墳時代～古代の祭祀 建物、古代・中世の道路状況
	2	AU-AV13-14	国際交流会館【津島岡大道跡第34次発掘調査】	7.30~9.28	23~35	11~20	弥生時代初期祭祀跡・溝、近世土筑 群
試験 確認	3	AU13・14	国際交流会館予定地	4.23~28	34	16~19	繩文層まで掘削
	4	BC12	生協プレハブ予定地	2011.11.17	22	0.9	繩文層まで掘削
外壁整備工事	5	AX-AY00	新技術研究支援センター	4.19	115	-	近世層確認
	6	AU03	馬場	4.19	1	-	造成土内
	7	AU04・05	工学部	4.20	12~13	-	近代層確認
	8	AZ06	教育学部	4.23	11	0.7	黒色土層確認
	9	AZ07	自然生命科学研究支援センター	4.25	12	-	既設内
	10	AZ08・09, BA09	理学部	4.28	115~125	1	近世層確認
	11	AW12	図書館	4.30, 5.6	125	-	造成土内
	12	BA13-14	文・法・経済学部	5.6~12	13	-	造成土内
	13	BD03-04, BE02	グール	5.13, 14	115~12	1.1	近代層確認
	14	BE12	清水記念体育館	5.24	125	-	造成土内
	15	BD18-19・20	農業植物園	5.25	12~135	0.9	近世層確認
	16	BE17-18	農学部	5.26	115~12	-	造成土内
	17	BD14-15	建立五十周年記念館	5.27, 28	11~16	1.15	近世層、近代石組用木脚確認
	18		電気	5.17~20	質B07-08S, ハンドホール126	0.7	近世層確認
	19		ガス	5.18, 20	0.75~11	0.85	近世層確認
	20	BB-BC17	複合研究棟Ⅱ期 (農学系) 墓、廻遊 石垣に伴う支障管理 設工事	5.22	15	-	既設内
	21		樹木移植	6.23	0.3~0.45	-	造成土内
	22		木板打ちに伴う土支障確認	6.25	16	-	既設内
	23		生活排水・実験排水 生活排水・実験排水	7.5, 9	0.87~14	0.8	古代層確認
立会	24	EP08	一般教育施設駐車場と水管改修工事	5.26	0.9	-	既設内
	25	AX13	図書館漏水修理工事	8.1	0.75	-	造成土内
	26	BG11	テニスコート施設復旧工事	11.2	19	-	既設内、復舊物、岡山西面回収
	27	AO12	半田山正面整備工事	11.17	0.5	-	道樋・遺物なし
	28	AX~AZ06	東門	12.14~17	質B08-09, ハンドホール69	0.85	近世層確認
	29	BC-BD12, BD11, BD-BE10	大学会館南	12.20~22~24, 27~28, 2011.1.17-18	質B06-08~07, ハンドホール69~105	0.95	近代層確認
	30	BD13-14・15, BC15, BE15	本部棲西・南	2011.5~27	質B06-10, ハンドホール69~102	-	造成土内
	31	BD16	農学部	2011.11	0.6	-	造成土内
	32	BA13	西門	2011.12	0.85	-	造成土内
ゲート取設工事	33	BD16-17, BC17	外部PS基礎設置工事	12.8~17	0.5~0.9	-	既設内
	34	BC-BD18	農学部本館改修工事	12.15~17~22, 2011.11~13, 21	質B07-128, ハンドホール620	1.1	(質路) 中世層確認、(ハンドホール) 繩文時代層確認、近世・近代里塙構 造確認
	35	BB17	外壁設置工事	2011.2.2~8, 14~16	質B06-074~074, 外灯基礎108~134	0.85	(質路) 近世・近代、(外灯) 平掛 層確認
	36	BF15	農学部水道管復旧工事(緊急対応)	2011.1.17	1.1	-	既設内
	37	AU-AV13-14	国際交流会館	10.12	[中層] -0.54~-0.59	-	洪災冠層確認
	38	AV13	給水・ガス引き込み	2011.18~20	1.56	-	造成土内
	39	AV13	電気工事	2011.28, 2.28, 31	0.85~11	-	造成土内
	40	AU-AV13-14	内水・雨水配管工事	2011.28~28	1.4~207	1.6~195	近世層確認
	41	BC12	生協プレハブ設置工事	2011.19, 2.14, 32	0.26~106	-	既設内
	42		プレハブ設置工事	2011.19	0.52	-	造成土内
ゲート取設機動整備工事	43	BC15	グッジョブ支援 センター	2011.2.24, 32~8	0.7~12	-	既設内
	44		電気設備工事	2011.3.2~4	0.62~195	-	既設内
	45	BD-BE13-14, BD19	農学部樹木移植	2011.12.0	0.5~0.8	-	造成土内
	46	BD-BE13	農学部室内板張設	2011.12.4	0.93	-	造成土内
	47	AZ02-03	耐震化地盤強化	2011.21	0.5	-	造成土内
ゲート取設機動整備工事	48	AW-AZ04	工学部テニスコートフェン ス・門扉	2011.2.8	0.87~126	0.87	近世層確認
	49	BD13	農学部前用水槽	2011.2.18	0.65	-	造成土内
	50	AZ05	工学部自動車小屋基礎工事	2011.3.22	0.58	-	造成土内
ゲート取設機動整備工事	51	BA10	理学部水道管漏水調査(緊急対応)	2011.3.22~25	0.96~1.7	-	既設内

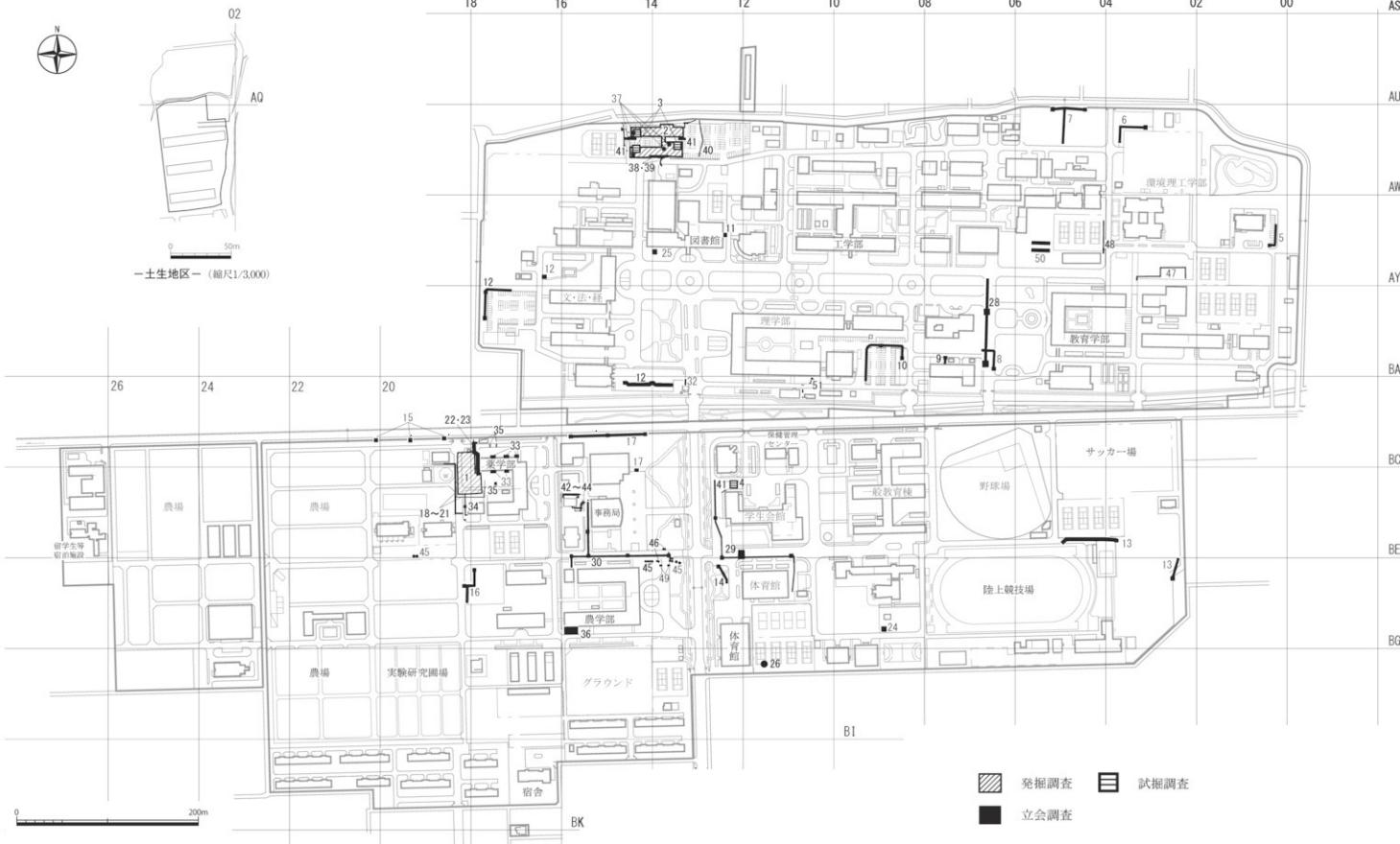


図13 2010年度の調査地点【1】—津島地区— (縮尺1/4,000)

## 第4節 津島岡大遺跡の研究

### 縄文時代後期～「突帯文期」におけるマメ・イネ圧痕 —圧痕レプリカ法による岡山南部平野における調査成果から—

#### はじめに

縄文時代の植物利用に関する研究において、植物遺存体分析からのアプローチは一つのおおきな柱となっている。そのなかで、コンタミネーションの問題を極力排し、より確実性の高い手法として注目されるのが圧痕レプリカ法である。この手法による研究は多くの成果をあげ、縄文時代ではイネに関する議論や、列島内でのマメ栽培の可能性についての積極的評価を生み出している（中山 2009、小畠 2010）。また、「突帯文期」<sup>1)</sup>ではイネに加えてアワ・キビなどの雑穀資料の報告も各地で増加し、農耕開始期の問題に重要な資料を提供している。

今回調査を行った遺跡が分布する地域でも、イネを中心に穀物の証拠を求める研究や関連資料の報告が積極的に行われてきた（高橋 1992・1997他）。ここでは、こうした岡山県の南部平野を対象に行った圧痕レプリカ法による調査成果の一部を報告したい。調査では縄文時代後期～弥生時代前期の遺跡を対象としたが、その中で縄文時代後期～「突帯文期」の成果をまとめる。現段階では、植物の種についての同定が十分でない資料も多く、今後の検討課題も多いが、特にマメ・イネを中心に、それ以外の資料も多少加えて報告する。

#### 1. 土器圧痕の調査

##### a. 調査対象遺跡の位置（図14）

岡山県の南部平野に位置する5遺跡（津島岡大遺跡、百間川沢田遺跡、南溝手遺跡、窪木遺跡、上東中嶋遺跡）の資料調査を行った。その中で圧痕の種類を同定できたのは、窪木遺跡以外の4遺跡である。

津島岡大遺跡と百間川沢田遺跡（岡山市）は岡山県の中央部を南流する旭川下流域の遺跡であり、同川を挟んで立地する。一方、南溝手遺跡と窪木遺跡（総社市）、そして上東中嶋遺跡（倉敷市）は、旭川より西側を南流する足守川流域に分布する遺跡で、前2遺跡は互いに接する位置にあることから、一連の遺跡の広がりと認識できる。また、上東中嶋遺跡からは約10km北側、つまり内陸側の平野部に位置する。

##### b. 調査方法（図15）

調査方法は圧痕レプリカ法を実施した。調査は対象資料

について、できるだけ多くの破片の表面観察を行い、可能性のある土器を抽出することから始めた。抽出した土器の圧痕を観察した後、決定した資料の圧痕部分に潤滑剤を塗布し（図15-1）、硬化剤を混ぜたシリコン樹脂を注射器によって注入した（同-2・3）。次に、電子顕微鏡用のピンに増粘剤を混ぜ込んだシリコンを塗りつけ（同-4）、圧痕部に注入済みのシリコン上に押しつけて接着させる（同-5・6）。シリコン樹脂部分が硬化した後、



図14 調査遺跡の位置

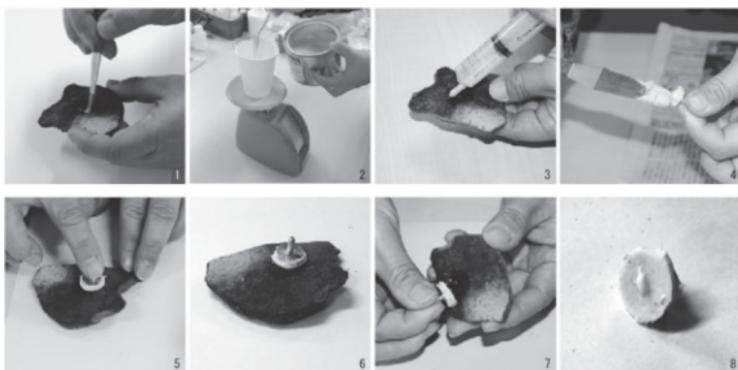


図15 レプリカ作成作業風景

ピンを土器から外して圧痕内のシリコン型を取り出す（同－7・8）。それを走査型電子顕微鏡で観察して種を同定する。

この一連の作業は、型取りまでを、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターをはじめとする資料保管場所で行い、走査型電子顕微鏡撮影および種の同定については、熊本大学文学部小畠弘己研究室に依頼する形をとった。

## 2. 各遺跡の概要と調査成果

### (1) 津島岡大遺跡（岡山市北区津島中）

**【遺跡の概要】** 旭川下流域西岸に位置し、北側の半田山丘陵を背に海に向かって広がる平野の北端となる扇端部に立地する。1983年以降、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し、縄文時代中・後期、そして「突帯文期」<sup>2)</sup>以降の発掘調査成果が報告されている。その中で、植物遺存体の資料としては、突帯文土器のイネ圧痕（第2次調査）や縄文時代後期中葉土器胎土中のイネのプラント・オ・パール（藤原 1994）、そして縄文時代後期あるいは「突帯文期」の貯蔵穴などから抽出された植物種実（沖・山本 1994、沖 1996）があげられる。

**【対象資料の概要】** 調査対象とした遺物は、同遺跡の第2次・第3次・第5次・第6次・第9次・第15次・第17次・第22次<sup>3)</sup>の各調査における縄文時代後期と「突帯文期」の土器、そして弥生時代前期土器の一部である（表2）。それらは、貯蔵穴などの遺構に加え、河道や微高地部の包含層から出土しており、調査点数は総数34555点にのぼる。その内訳は、縄文時代後期前葉が9507点、同中葉が13738点、津島岡大式（平井勝 1992）を中心とした「突帯文期」が5290点、弥生時代前期が1497点、縄文後期前葉～弥生前期で未分類のものが4523点である。接合個体も大形破片も1cm程度の小破片も1点と数えており、一概に量の比較はできないが調査量の参考としたい。

**【調査結果】** 本遺跡で圧痕の可能性があった土器片は86点で、その中で動・植物と認識されたのは36点であり、調査点数が少ない第2次調査を除くと、圧痕土器の抽出率は、地点や時期別ともに0.07～0.13%であり、おむね0.1%前後と言える<sup>4)</sup>。

本報告対象時期で植物の種が同定されたのは、縄文時代後期中葉のダイズ属ダイズ（第5次調査）、「突帯文期」のササゲ属アズキ（第6次調査）とイネ（第2次調査）の各1点である。その他に、不明植物・種子が25点、昆虫あるいは蛹が1点、巻き貝1点のほか不明1点があげられる（表2）。

表2 圧痕調査一覧

遺跡名	所在地住所	調査 調査 点数	調査対象時期	内訳点数	採取 り数	動・植物 遺物点数	主な圧痕の種類	掲載No.	掲載写真番号	報告書名	所属 機関
津島岡大道路 第2調査地点		76	「奥帯文」	—	1	1	イネ	4	図16-13~16	岡山大学津島地区 道路群の調査Ⅱ	
津島岡大道路 第3調査地点		5357	縄文後期前業 「奥帯文」	1134 4223	10	2 0	不明種子			津島岡大道路3	
津島岡大道路 第5調査地点	岡山市北区 津島中	13738	縄文後期中業	—	44	18	ダイズ属ダイズ 不明種子、葉片 巻き貝	1	図16-1~4 10~12 16~17 16~17	津島岡大道路4	
津島岡大道路 第6調査地点		4523	縄文後期前業 「奥帯文」 弥生初期	—	3	1 0	ササゲ属アズキ	3	図16-9~12	津島岡大道路6	A
津島岡大道路 第9調査地点		2967	縄文後期前業 弥生初期	870 1497	9	1 5	不明種子 イネ4点、不明種子			津島岡大道路10	
津島岡大道路 第15調査地点		3087	縄文後期前業 「奥帯文」	2096 991	5	3 1	不明種子	13	図18-49~52	津島岡大道路14	
津島岡大道路 第17調査地点		1178	縄文後期前業	—	12	4	昆虫1点、不明種子	18	図18-69~72	津島岡大道路16	
津島岡大道路 第22調査地点		4229	縄文後期前業	—	2	0				津島岡大道路16	
小計		34555		86	36						
百間川 沢田遺跡	岡山市中区 沢田	22742	縄文後期中業 「奥帯文」 弥生初期	13258 9484	29	8 6 2	フルマメ1点、不明種子 イネ2点、不明種子 イネ、不明種子	2~14 5~6 5~6	図16~5~8 図18~53~56 図16~17~24	百間川沢田遺跡 3~4	B
南溝手遺跡	岡山県総社市 南溝手	2005	縄文後期中業 縄文後期前業 「奥帯文」	—	7	1 2	サンショウ?	15 9 8	図18~57~60 図17~33~36 図17~29~32	南溝手遺跡1~2	C
蘆木遺跡	岡山県総社市 蘆木	5380	縄文後期~ 「奥帯文」	—	1	1	不明種子			蘆木遺跡1~2	
上東中嶋遺跡	岡山県総社市 上東	236	「奥帯文」	—	4	3	イネ1点、不明種子	7	図17~25~28	上東中嶋遺跡	B
总数		64958		127	60						

・報告書名：文部省「遺跡の参考文献」参照。

・所属機関 A：岡山大学環境文化財調査研究センター

・時一期：報告者の記載を尊重したが、晚期後業あるいは末業・弥生時代早期の記載は「奥帯文期」

B：岡山県古代古墳文化財センター

と変更した。

C：総社市教育委員会

<ダイズ属ダイズ>（図16-No1、1~4） 圧痕は深鉢口縁部付近の外面に確認された。圧痕の大きさは5.11mm×1.71mm×5.39mmを測る。これは「ワクド石タイプ」（山崎 2005 a・b・中沢・丑野 2005）と呼ばれ、近年の研究から栽培種であるダイズ属ダイズのヘソ部分と評価された（小畠・佐々木・仙波 2007）ものと一致する。出土地点は第5次調査地点の河道である。共伴土器の時期は縄文時代後期中業（彦崎K2式の前）に位置づけられる（阿部 1994）。また、共伴土器片における炭化物の炭素年代測定値結果からは、およそ3800calBP前後（約1850calBC前後）の数値がでており、彦崎K2式との近似性が指摘されている（工藤 2011）<sup>5)</sup>。

<ササゲ属アズキ>（図16-No3、9~12） 圧痕は浅鉢胴部断面に確認された。大きさは6.8mm×3.8mmを測る。第6次調査地点の河道から出土し、層位的に縄文後期の可能性を有すが、形態的に「突帯文期」と考えられる。

<イネ>（図16-No4、13~16） 圧痕は突帯文土器の深鉢外表面に残される。口縁部の破片である。圧痕の大きさは初の部分で6.2mm×2.9mm、小穂軸部分を入れると長さは6.8mmとなる。第2次調査地点の包含層から出土しており、突帯文土器終末期にあたる沢田式のやや古い段階に位置づけられている（柴 1986）が、逆に、沢田式に統く突帯文土器最終末の可能性も考えられる（中村 2006）。

<その他>（図17-No10~12 37~48、図18-No13~16~18 49~52・61~72） 7点を掲載した。内訳は第5次調査の植物種子3点（図17-No10~12）、貝類および不明なもの2点（図18-No16~17）、第15次調査の植物種

子1点（図18-No13）、第17次調査の昆虫あるいは蛹1点（図18-No18）である。第5次調査資料は縄文時代後期中葉、第17次調査資料は後期前葉に属する。第15次調査資料は小片だが共伴遺物から後期前葉の可能性が高い。

圧痕は、No10~13・17は深鉢胴部あるいは口縁部付近の内面、No16は深鉢口縁部断面、No18は深鉢底部外面にそれぞれ検出された。No10・11は8.7mm×4.1mmと9.5mm×4.2mmをそれぞれ測り、丸みをもつ大ぶりな形態を示す。No12は4.4mm×1.8mmで先端が尖る。No13は3.2mm×2mmを測り、小粒で丸みをもつ。No16は5.6mm×4mm（最大幅）を測る巻き貝である。No17は直径4.8mmで渦巻き状の形態が見て取れる。貝類とは同定されていないが、筆者としてはその可能性も残したい。No18は10mm×4.7mm（最大幅）を測る。丸みをもち昆虫か蛹とされる。

### （2）百間川沢田遺跡（岡山市北区沢田）

【遺跡の概要】 旭川下流域東岸に位置する。岡山県教育委員会の調査から、縄文時代後期～中世の集落や耕作域が報告される。縄文時代後期中葉には操山山塊の裾部に貯蔵穴群が形成され、「突帯文期」には河道を中心に豊富な遺物が出土する。弥生時代前期の水田も注目される。

【対象資料の概要と調査結果】 調査した土器は縄文時代後期中葉（四元式）（平井勝 1993）が3258点、「突帯文期」（沢田式）（平井勝 1988-1992）を中心に弥生時代前期を含むものが9484点である（表2）。前者は貯蔵穴およびその被覆土層から、後者は土坑および河道から、それぞれ出土している。

本報告対象時期で種が同定できたものは、縄文時代後期中葉のダイズ属フルマメ1点、「突帯文期」のイネ2点である。その他に、不明種子が4点（縄文後期中葉3点、「突帯文期」1点）、茎状のものが6点（縄文後期中葉2点、「突帯文期」4点）確認されており、その内の後期中葉の可能性が高い1点をここに掲載する。

＜ダイズ属フルマメ＞（図16-No2 5~8） 深鉢の胴部断面で検出された。圧痕の大きさは5.01mm×2.42mm×5.56mmを測る。長軸値が津島岡大遺跡出土のダイズのヘソ部分の長さと近似しており、大きさの違いは明瞭である。

＜イネ＞（図16-No5 17~20、No6 21~24） No5は、鉢あるいは壺の外縁に圧痕が検出された。圧痕の周囲は器表面がはじけた状態を示す。全長は6.9mmであるが、初部分は5.7mm×3.5mm、小穂軸部分を含む長さは6.1mmを測る。

No6は浅鉢口縁部の内面に圧痕が検出された。初部分は6mm×3.7mm、小穂軸部分を含む長さは6.5mmを測る。小穂軸の脇には護頸が見て取れる。

＜その他＞（図18-No14 53~56） No14は、深鉢の胴部外面に圧痕が確認された。圧痕の大きさは28mm×32mmである。種の同定はなされていないが、筆者としては、その特徴からカラスザンショウの可能性を考えたい。

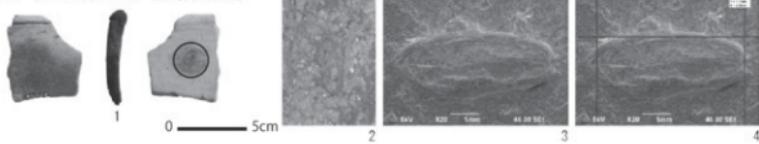
### （3）南溝手遺跡・窪木遺跡（総社市南溝手・窪木）

【遺跡の概要】 遺跡は東側の丘陵裾部から平野部にかけてひろがる。南溝手遺跡では縄文時代後期および「突帯文期」における植物遺存体の資料報告が比較的多く、イネ圧痕土器2点のほかの縄文後期のマメ炭化種子（松谷 1996）や土器胎土中のイネのプランツ・オ・パール（藤原 1995）が報告されている。

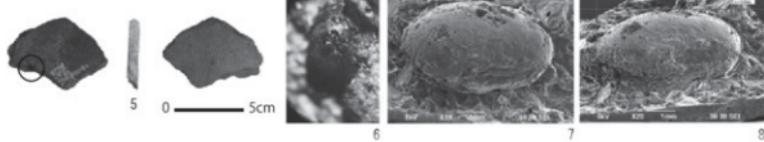
【対象資料の概要と調査結果】 調査した資料は、土器溜まり等の遺構と河道・包含層から出土した遺物である。南溝手遺跡において2005点（縄文時代後期中葉～「突帯文期」）、窪木遺跡では5380点（縄文時代晚期～「突帯文期」）を数える（表2）。前述した既に報告されているイネ圧痕資料の他には植物種子3点（南溝手遺跡2点、窪木遺跡1点）が確認されたのみである。ここでは、南溝手遺跡から、そのイネの既往の報告資料2点とその他種子1点を掲載する。

＜イネ＞（図17-No8 29~32、No9 33~36） No8は浅鉢の口縁部、やや内面寄りに圧痕がのこる。6mm×29mmの大きさを測る。南溝手遺跡河道1の土器群に含まれており、その時期は、津島岡大式の前段階～沢田式の幅で考えられている（平井 1997）。

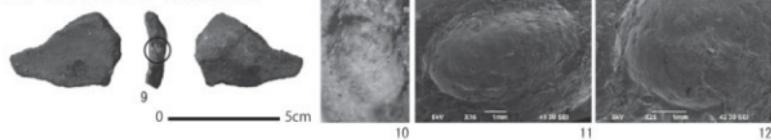
No1 (ダイス属ダイス) (津島岡大5次)



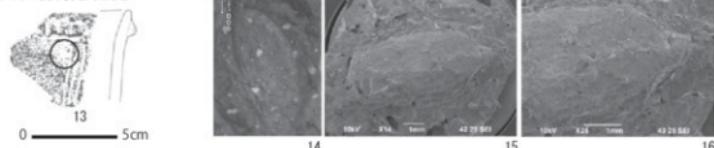
No2 (ダイス属フルマメ) (百間川沢田)



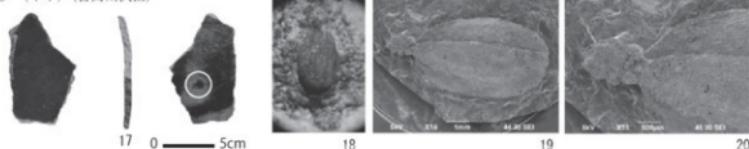
No3 (ササゲ属アズキ) (津島岡大6次)



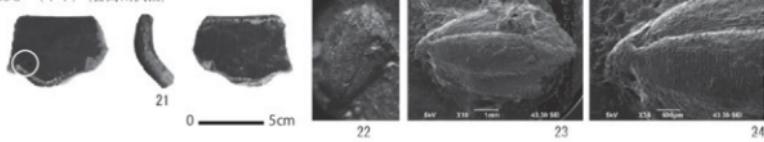
No4 (イネ) (津島岡大2次)



No5 (イネ) (百間川沢田)



No6 (イネ) (百間川沢田)

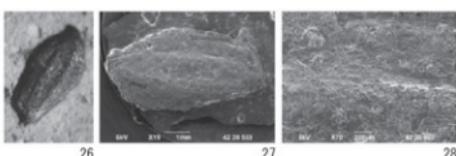
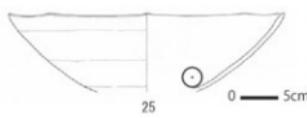


( ) 出土遺跡名を示す。(以下、同じ)

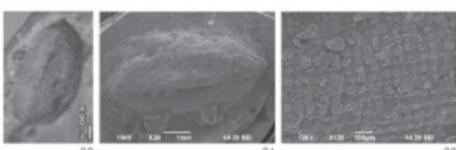
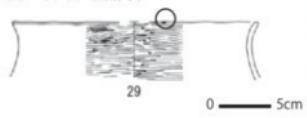
右から3列目：実体顕微鏡写真 右2列：SEM画像（以下、同じ）

図16 圧痕土器と圧痕写真1

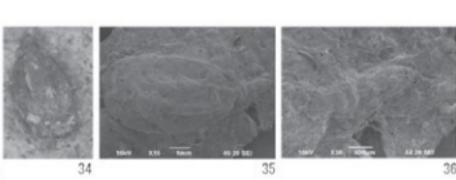
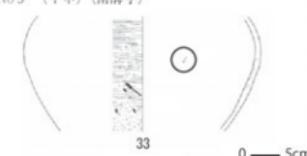
No7 (イネ) (上東中縦)



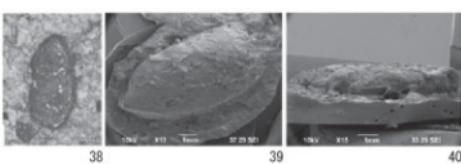
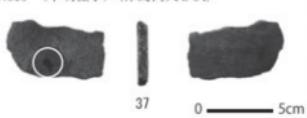
No8 (イネ) (南溝手)



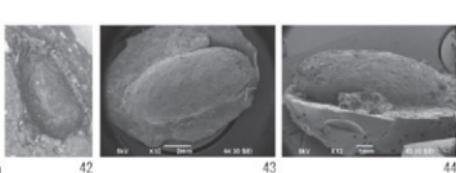
No9 (イネ) (南溝手)



No10 (不明種子) (津島岡大5次)



No11 (不明種子) (津島岡大5次)



No12 (不明種子) (津島岡大5次)

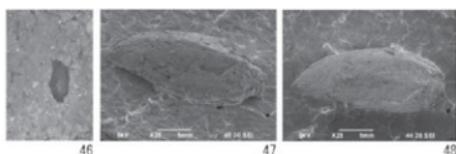
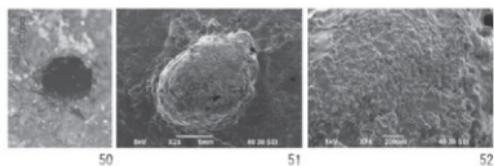
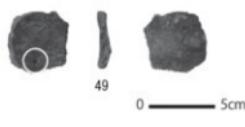
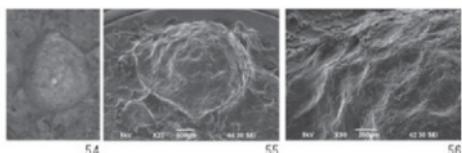
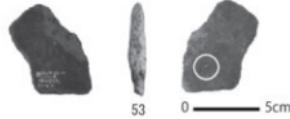


図17 圧痕土器と圧痕写真2

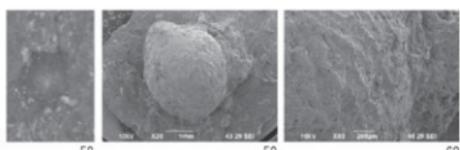
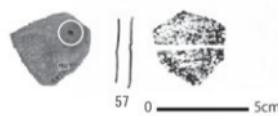
No13 (不明種子) (津島岡大15次)



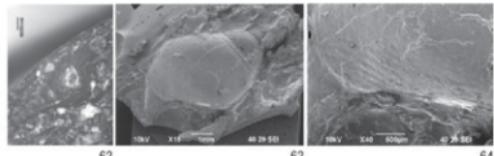
No14 (不明種子) (百間川沢田)



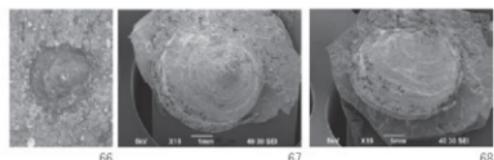
No15 (サンショウ?) (南溝手)



No16 (巻き貝) (津島岡大5次)



No17 (不明) (津島岡大5次)



No18 (昆虫か蛹) (津島岡大17次)

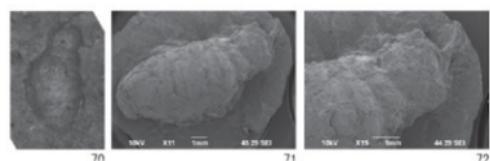
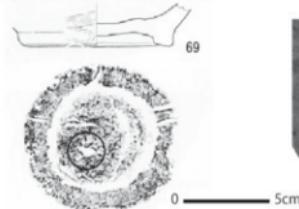


図18 圧痕土器と圧痕写真3

No.9は深鉢の胴部内面にのこる圧痕である。本調査では、既往の報告（渡部 1995）では不明確であった小穂軸付近の状態が比較的明瞭に現れている。圧痕の長さは8.4mm、柄部分の大きさは6.6mm×3.8mm、小穂軸部分を入れると長さは7mmを測る。また、土器胎土中にイネのプラント・オ・パールが検出された4点の土器の内1点がこの土器である。所属時期は縄文時代後期後葉（福田K3式）と報告されるが、土器の特徴から新しくなる可能性が議論されている。

#### (4) 上東中嶋遺跡（倉敷市上東）

北側に丘陵を有し、南側への「下がり」部分で深鉢・鉢・壺を含む土器群が出土した。報告では、「突帯文期」である津島岡大式並行期の一群とされる（上椿 2010）。調査資料は236点で、イネ1点と不明種子1点が検出された（表2）。

＜イネ＞（図No.7-25～28） 浅鉢の胴部内面に圧痕がのこる。圧痕の大きさは5.8mm×3mmである。

### 3.まとめ

本調査において植物の種類が同定されたマメ類とイネについて、問題点と成果にふれてまとめとしたい。

#### 【マメ栽培の問題】

本圧痕調査では、縄文時代後期中葉にダイズ属ダイズとツルマメ、「突帯文期」に属する可能性が高いササゲ属アズキを確認し、岡山南部平野においてマメ利用が行われていたことが裏付けられた。さらに、炭化種子にその対象を広げると、縄文時代後期前葉に津島岡大第6次調査地点でアズキ（沖 1996）が、同後期中葉に彦崎貝塚と「突帯文期」の南溝手遺跡でマメ類が各々報告されている（新山 2006、松谷 1996）。この津島岡大遺跡の資料は、前項で報告したアズキの圧痕資料と同地点で出土している。コンタミの問題も残すが、縄文時代後期以降におけるマメ栽培の可能性を高める資料として参考となろう。

近年の圧痕調査により、縄文時代のダイズは西関東～中部高地と九州への集中が指摘されている（小畑 2010）。両地域の中間に位置する本調査の資料は、資料数のピークが中期と後期後葉に求められる両者を埋める確実な圧痕資料として重要であり、マメ栽培の動向を考える上で手がかりとなろう。

岡山南部平野においてダイズが確認される縄文時代後期は、同地域において明確な住居痕跡をのこす集落の出現や立地などの変化、あるいは石器の増加が顕在化する時期である。植物利用では、貯蔵穴による堅果類の保存が開始され、その安定供給の確保が指向される。そうした中で、当時の栽培植物とされるヒヨウタン・アサ・アブラナ属・ヤマゴボウなど<sup>6)</sup>に比べ、その保存面・栄養面での優位性などからメジャーフードの位置づけもされるダイズ（小畑 2010・2011）をはじめとするマメ栽培の果たした役割について、その後の植物との関わりにおいても注目していきたい。

ただし、本調査では縄文時代後期を廻る調査を行っていないため、その上限については今後の課題である。

#### 【イネの出現期について】

本調査では、4遺跡6点の新規資料・既往報告資料の再確認を行った<sup>7)</sup>。1点を除くと全て「突帯文期」に含まれる。土器型式では、津島岡大式前後～沢田式の次段階となるが、津島岡大式は沢田式の古段階か直前に置かれることを考慮すると、沢田式前後の時期を中心に、やや古く廻る可能性を含むという評価になろう。

問題は南溝手遺跡のイネ資料である（図17-No.9）。縄文時代後期後葉と報告されているが、土器形態などから「突帯文期」に下がるとの意見があがっている（中沢 2009）。確かに後期土器には見いだせない形態である点はおおむね一致するところである<sup>8)</sup>。しかし、「突帯文期」の土器としても決定的とまでは言い難い点は議論の継続からも窺われる。一方、出土土層が晩期中葉（「船津原式」）の土層に切られる<sup>9)</sup>という出土状況を重視

するならば、晩期前半～中葉との考え方も可能となる。現状では、同資料の下限は「突帯文期」と評価できるが、上限については晩期前半～中葉の可能性も全く否定はできないことから保留としておきたい。後期の土器や土壤中から報告されているプラント・オ・パールの問題の評価などと合わせて、慎重な検討が必要と考えている。

本報告は、2008年度～2011年度日本学術振興会科学的研究費補助金基盤研究（A）「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」（研究代表：熊本大学小畠弘己教授）の研究成果の一部である。種の同定は熊本大学教授小畠弘己氏によるものである。筆者の意見を記す場合は、文章中にそれを明記した。走査型電子顕微鏡撮影は仙波靖子・真邊彩両氏が行った。また、資料作成には岩崎志保・山口雄治両氏の協力を得た。皆様にお礼申し上げる。

図16～18の実測図・拓本は、文末「遺跡の参考文献」の1・3・7・10・14からそれぞれ引用し、一部加筆した。図14は岩崎志保氏の作成である。

なお、津島岡大遺跡出土のダイズ圧痕土器は、2011年に『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』で工藤雄一郎氏により「津島岡大遺跡から出土したマメ圧痕土器の付着炭化物の分析」中に報告された。註5にも記したが、同研究に際して提供した圧痕土器はダイズ圧痕が確認された土器に共伴する土器であり、圧痕の種類は不明なものであることが、紀要刊行後に判明した。ここに間違いを訂正し、謝罪する次第である。

#### 謝辞

資料調査にあたっては、岡山県古代吉備文化財センター・総社市教育委員会・総社市埋蔵文化財学習の館・岡山大学埋蔵文化財調査研究センターから資料提供をいただいた。高田恭一郎・村上幸雄・物部茂樹（敬称略）には調査時に大変御世話になった。記して感謝の意を述べたい。  
(山本 悅世)

- 註 1) 同時期の表記については、縄文時代晩期後葉～末葉、弥生時代早期、あるいは突帯文期とされる場合がある。前二者の分類には、弥生時代の開始をいかにみるかという問題が深く関わる。筆者は、弥生時代の開始期については、突帯文土器のどこかの段階にその可能性を考えているが、その中の明確な結論を得ていないため、ここでは「突帯文期」を便宜的に使用する。
- 2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの報告書では、時期の記載が縄文時代晩期末葉あるいは突帯文期から1998年刊行の『津島岡大』10以降は弥生時代早期へと変更している。
- 3) 第3次・15次、第6次・9次、第17次・22次は各々隣接地点で、第2次と第5次地点を加えて5箇所に大別される。
- 4) 集落内での圧痕抽出率は百間川沢田遺跡などでも0.07%程度であり、大きな差はない。ただし、数字では現れないが、津島岡大遺跡第5次調査地点と百間川沢田遺跡は検出頻度が高く、南溝手遺跡・崖木遺跡は低い感想を得た。
- 5) 同研究報告に際して提供した圧痕土器は、当初、ダイズ圧痕の土器と考えていたが、紀要刊行後にレプリカが入れ替わっていたことが判明した。分析資料には炭化物が厚く付着し、ダイズ圧痕土器に共伴する土器であることは確実であるが、同土器の圧痕の種類は不明である。
- 6) これらは、津島岡大遺跡でもフローテーション法により、縄文時代後期の貯蔵穴の埋土を中心に抽出されている。
- 7) 調査対象地域内では、このほかに福田貝塚で縄文時代後期（福田K3式）のイネ圧痕資料の報告（高橋 1992）があるが、今回は調査がかなわなかった。
- 8) 千葉農氏・幸泉満夫氏のご教示による。
- 9) 調査担当者である平井泰男氏のご教示による。

#### 参考文献

- 阿部芳郎1994「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡』4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 上柳武2010「第4章まとめ 1 縄文晚期土器」「上東中嶋遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告226 岡山県教育委員会
- 沖陽子・山本悦世1994「貯蔵穴出土の種子－小型種子を中心にして－」『津島岡大遺跡』4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 沖陽子1996「津島岡大遺跡第6次調査出土種子の分析」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13 岡山大学埋蔵文化財調査研究

センター

- 小畠弘己・佐々木由香・仙波靖子2007「土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』15-2 日本植生史学会
- 小畠弘己2010「縄文時代におけるアズキ・ダイズの栽培について」『考古学・先史学論究』V 龍田考古学
- 小畠弘己2011「東北アジア古民族植物学と縄文農耕」同成社
- 工藤雄一郎2011「津島岡大遺跡から出土したマメ圧痕土器の付着炭化物の分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 柴一郎1986「縄文時代晩期の土器について」『岡山大学津島地区遺跡群の調査』II 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 高橋護1992「縄文時代の焼痕土器」「考古学ジャーナル』355 ニューサイエンス社
- 高橋護1997「縄文時代中期幅作の探求」「堅田直先生古希記念論文集」堅田直先生古希記念論文集刊行会
- 中沢道彦・丑野毅2005「レブリカ法による熊本県ワクド石遺跡出土土器の種子状圧痕の観察」「肥後考古」13 肥後考古学会
- 中沢道彦2009「縄文農耕論をめぐって－栽培種植物種子の検証を中心に－」「弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生産」同成社
- 中村大介2006「岡山平野の突帯文土器の系統と変遷」「津島岡大遺跡」17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 中山誠二2009「縄文時代のダイズ属の利用と栽培に関する植物考古学的研究」「古代文化』61-3 古代學協會
- 中山誠二2010「植物考古学と日本の農耕の起源」同成社
- 新山雅広2006「附章8 彦崎貝塚から出土した炭化種子実」「彦崎貝塚」岡山市教育委員会、注19b
- 平井勝1988「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」「古代吉備」第10集 古代吉備研究会
- 平井勝1992「弥生時代への移行」「吉備の考古学的研究」上 山陽新聞社
- 平井勝1993「縄文後期・四式式の提唱」「古代吉備」第15集 古代吉備研究会
- 平井泰男1997「縄文時代晩期の土器について」「崖本通路」1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120 岡山県教育委員会
- 藤原宏志1994「津島岡大遺跡出土土器に関するプラント・オ・パール分析」「津島岡大遺跡」4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 藤原宏志1995「南溝手遺跡出土土器胎土のプラント・オ・パール分析結果について」「南溝手遺跡」1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 岡山県教育委員会
- 松谷裕子1996「南溝手遺跡の炭化種子について」「南溝手遺跡」2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107 岡山県教育委員会
- 山崎純男2006「西日本縄文農耕論」「第6回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料集 韓・日新石器時代の農耕問題」財團文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会
- 山崎純男2005b「西日本縄文農耕論・種子圧痕と縄文農耕の概要－」「第1回西日本縄文文化研究会 西日本縄文文化の特徴」関西縄文文化研究会・中国縄文研究会・九州縄文研究会
- 渡部忠世1995「土器片附着の圧痕について」「南溝手遺跡」1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 岡山県教育委員会
- 遺跡の参考文献
- <津島岡大遺跡>岡山大学埋蔵文化財調査研究センター発行
1. 第2次調査：柴一郎編1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査』II 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊
  2. 第3次調査：山本悦世他編1992『津島岡大遺跡』3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
  3. 第5次調査：阿部芳郎編1994『津島岡大遺跡』4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
  4. 第6次調査：山本悦世他編1995『津島岡大遺跡』6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊
  5. 第9次調査：小林青樹他編1999『津島岡大遺跡』10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊
  6. 第15次調査：山本悦世編2004『津島岡大遺跡』14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
  7. 第17-22次調査：岩崎忠保他編2005『津島岡大遺跡』16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- <南溝手遺跡・崖本遺跡・東上中嶋遺跡>岡山県教育委員会発行
8. 平井勝編1993「百間川沢田遺跡」3 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
  9. 柳瀬昭彦他編1997「百間川沢田遺跡」4 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119
  10. 平井泰男編1995『南溝手遺跡』1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第100
  11. 平井泰男編1996『南溝手遺跡』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107
  12. 岡田博編1997『崖本遺跡』1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120
  13. 平井泰男第1998『崖本遺跡』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124
  14. 上裕武編2010『東上中嶋遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告226

## 第2章 鹿田遺跡の調査研究

### 第1節 発掘調査の概要

#### 1. 鹿田遺跡第20次発掘調査C・D地点

(岡大病院中央診療棟新宮：調査番号1・2 鹿田BR·BS12~21・BT~BX12~13区)

##### a. 調査の成果

弥生時代後期～近世の遺構・遺物を確認した。

###### ①弥生時代後期～古墳時代初頭

本調査地点一帯では弥生時代後期～古墳時代初頭における1次調査地点を中心とした集落域の地形がわかつてきている。本地点においても、それを補強するデータを得ることができた。C地点の微高地上では古墳時代初頭の井戸1基、焼土土坑1基、土器溜まりを検出した。焼土土坑は小規模ながら作業炉の可能性が考えられ、集落縁辺での活動域のひとつとして注目できる。

###### ②鎌倉時代～室町時代

第18次・第20次調査A地点と接続する区画の溝が東西・南北方向ともに確認された。これらの溝の多くは、「鹿田条里」と言われる現在の地割りに即した、北が東に傾く方位をとる。しかしD地点で確認された溝は真北方向を指向するものであり、その時期は鎌倉時代前半に限られる。この方位が異なる溝は、第20次調査A地点でも見つかっており、今回接続する部分を検出したことで時期・構造について再確認できたものである。

###### ③戦国～江戸時代

17世紀初めころまでは、井戸や区画溝の存在から、屋敷地としての機能が伺える。その後、野窓や土坑の存在から、調査地点一帯が耕作地として利用されていたことが考えられる。こうした土坑の集中域の状況等から、その周辺に区割りとなる道の存在する可能性が考えられる。

**調査期間** C地点：2010年7月20日～10月8日

(表土掘削：2010年7月7日～9日、発掘調査：2010年7月20日～10月8日)

D地点：2011年2月21日～3月2日

(表土掘削：2011年2月18日、発掘調査：2011年2月21日～3月2日)

**調査面積** C地点：276m<sup>2</sup>、D地点：15m<sup>2</sup>

**調査担当** 岩崎 志保（助教、調査主任）

**遺構・遺物**

【遺構】 C地点：井戸4基・溝10基・土坑6基・ピット約30基・土器集中3箇所・落ち1条

（内訳） 近世：井戸3基・土坑4基・中世：溝10条・ピット約30基

弥生時代後期～古墳初頭：井戸1基・土坑2基・土器集中3箇所・落ち1条

D地点：溝3条・土坑4基

【遺物】 C地点：土器（弥生時代後期～古墳初頭、中世～近世）、石器、木器（下駄、曲げ物他）、

土壤サンプル

D地点：土器（中世～近世）、種子サンプル（近世土坑出土）

（総量78箱）

### b. 調査に至る経緯と調査経過

#### (1) 調査に至る経緯

本調査は中央診療棟建設に伴うものである。同予定地では2007年度に第18次調査（面積872.2m<sup>2</sup>）、2009年度に第20次調査（A地点・B地点：面積計3114m<sup>2</sup>）を実施しているが、その際に工事の作業上調査が不可能であった部分がC・D地点である（図19）。C地点は、第18次調査の北辺と東辺を拡張する形の逆L字形を呈する部分で、面積は276m<sup>2</sup>である。D地点は、20次B地点の北西部分にあたり、面積15m<sup>2</sup>と狹小なものである。

以下、地点毎に調査の経過を述べる。

#### (2) 調査経過

##### 【C地点】

2010年7月7日～9日に表土掘削を行った。C地点では大きな基礎はなかったが、調査区の南半を東西方向に走る排水管を表土掘削と同時に撤去する必要があり、東西45m、南北約2mの範囲を、ほぼ予定調査深度まで除去した。

発掘調査は2010年7月20日から開始した。逆L字形を呈する調査区北辺を北区、南北に長い部分を南区として遺物の取り上げや記録を行うこととした。まず攪乱部分の清掃と、既調査と接する壁面の清掃と記録を進めるとともに、近世面から精査を行っていった。近世の造構として土坑・井戸・ピット、さらに中世面では土坑・溝・ピットを検出した。続いて弥生時代後期～古墳時代初めの造構（井戸・土坑・土器溜まり・落ち）の調査を終え、10月8日に全ての作業を終了した。

##### 【D地点】

D地点は建物予定地内の北西端部にあたり、西側には仮設の渡り廊下が設置されている。2011年2月18日に造成土の除去を行ったところ、包含層の残存状況が良好であることが判明した。調査面積は15m<sup>2</sup>である。

発掘調査は2月21日から開始した。近世面では土坑4基、溝（落ち）1条を確認した。次いで中世面では溝2条、ピットを検出し、3月2日に全ての調査を終了した。

### c. 調査の概要

#### (1) 層序（図20）

基本土層は以下の通りである。

**1層**：造成土である。岡山医学専門学校建設（大正六年・1917年）の際の造成土と、以後の堆積土により構成される。上面の標高は2.4mである。

**2層**：近代土層にあたる。南に隣接する18次調査地点では確認されたが、C地点では削平されているとみられ確認されなかった。D地点では北区のごく一部で確認され、上面の標高1.7mを測る。

**3層**：灰色砂質土で、近代の耕作土層にあたる。大半は削平を受けており、一部で確認された。C地点では北区北壁の16ライン付近、22ライン付近でのみ確認された。上面の標高は1.45mを測る。D地点では北区で確認され、上面の標高1.64mを測る。

**4層**：やや青みがかった灰褐色粘質土で、鉄分を含む。中世後半までに堆積した土層と考えられる。上面の標高はC地点で1.4～1.45m、D地点で1.55mを測る。

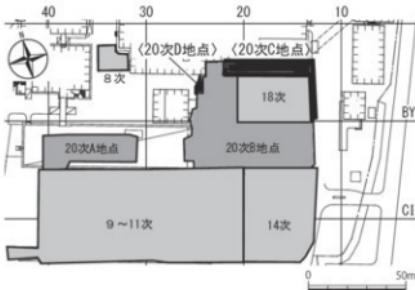


図19 調査地点の位置（縮尺1/2500）

5層：淡褐色粘質土で、鉄分・マンガンを含む。中世前半の堆積層と考えられる。上面の標高はC地点で1.3～1.35m、D地点で1.42mを測る。

6層：褐灰色粘質土で、鉄分・マンガンを少し含む。上面の標高1.2m～1.25mを測る。中世前半の土層と考えられる。C地点西半～D地点では6a・6b層に分けられる。

6a層：淡褐色砂質土である。鉄分・白色砂を含む。

6b層：褐灰色砂質土である。

7層：暗褐色粘質土～砂質土で、鉄分を少し含む。上面の標高1.1mを測る。古墳時代初頭の時期が考えられる。

8a層：暗褐色砂質土である。上面の標高1.0mを測る。

8b層：暗灰色粘質土である。上面の標高0.85mを測る。C地点北西部では粘性があり、黒みを帯びる。

9a層：黄褐色粘質土である。鉄分の沈着が特徴的である。上面の標高0.75～0.8mを測る。上面では遺構を検出しており、弥生時代後期までの堆積と考えられる。

9b層：黄褐色粘質から砂質土である。鉄分を多く含む。C地点では上面の標高0.6～0.65m、D地点では0.75mを測る。

10層：淡黒色～灰色粘質土で、上面の標高0.5mを測る。

## (2) 遺構・遺物（図21）

<弥生時代後期～古墳時代初頭> 7～10層が本時期に対応する。C地点は北側に広がる微高地端部にあたり、19ラインの西側では北東から南西に向けての落ちが確認された。一方、微高地東側の落ちについては、本調査地点では攪乱のため確認できなかった。

微高地では古墳時代初頭の井戸1基（SK9）、土坑2基（SK10・11）・土器溜まり1箇所、また微高地端部の斜面で遺物が比較的多く出土している。2基の土坑のうち南側のSK10は被熱痕・焼土塊が認められ、何らかの作業炉の可能性が考えられる。またSK10の北側に位置するSK11では埋土に複数回の炭層の堆積が認められ、SK10との関連が考えられる。

D地点では遺構は確認されず、遺物も極めて少なかった。

<鎌倉時代～室町時代> 4～6層が本時期に対応する。C地点で溝10条・ピット約30基、D地点で溝2条・ピット20基を検出した。

溝の方向は、東西方向1条、南北方向11条であり、いずれも第18次調査・第20次調査B地点と接続する。このうちC地点で検出した東西方向の溝1条（SD4）と南北方向の溝9条は、北方位の軸が東に15度傾く現在の地割りに沿ったものである。SD4からは石帶1点が出土している。鎌倉時代後半のSD1は、幅4m、深さ1.5mの規模で確認される大形の区画溝である。18次地点では南北方向に直行していたが、BTライン付近で東に傾く方向で確認された。本調査区より北側のBSラインが東西方向の区画にあたる可能性があり、その区画との接続部

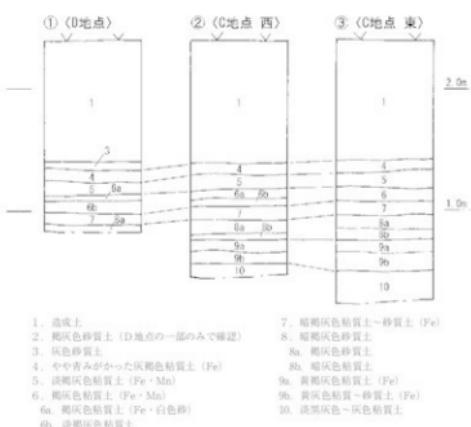


図20 土層断面図（縮尺1/40）

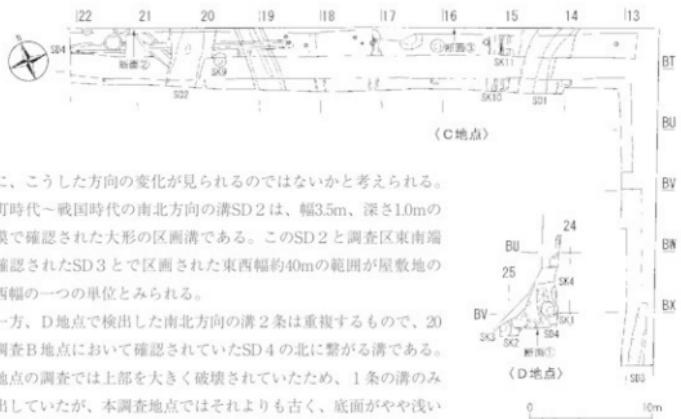


図21 第20次調査C・D地点遺構全体図  
(縮尺1/400)

分に、こうした方向の変化が見られるのではないかと考えられる。

室町時代～戦国時代の南北方向の溝SD 2は、幅3.5m、深さ10mの規模で確認された大形の区画溝である。このSD 2と調査区東南端で確認されたSD 3とで区画された東西幅約40mの範囲が屋敷地の東西幅の一つの単位とみられる。

一方、D地点で検出した南北方向の溝2条は重複するもので、20次調査B地点において確認されていたSD 4の北に繋がる溝である。B地点の調査では上部を大きく破壊されていたため、1条の溝のみ検出していったが、本調査地点ではそれよりも古く、底面がやや浅い溝が下部に重複していたことが確認された。この2条の溝の方向は真北に近いことが注目される。また2条の重複が確認されたことで、同じく真北方向を指向する溝（20次調査B地点溝2・3、2条が重複）と対になる可能性が考えられる。

ピットについてはC地点の西側に多い傾向が認められた。

＜江戸時代＞ 3・4層で検出した井戸4基、土坑8基が本時期に属する。井戸のうち、C地点SK 7からは陶磁器のはか、下駄、曲げ物等の木製品が出土している。もっとも新しい時期の遺構はC地点SK 1であり、木枠が残存していた。出土遺物はわずかに陶磁器片があるのみで、時期としては17世紀代と考えられる。D地点で検出した土坑4基は径1.2～1.6m、深さ0.6mで、平面形は隅丸方形、隅丸長方形のものがある。これらのうちSK 2の底面付近でウリ科植物種子を確認した。

また3層上面での耕作によるカットとみられる段がC地点16ライン付近で確認されている。C・D地点は江戸時代には耕作地として利用されていたことがうかがえる。

（岩崎）

## 2. 鹿田遺跡第21次発掘調査

（外來診療棟周辺他環境整備：調査番号3 鹿田AD・AE30・31、AG・AH30・31、AP・AQ26・27、AS・AT25～28区）

鹿田遺跡第21次調査（外來診療棟周辺他環境整備）の調査成果については、本書第II部第2章において正式報告として記載した。

（光本）

調査期間	2010年11月18日～12月9日（表土掘削：A～C地点 11月15～17日、D地点 11月15・16・25・29日）
調査面積	120.1m <sup>2</sup> （A地点：21.2m <sup>2</sup> 、B地点：22.0m <sup>2</sup> 、C地点：17.5m <sup>2</sup> 、D地点：59.4m <sup>2</sup> ）
調査担当	光本 順（助教、調査主任）

## 遺構・遺物

- 【遺構】 A地点：河道（平安時代）、溝状遺構1条（鎌倉時代）  
 B地点：河道（平安時代）、溝状遺構1条（鎌倉時代）  
 【遺物】 A地点：土器（平安時代）、瓦質土器、土師質土器、石造物（鎌倉時代）  
 B地点：陽物形木製品、墨書きを有する板材、土師器・須恵器（平安時代）、  
 土師質土器（鎌倉時代）  
 D地点：弥生時代後期土器

(総量2箱)

## 第2節 試掘・確認調査の概要

## 1. 岡山県地域医療総合支援センター予定地（調査番号4、鹿田AZ04・BA08区）

## a. 調査の経緯

岡山県地域医療総合支援センター予定地は鹿田地区の北東にあたり、現在は駐車場として整備されている。周辺では第16次調査（立体駐車場）、第19次調査（歯学部渡り廊下）や包含層に達する数件の立会調査を実施しており、弥生～古墳時代の河道や微高地から河道へいたる地形の転換点に構築された遺構を確認している。こうした地形や遺構・遺物の広がりを確認するため、試掘坑を予定地の東西2か所に設定した。

## b. 調査の成果

## (1) TP 1

予定地の東側に南北4m、東西3mの範囲を設定し、包含層である2層以下については南北13m、東西19mの規模で掘削した。掘削深度は23mである。

【層序】 TP 1では、近世の遺物を多く含む溝や土坑といった遺構が切りあっており、包含層と思われる土層は遺構の上下でわずかに確認できたのみである。

1層：造成土および擾乱埋土で、近代から現代の土層である。上面の標高は約29m、層厚約12mである。

2～4層は灰色を基調とする砂質土で、近世～近代の土層と考えられる。粘土ブロックや木材小片等を含む。

2層：暗灰色砂質土である。上面の標高は約1.7m、層厚約0.02～0.05mである。

3層：明緑灰色砂質土である。上面の標高は約1.65～1.7m、層厚約0.05mである。

4層：明黄褐色砂質土である。上面の標高は約1.6～1.65m、層厚約0.05～0.1mである。

5層：暗茶褐色砂質土で、弥生時代もしくは中世の土層と判断される。径5cm前後の灰褐色粘質土ブロックを含む点から、遺構の埋土である可能性もこす。上面の標高は約0.92～0.97m、層厚約0.1～0.15mである。

6層：明黄褐色砂質土で、暗灰色粘土ブロックが入る。時期を特定できないが、弥生時代あるいは中世の基盤層と考えられる。上面の標高は約0.8～0.85m、層厚0.2m以上である。

【遺構・遺物】 3・4層下面で土坑1基、溝3条を確認した。遺物は溝から近世陶器・瓦等が出土した。

土坑：調査区南東隅底面の平面精査で弧状の掘り方ラインを検出した。掘り方の内側で確認された灰褐色弱粘質土が東壁・南壁に連続し、急な傾斜でたちあがることから土坑と判断した。

溝：南北断面・平面精査により、南北方向の溝3条が切り合いながら掘削されていることが推測された。いずれ



図22 調査区の位置 (縮尺1/2,000)

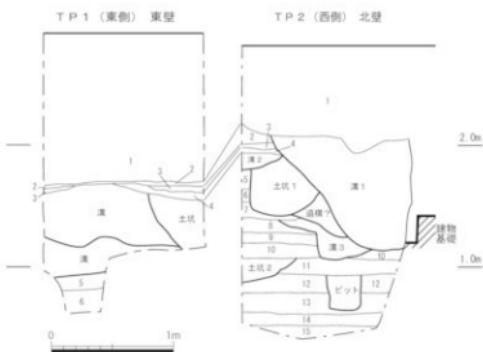


図23 土層断面図（縮尺1/40）

T.P. 1	T.P. 2
1. 造成土および擾乱埋土	1. 造成土および擾乱埋土
2. 暗灰色砂質土	2. 淡灰褐色砂質土
3. 明褐色粘土質土	3. 淡茶褐色砂質土
4. 明黃褐色砂質土	4. 暗褐色砂質土
5. 暗茶褐色砂質土	5. 淡黃褐色砂質土
6. 明黃褐色砂質土	（明褐色砂質土ブロック）
	6. 明黃褐色砂質土
	7. 暗黃褐色砂質土
	（暗褐色砂質土ブロック）
8. 明茶褐色砂質土	8. 淡茶褐色砂質土
	9. 黄茶褐色砂質土
	10. 茶褐色砂質土
	11. 淡黃褐色砂質土
	（灰色粘土ブロック）
	12. 茶褐色砂質土
	13. 灰茶褐色弱粘質土
	14. 暗灰色粘土
	（灰褐色砂質土ブロック）
	15. 淡灰白色粘土

4層：暗灰色砂質土で、上面の標高は1.98m、層厚0.02~0.05mである。

（5~7層） 黄褐色~黄橙色砂質土で、鉄分・マンガンの沈着がみられる。5・7層には灰色砂質土ブロック等の混入がみられる。中世層の可能性がある。

5層：淡黄褐色砂質土で、上面の標高は約1.8m、層厚約0.15mである。

6層：明黄橙色砂質土で、上面の標高は約1.65m、層厚約0.1mである。

7層：灰黄褐色砂質土で、上面の標高は約1.55m、層厚約0.1mである。

（8~10層） 茶褐色を基調とする砂質土層である。鉄分・マンガンの沈着は少ない。弥生土器小片をわずかに含む。8層から掘削される溝にも弥生土器が含まれており、弥生時代の土層である可能性が高い。植物の根の生痕とみられる灰色弱粘質土ブロックが垂直方向に顕著にみられる。

8層：明茶褐色砂質土である。上面の標高は約1.4m、層厚約0.15mである。

9層：黄茶褐色砂質土である。上面の標高は約1.3m、層厚約0.1mである。

10層：茶褐色砂質土である。上面の標高は約1.2m、層厚約0.1mである。

11層：淡黄褐色砂質土で、灰色粘土ブロックを含む。弥生時代の土層と考えられる。上面から土坑が掘削される。上面の標高は約1.1m、層厚約0.15mである。

（12・13層） 茶褐色を基調とする土層である。上層の12層は砂質を帯び、下半の13層は弱い粘性を示す。いずれもマンガンを多く含み、灰色粘土ブロックを多く含む。12層からビットが掘削される。

12層：茶褐色砂質土である。弥生時代の基盤層と考えられる。上面の標高は約0.95m、層厚約0.15mである。

の溝からも近世陶磁器・瓦等の遺物が出土しており、近世溝と考えられる。

## (2) T.P. 2

予定地の西側に東西28m、南北1.9mの範囲で設定し、包含層である2層以下を東西1.3m、南北1.2mの規模で掘削した。掘削深度は2.4mである。

【層序】 T.P. 2では、東壁上半部が旧建物基礎のために破壊をうけていたものの、のこる3方の壁面では良好に土層が観察できた。

1層：造成土および擾乱の埋土で、近代から現代の土層である。上面の標高は約2.8m、層厚約0.6~0.7mである。

〈2~4層〉 灰~茶褐色砂質土で、鉄分の沈着がほとんどみられない。いずれもしまりの緩い土層である。近世~近代の土層とみられる。

2層：淡灰褐色砂質土で、上面の標高は約2.2m、層厚約0.1~0.2mである。

3層：淡茶褐色砂質土で、上面の標高は約2.0m、層厚約0.05mである。

13層：灰茶褐色弱粘質土である。上面の標高は約0.8m、層厚約0.2mである。

14層：暗灰色粘土で、鉄分を多く含み、淡灰色粘土ブロックを含む。上面の標高は約0.65m、層厚約0.1mである。

15層：淡灰白色粘土である。鉄分を多く含む。上面の標高は約0.5m、層厚0.1m以上である。

**【遺構・遺物】** 遺構は断面観察で溝4条、土坑2基、ピット状の落ち込み1基を確認した。溝はいずれも南北方向の溝と考えられる。遺物は溝3から弥生土器が出土した。そのほか、8～10層の掘削において大形の破片を含む弥生土器が出土した。

### c.まとめ

今回の調査結果と既往の成果から、本調査地点の地形や弥生時代の集落との関係は以下のように考えられる。

本調査地点の北側で確認されている弥生～古墳時代の河道は、両試掘坑では確認されなかつたため、予定地の南半には微高地が広がると予想される。また、両試掘坑の近世・近代の土層、遺構の上面レベルは、西側の方が高く、西から東に下がる地形が復元される。

弥生時代の集落は、鹿田遺跡では本調査地点の西に確認されている。今回、西側に設定したTP2で弥生時代の遺構・遺物が検出されており、この地点が集落に比較的近い位置にあると想定されるが、TP1の成果を勘案すれば、集落の影響は東にむかって薄れるものと推測される。  
(野崎)

## 第3節 立会調査の概要

### 1. 調査の実施状況

鹿田地区における2010年度の立会調査は25件が実施された。そのうち、特徴的な土層を確認したものは5件であり、各地点の壁面での土層観察結果を報告する。なお、ここで報告する以外に中央診療棟埋文調査に伴う支障移設電気設備工事<調査番号7・8>では包含層を確認しているが、本章第1節に発掘調査概要を掲載しているため、ここでは省略する。

#### a. 高精度放射線治療棟屋外排水管工事<調査番号6>

高精度放射線治療棟は鹿田地区中央部、外来診療棟の南に位置する。ここでは掘削の最下層で淡灰色粘質土が検出された。中世または近世の溝の埋土と考えられる。遺物は出土していない。

#### b. 外灯整備工事<調査番号10・11・17>

外灯整備工事は鹿田地区全域で13カ所実施され、そのうちの3地点で近世以前の包含層や特徴的な土層が確認された。<調査番号10>は基礎医学棟の東に位置する。造成土下に青灰色～灰色を主体とする粘質土が確認された。最下の暗青灰色粘土は近世層と考えられる。<調査番号11>は鹿田地区北西の学生ボックスの北に位置する。造成土下に茶灰色および青灰色粘土層が確認され、掘削底面では黄茶灰色粘土が検出された。3層以下は近世層と考えられる。<調査番号17>は基礎研究棟南に位置する。3層（灰色粘質土）中には炭・焼土が含まれる。遺構の埋土の可能性もあるが、掘削範囲が狭く、判断できない。いずれの地点でも遺物は出土していない。

#### c. 保育所改修工事<調査番号22>

保育所改修工事は鹿田地区南、保健学科棟の西に位置する。本地点の掘削は、現地表面から約1mで造成土または既掘埋土内におさまっていたが、排水ポンプ槽設置部分（約1m四方）のみ約1.6mを掘削し、包含層を確認した。造成土および既掘埋土が1m以上認められており、近世層はすでに失われているものと考えられる。2～4層は中世以前の土層と考えられるが、遺物が出土しておらず、判断材料を欠く。5層（淡黄灰褐色粘質土）は弥生基盤層とみられる。遺構・遺物は確認されていない。  
(野崎)

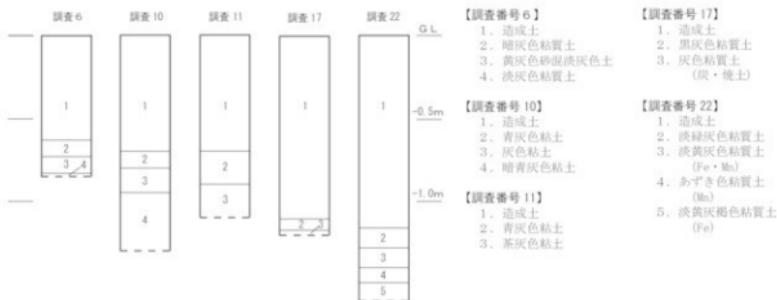
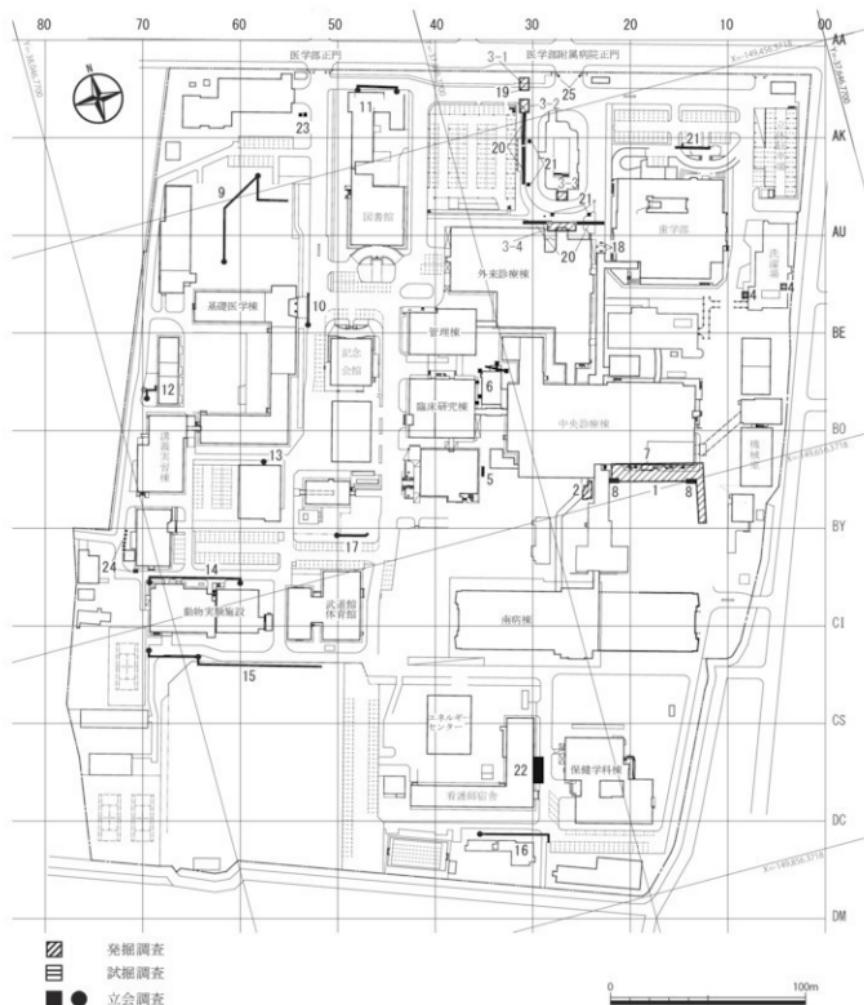


図24 土層柱状図（縮尺1/30）

表3 2010年度鹿田地区調査一覧

種類	番号	調査座標	調査名称	調査期間	調査深度 (G.L.m)	造成土厚 (m)	内容
発掘	1	BR-HS12-21, BT7-0X12-13	中央診療所 【鹿田通路第20次発掘調査C地点】	7.20-10.8	2.0-22	-	弥生時代～近世の遺構・遺物
	2	BT7-BU24	中央診療所 【鹿田通路第20次発掘調査D地点】	2011.12.18-32	1.6	-	中世～近世の遺構・遺物
	3-1	AD-AF30-31	外来診療所観察施設環境整備 【鹿田通路第21次調査A地点】		24	1.25	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構
	3-2	AG-AH30-31	外来診療所観察施設環境整備 【鹿田通路第21次調査B地点】		26	1.13	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構
	3-3	AP-AQ26-27	外来診療所観察施設環境整備 【鹿田通路第21次調査C地点】	11.8-12.9	0.8	-	工事掘削深度内で古現代の建物基盤面に面するため、その下部は未調査
	3-4	AS-AT25-28	外来診療所観察施設環境整備 【鹿田通路第21次調査D地点】		25-34	-	弥生時代包含層確認
試掘・補足	4	AZ04-BA08	岡山県地域医療連合支援センター予定地	2011.10.21	東23, 西24 西06	東1.2, 西0.6	近世層・弥生・基層層確認
	5	BR-HS35	中央診療所西側水管取付工事		5.6	0.9	近代層確認
	6	EH32-25, EI-BL25	高精度瓦製古窯跡周辺排水管工事	5.14-19	0.75-0.9	0.6	中～近世の遺構？
	7	EH14-16-19-22	中央診療所改修工事 アース箱設置工事	5.31, 6.1-4	0.9-1.8	1.1	包含層確認
	8	BT13-14-21-22	食に伴う支障埋設 電気敷設工事		6.30	1.1-1.8	-
	9	AN56, AG58-59, AI58-60, AQ55-58, AR-AW61	基礎医学棟北側駐車場		8.9	1.25-1.3	近代層・確認
	10	BA-BD52	基礎医学棟東側通路		8.11	1.3	近世層・確認
	11	AE43-47, AF43-47	岡田前・学生ガッタク・中庭およ び芝生通路		8.17	0.9-1.1	近世層・確認
	12	BE68-69, BK69	ボイラー室古跡通路		8.19	1.2	-
	13	BK57	基礎研究棟古跡通路		8.20	1.2	-
	14	BL69-69	自然生命（動物部門）古跡通路		8.23	1.1	近代層上面確認
	15	CK69, CL57-69, CM52-56	グラント北側通路		8.25	1.2	近代層上面確認
	16	DU26-35, DE28	看護師会合駐車場		8.25	1.2	近世層・上面確認
	17	BY46-50	研究棟南側駐車場		8.31	1.2	道標層上？確認
	18	AU-AV22-23	環境整備その他工事		10.18	0.66	-
	19	AF30-31	矢板打ちに伴うガス管確認工事		11.12	1.15	-
	20	AH-A-CO30-31, AS22-25-28-30	環境整備工事	12.16-20, 24	0.52-1.7	-	近代層確認
	21	AK-AK30, AL11-15, AL24-27-28	電気設備工事	12.20, 24	0.96-1.1	0.9	近代層確認
	22	CV-CY28-29	便所改修工事		11.4	1.6	1.15 弥生基層層確認
	23	AH33	医学資料室ガス改修工事		12.16	1.1	-
	24	BK70-BY-C471	岡山メディカルインノベーションセンター	2011.11.4	0.98-0.97	-	既設内
	25	AE25-27	大学病院入り口ホール設置工事	2011.12.4	1.08	-	造成土内



\*番号は表3の調査番号に対応する。

図25 2010年度の調査地点【2】—鹿田地区—（縮尺1/2500）

## 第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

### 第1節 調査資料の整理・研究

#### 1. 調査資料の整理

調査資料の整理について、津島岡大遺跡では第32次調査（教育学部剣道場）出土遺物の洗浄・註記・接合および土壤サンプルの洗浄を行った。鹿田遺跡については、第9次調査、第14次調査（岡大病院病棟）の接合、第17次調査（医学部基礎棟）、第18次調査（岡大病院中央診療棟）出土遺物の洗浄、第19次調査（岡大病院渡り廊下）の貝殻採取サンプルの洗浄および出土貝資料の分類を行った。

報告書の作成については、2009年度末までに編集作業までを終えていた鹿田遺跡第13次および第15次調査（総合教育研究棟）の報告書を刊行した。津島岡大遺跡第32次調査（教育学部剣道場）については2010年度に報告書作成作業を開始し、刊行した。

自然科学的分析では、「津島岡大遺跡20」作成に関わるものとして、表4の分析を実施し、同書に分析結果を掲載した。

表4 津島岡大遺跡第32次調査分析一覧

分析資料	分析の種類	分析者・分析機関	主な結果
自然石（縄文時代・両道）	断面同定	鹿城特	コナラ属アカシヤ属・ヤガキ
アンペラ（縄文時代・鉛鏡穴）	断面同定	㈱吉田生物研究所	イネ科タケ亜科
瓦木（縄文時代・両道）	放射性炭素年代測定（AMS）	㈱吉澤環境研究所	4125±25年BP
花粉（廻遊区埋設から採取）	花粉分析	㈱吉澤環境研究所	近世：アブラナ科（栽培植物）草薙、麦牛蒡が検出
植物付着体（廻遊区埋設から採取）	植物付着体分析	㈱吉澤環境研究所	縄文時代後期～後半時代葉・面影・茎葉を確認

#### 2. 調査資料の保存処理

##### a. 木製品のPEG保存処理作業

本年度の調査資料の保存処理として、木製品のPEG保存処理事業を実施した。昨年度末に処理を開始した第9期の処理工程で、保存処理の対象となった遺物は、津島岡大遺跡第22次調査の木製品（平安時代の大溝出土）と同30次調査の杭（近世・近代の用水路出土）である。

##### b. アンペラの高級アルコール含浸処理

津島岡大遺跡第32次発掘調査の縄文時代貯蔵穴から出土したアンペラについて、㈱吉田生物研究所に高級アルコール含浸処理を依頼、実施した。

表5 第9期のPEG保存処理工程

期	年月日	作業内容
第9期	2010年2月5日	濃度40%：処理開始
	2010年6月14日	濃度50%
	2010年7月14日	濃度60%
	2010年10月12日	濃度70%
	2010年11月29日	濃度80%
	2011年2月4日	濃度90%

(野崎)

### 第2節 調査成果の公開・活用

#### 1. 公開・展示

##### a. 第12回岡山大学キャンパス発掘成果展『謎の莊園 鹿田荘—集落・条里・領域—』の概要

2011年1月6日（木）～10日（月・祝日）の5日間、第12回岡山大学キャンパス発掘成果展『謎の莊園 鹿田荘—集落・条里・領域—』（本センター主催）を実施した。この成果展は展示とシンポジウムによって構成される。

展示会は岡山大学創立五十周年記念館1階交流サロンを会場とし、376名の参加を得た。シンポジウムは展示会最終日の1月10日に同記念館2階会議室で実施し、124名が参加した。以下では、その成果について報告する。

### b. 展示会・シンポジウムの内容

(1)趣旨 本展示会・シンポジウムは、藤原摂関家の殿下渡領である鹿田莊にスポットを当てたものである。岡山大学鹿田キャンパスは、鹿田莊の比定地として知られる一方で、岡山県教育委員会および岡山市教育委員会による近年の発掘調査では、鹿田キャンパス周辺でも古代・中世遺跡の広がりが確認してきた。鹿田莊の考古学的実像について、異なる機関の調査成果を総合しながら明らかにするという、これまで十分になされてこなかった課題に取り組むことを、企画の大大きな目的とした。

(2)展示会 今回の展示会の大きな特徴のひとつは、本センターの調査資料とあわせて、岡山県教育委員会・岡山市教育委員会の協力のもと、鹿田キャンパスとその周辺における古代・中世集落の考古資料をはじめて一堂に集めた点にある。具体的には、岡山市鹿田遺跡（県立岡山病院）地点（調査：岡山県古代吉備文化財センター）、および大供本町遺跡（調査：岡山市教育委員会）の資料を借用した。展示会では、鹿田キャンパスとこれら2遺跡の調査成果を相互に比較しながら、テーマとした鹿田莊の集落構造や条里・領域の問題について議論するための基礎的情報と考古資料を提示するよう心がけた。

展示構成は、説みの通りとなる。展示の前半は、鹿田莊の領域や集落構造の問題について取り上げた。ここでは、イラストを用いた鹿田遺跡の時期別の景観復元を基礎としつつ、鹿田遺跡とその周辺遺跡からみた鹿田莊に関する考古学的研究の個別的論点を提示した。展示後半では、鹿田キャンパスにおける鹿田莊の条里プランについて復元した成果を、床面に構内地図を引き延ばして展示を行った。なお今回は、当センターで2010年度に実施した構内出土文化財を用いたオンザジョブトレーニングの一環として、大学院社会文化科学研究科院生による鹿田遺跡出土遺物の整理報告と展示もあわせて実施した。

(3)シンポジウム 企画全体の趣旨に照らし、シンポジウムは鹿田キャンパスとその周辺遺跡の調査成果について、機関の垣根を越えて議論し、考古学からみた鹿田莊の実像に迫ることを目的とした。そのため、当センター職員による鹿田キャンパスの調査成果に加え、岡山市鹿田遺跡（県立岡山病院）の調査報告を岡山県古代吉備センター・亀山行雄氏に、大供本町遺跡の調査成果を岡山市教育委員会・高橋伸二氏に依頼した。個別の内容については『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』第46号に要旨が掲載されているが、鹿田莊の集落構造の時期的变化や莊園の範囲および条里の問題、あるいは莊園の中心的施設はどの地点に想定されるのか等、三機関の研究者が集うことでなじる議論が活発に展開した。

### c. アンケート結果から

展示会に際してアンケートを実施した（回収数160枚、回収率42.6%）。その結果をみると、学内での展示会の際のリピーター率は30~40%台が主流であるが、今回、リピーター率（60%）が非常に高かった点は特徴的であ

<p><b>第12回岡山大学キャンパス発掘成果展 「謎の莊園 鹿田莊一集落・条里・領域」</b></p> <p>展示期間：2011年1月6日（木）～10日（月・祝日） 展示会場：岡山大学創立五十周年記念館1階交流サロン</p> <p>主な展示パネル構成</p> <p>開催にあたって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文獻から見た鹿田莊</li> <li>（入野修義・岡山大学院社会文化科学研究科教授）</li> </ul> <p>第1の謎—どこで広まる？鹿田莊</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・岡山平野の条里と鹿田莊</li> <li>・鹿田莊の景観復元</li> <li>・平安時代前半～9世紀—鹿田莊成立まもない頃</li> <li>・平安時代中期～10～11世紀—鹿田莊の発達と抗争の時代</li> <li>・平安時代末～12世紀—中世鹿田莊に向けて</li> <li>・鎌倉時代後半～13世紀後半～14世紀前半—複数開発の時代</li> <li>・各遺跡の位置と概要</li> <li>・解き明かされる700年の謎—鹿田遺跡（岡大）27年の発掘成果</li> <li>・謎の10段階を解き明かす—鹿田遺跡（県立岡山病院）</li> <li>・鹿田莊の心臓部か、港湾施設か？大供本町遺跡</li> <li>・変遷するモダニズム</li> <li>・トピック展示 物流ネットワークと鹿田莊</li> <li>・江戸から見た時代の移り変わり</li> </ul> <p>第2の謎—鹿田莊の集落マップ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿田遺跡（岡大）の条里・プラン</li> <li>・床面展示 12世紀の条里・プラン</li> <li>・13～14世紀の条里・プラン</li> <li>・映像展示 条里・プランの時期変化</li> </ul> <p>謎解きは続く</p> <p>発掘浅掘</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿田莊の構成</li> <li>・新発見！鹿田莊の北端</li> </ul> <p>オンラインショットトレーニングの成果から</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生による展示企画</li> <li>・学生時代後期の貝塚～鹿田遺跡の貝塚からみた学生時代の人々</li> </ul>
---

る。その要因には開催実績とともに、鹿田莊に関する総合的な企画となったことが挙げられる。男女比は男性が78%、女性が22%と、男性数が極めて多い印象があるが、20代の学生を中心とする層に関しては異なる。年齢構成については、60代・70代が主体をなす(54%)が、40代・50代も一定の割合(27%)が認められる。来場者の感想としては、鹿田莊の景観復元図や条里復元図に人気があった他、合わせて展示を行った土器・陶磁器、学生の企画展示も支持を集めた。また「文字数が一般的博物館に比べて多いものの、それも大学ならではの特徴」という意見もみられた。

#### d.まとめ

今回の企画は鹿田莊に関する考古学的成果について、機関の垣根を越えた議論の場を創出するというねらいから出発した。その成果は今後の鹿田莊キャンパスでの調査研究にも活かしうるものとなった。これまでにも講演会については幾度か実施してきたが、シンポジウム形式に関しては今回が初めてであった。当日の満席となった会場が関心の高さを物語るならば、今後も学術的かつ地域に根ざした展示・公開の工夫を継続したい。(光本)



図26 展示会風景（上段）・シンポジウム風景（下段）

## 2. 資料・施設等の利活用

### a. 教育機関への支援（授業などの受け入れ）

#### (1) 博物館実習：8月2～11日（補講：9月7・8、27・28日）

例年通り、岡山大学文学部が開講している学芸員資格取得のための講義（博物館実習）の受け入れを行った。

### シンポジウム『謎の莊園 鹿田莊—集落・条里・領域—』

開催日 2011年1月10日（月・祝日）  
会場 岡山大学創立五十周年記念館 大・中・小会議室

タイムテーブル
13:00～ 開会挨拶 北尾 真信 当センター長 新納 風 先セシテーションセンター長
13:10～13:50 報告1 「10世紀の鹿田莊—庄内岡山城砦の調査から」 龜山行雄・岡山県古代・古文化財センター
13:50～14:30 報告2 「鹿田莊の中核から一人の本町道跡の様相」 高橋伸二 岡山市教育委員会
14:40～15:20 報告3 「移りゆく庄園景観—岡大庭園キャンパスの調査から」 岩崎志保 当センター
15:30～16:30 パネルディスカッション パネリスト 龜山行雄・高橋伸二・岩崎志保 司会 山本龍貴 当センター
16:30 閉会

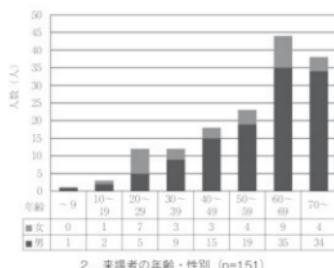


図27 第12回成果展アンケート結果

期間は8月2～11日で、そのなかの8日間である。受講生全体を1班10名前後とする4班に分けて、各班2日間の受講日程を組んだ。

実習1日目は、同期間中に実施していた津島岡大遺跡第33次調査・鹿田遺跡第20c次調査現場における発掘調査の体験である。これは博物館における一次資料の収集に相当する部分の学習を目的としたものである。2日目は、考古資料の取り扱いに関する専門的知識の修得を目指した構成とした。出土遺物の洗浄・註記・接合などは資料の整理が進められる過程を追体験するものである。また、貝塚出土貝類の分別作業は脆弱な有機質の遺物の観察と取り扱いを修得するものであり、多様な考古資料を取り扱う実習となった。

#### (2) 中学生の職場体験：岡山市立中央中学校 2010年11月16～18日（2名）

岡山市立高松中学校 2010年11月19日（5名）

岡山市立岡北中学校 2011年2月2～4日（3名）

本年度は、岡山市内の中学校3校から「中学生の職場体験」の受け入れ依頼があった。期間は1～3日で、計10名の生徒が本センターでの職場体験を行った。

作業内容は、土器・石器の洗浄・註記・復元にくわえ、種子・骨・貝といった有機質遺物を含む遺物整理に関する業務、図書整理、展示室の清掃など日常的に行っている業務のほか、発掘器材の洗浄、展示会アンケートの集計作業など、職場体験実施時に行っていた臨時の業務を組み込んだ。

#### (3) 岡山大学内の授業などの受け入れ

津島岡大遺跡第33次調査の発掘調査現場では、本学の文学部が行っている講義の一環としての現地見学が行われた。

#### (4) 岡山県生涯学習大学

岡山大学文学部では、岡山県事業「岡山県生涯学習大学」を受け入れており、本センターも構内遺跡の調査研究成果とそれに関する内容の講義を担当し、2010年8月28・29日に実施した。受講者は34名である。28日は津島岡大遺跡・鹿田遺跡における縄文～弥生時代の調査成果についての講話および岡山大学考古資料展示室においての遺物見学のち、屋外実習として津島岡大遺跡第33次調査の発掘調査現場を見学し、遺跡の調査方法や記録のとり方を体験した。29日は鹿田遺跡を中心とする鹿田庄に関する講話のち、津島キャンパスにのこる戦跡を見学した。また、出土遺物の観察法実習として、土器（縄文土器・須恵器）の拓本・スケッチをとった。

#### (5) 2010年度非常勤講師への委嘱依頼

岡山大学文学部長より、表6の要領にて博物館実習における非常勤講師への委嘱依頼をうけ（2010年4月12日）、承諾した。

表6 2010年度非常勤講師への委嘱依頼内容

職名	氏名	担当科目	実働期間	備考
助教	山本 晃 茂	博物館実習	平成22年4月1日～平成23年3月31日	通常（水曜日3・4・5曜）
助教	岩崎 志保	博物館実習	平成22年4月1日～平成23年3月31日	通常（水曜日3・4・5曜）
助教	野崎 貴博	博物館実習	平成22年4月1日～平成23年3月31日	通常（水曜日3・4・5曜）
助教	光木 順	博物館実習	平成22年4月1日～平成23年3月31日	通常（水曜日3・4・5曜）
助教	池田 薫	博物館実習	平成22年4月1日～平成23年3月31日	通常（水曜日3・4・5曜）

#### (6) オンザジョブトレーニング

本年度の新たな取り組みに、本学学生を対象とした「学内出土文化財を活用したオンザジョブトレーニングの試み」がある。本事業の主な目的は、学生が実際の職場の雰囲気につれながら、職員との協業・実務を経験することにより社会性が育成されること、岡山大学構内遺跡出土文化財を取り扱うさまざまな仕事を通じ、学内文化財や歴史への関心・親近感が醸成されることであり、教育的な色彩を有する事業として始めた。また、学生が整理作業等を補佐することにより、センター全体の業務の円滑な推進を図った。

本年度、同事業に参加した学生・大学院生は、大学院社会科学研究科大学院生（考古学）7名、大学院自然科

学研究科大学院生（地質学）2名、理学部学生（地質学）1名である。このような学生の専門分野を考慮し、考古学専攻生については、主に発掘調査および出土遺物の整理作業、地質学専攻生については、構内遺跡出土石器の登録・収納作業にあたることとした。

考古学専攻生が行った整理作業のなかで、弥生時代の貝塚出土の貝（鹿田遺跡第19次調査出土）の洗浄・分類については、整理で得られたデータをとりまとめ、その成果は本センターが主催した展示会や学会でのポスター発表へとつながった。本事業で取り組んだ基礎的な整理作業を研究へと昇華させたものといえる。また、地質学専攻生についても、石器を間近に観察できることができたことと人と石との関わりを考える機会となった。異なる研究分野での体験が自身の研究の視野を広げることに結びついた。これらの成果は本事業の教育的な目標を達成したものであり、教育の場としての本センターの可能性を示すものである。今後も学生の教育に資する経験の場を幅広く提供できるように努めたい。

#### （7）その他

展示室等の見学・視察

<考古資料展示室>：73名	<常設展示室>：22名
・九州歴史資料館 西谷正さんほか25名（2010年7月）	・津島小学校5名（児童1名・保護者4名、2010年4月）
・生涯学習大学34名（2010年8月）	・一般7名（2010年4・9・12月、2011年1・2月）
・高校生4名（2010年8月）	・職場体験中学生10名（2010年11月・2011年2月）
・職場体験中学生10名（2010年11月・2011年2月）	

#### b. 調査・研究への支援

##### （1）資料調査

- ・岡山大学津島キャンパス構内の戦跡関連資料調査：岡山大学大学院 小西里沙（2010年4月）
- ・津島岡大遺跡第10・19次調査出土の鉄滓・製鉄関連遺物：岡山県古代吉備文化財センター 上裕武（2010年5月）
- ・津島岡大遺跡第5次調査出土圧痕土器付着炭化物提供：国立歴史民俗博物館 工藤雄一郎（2010年7月）
- ・津島岡大遺跡第5・15・17・22次調査出土石礫：広島大学大学院 矢部俊一（2010年12月）
- ・津島岡大遺跡第32・33次調査出土繩文後期土器：京都大学 千葉農（2011年1月）
- ・津島岡大遺跡第3・15・23次調査出土突帯文土器：山口県埋蔵文化財センター 小南裕一（2011年1月）
- ・津島岡大遺跡第5次調査出土繩文土器、第15・32次調査出土アンペラ：愛媛大学 幸泉満夫（2011年2月）
- ・津島岡大遺跡、鹿田遺跡の古代・中世土器：中世土器研究会10名（2011年3月）
- ・鹿田遺跡第1・5・6次調査出土メロン種子：総合地球環境学研究所 田中克典・岡山大学農学部 加藤謙司（2011年3月）

##### （2）図書の貸出等の協力

図書の外部貸出：21件（岡山大学文学部学生ほか）

#### c. 資料の提供・貸し出し

##### （1）出版物等への資料提供

- ・日本文教出版『岡山の甲冑』（臼井洋輔著）…『鹿田遺跡I』掲載の木製短甲1点
- ・㈱ジャパン通信情報センター『文化財発掘出土情報』2010年10月号…津島岡大遺跡第32次調査の現況資料・遺構写真

#### d. マスメディアへの公開

- ・NHK：番組「きわめる」への取材協力
- ・株式会社共同テレビジョン『～時代劇おもしろ雑学～ 虎之巻』津島岡大遺跡第5次調査出土漆塗り櫛の画像
- ・山陽新聞社：2件 展示会関連記事

・oniビジョン：1件 鹿田庄について

(野崎)

### 第3節 2010年度調査研究員の個別研究活動

#### 1. 科学研究費

山本悦世：基盤研究（A）「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」

（研究代表者：小畠弘己）研究分担者

基盤研究（B）「縄文時代後期における稲作農耕空間の探求」

（研究代表者：田崎博之）連携研究者、研究協力者

野崎貴博：若手研究（B）「吉備地域における群小墳の展開過程からみた古墳時代社会構造の研究」研究代表者

基盤研究（A）「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」

（研究代表者：新納 泉）研究分担者

光本 順：若手研究（B）「人物埴輪からみた古墳時代のジェンダー構造に関する実証的研究」研究代表者

基盤研究（A）「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」

（研究代表者：新納 泉）研究分担者

#### 2. 論文・資料報告

山本悦世：「曲物製作における技術的特徴」『鹿田遺跡』 6

光本 順：『鹿田遺跡』 6（編集）

「土器溜まり考」『鹿田遺跡』 6

池田 晋：『津島岡大遺跡』 20（編集）

#### 3. 研究発表など

光本 順：「統一テーマ『階層性と社会構造』をめぐって」考古学研究会第56回研究集会コーディネーター

（岡山大学、4月17・18日）

「古墳時代土器溜まりの研究—岡山市鹿田遺跡をモデルとして—」考古学研究会岡山例会

（岡山大学、11月13日）

山本悦世：「遺構から見た中四国地方の縄文集落像」第21回中四国縄文研究会鳥根大会シンポジウム司会

（出雲市、7月4日）

#### 4. 講演など

山本悦世：「岡山平野の稲作事始め－津島遺跡の発掘調査－」古代吉備国を語る会夏季特別講演会、古代吉備国を語る会（岡山市立中央公民館、2010年8月22日）

「岡山平野の歴史と文化－人びとの暮らしの始まりと自然への挑戦－」岡山大学文学部公開講座「岡山から考える」（岡山大学、2010年8月28日）

「岡山平野の歴史と文化－平安から鎌倉へ－」岡山大学文学部公開講座「岡山から考える」（岡山大学、2010年8月29日）

岩崎志保：「移りゆく莊園景観－岡大鹿田キャンバスの調査－」『シンポジウム 謎の莊園 鹿田莊－集落・条里・領域－』（岡山大学、2011年1月9日）

## 5. 資料収集・実態調査

山本悦世：科学研究費に基づく土器圧痕調査（総社市、岡山市）

科学研究費に基づく文京遺跡の調査（松山市）

構内遺跡出土資料に関する資料調査（近江八幡市、奈良市）

岩崎志保：構内遺跡出土資料関連調査（奈良市、近江八幡市）、中国東周～漢代出土資料調査（名古屋市、神戸市）

野崎貴博：百舌鳥古墳群出土埴輪資料の実見（大阪府）、中・後期古墳群の踏査（大阪府）

光本 順：科学研究費（若手B）に基づく人物埴輪に関する資料収集・見学（天理市、大阪市、松阪市、宮崎県新富町、高崎市、埼玉県、福島県）

科学研究費（基盤A）に基づく古墳時代石棺に関する資料収集・見学（大分市、福井市、高崎市）

分銅形土製品に関する資料収集・見学（赤穂市）

池田 晋：岡山平野の条里遺構の資料収集、百舌鳥古墳群の整備状況の実態調査（大阪府）

## 第4章 2010年度における調査・研究のまとめ

**調査** 2010年度は津島地区2件、鹿田地区2件、合計4件の発掘調査を実施した。発掘調査の実施期間は津島岡大遺跡第33次調査（薬学部講義棟新宮）が7～11月、同第34次調査（国際交流会館新宮）が7～9月、鹿田遺跡第20次調査C・D地点（中央診療棟新宮）が7～10月・2011年1月、同21次調査（外来診療棟環境整備）が12月であり、3件が同時進行する過密スケジュールであった。

主な調査成果として、津島岡大遺跡第33次調査では、縄文時代中期の遺構・遺物と包含層および古代～中世の構造上の差を有する道路状遺構を確認した。鹿田遺跡第21次調査で検出した南北方向にのびる中世の道路状遺構は、現在の街区に合致するかたちで屈曲しており、現在、岡山市北半部にのこる正方位の条里と鹿田遺跡周辺にのこる斜行条里との接点を示すものとして注目される。

試掘・確認調査は津島地区で2件、鹿田地区で1件を実施した。このうち、津島地区1件、鹿田地区1件は発掘調査が必要な建物建設に起因するものであり、津島地区的もう1件は簡易建物の計画された地点における状況確認を目的としたものである。立会調査は津島地区で47件、鹿田地区で21件を実施した。津島地区では建物建設が行われた薬学部講義棟・国際交流会館周辺での設備工事に伴うものが多数を占めた。

**研究** 2010年度の刊行物として、発掘調査報告書1冊（『鹿田遺跡』6）、紀要1冊（『紀要2009』）、センター報2冊（『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報44号』、『同45号』）を刊行した。発掘調査報告書では、古墳時代の大規模な土器だまりおよび平安～鎌倉時代の集落を中心とする報告を行った。併せて土器だまり・曲物に関する2本の考察を掲載している。科学研究費補助金は、若手研究（B）2件が研究代表者として採択され、基盤研究（A）3件が研究分担者として配分をうけた。

**公開・教育** 2010年度は「謎の莊園 鹿田莊」と題する展示会とシンポジウムを併せて開催した。展示会およびシンポジウムでは、鹿田莊にかかる発掘調査を行ってきた岡山県古代吉備文化財センター、岡山市教育委員会の協力を得て、各機関所蔵遺物の出品および発掘担当者による調査報告と討論を行うことができた。発掘調査成果の公開としては、津島岡大遺跡第33次調査における現地説明会が挙げられる。

教育機関への支援として、例年通り博物館実習、中学生の職場体験を受け入れたほか、今年度は岡山県の事業である「岡山県生涯学習大学」を受け入れた。また、新たな試みとしては、オンザジョブトレーニングが挙げられる。これは本学学生が当センターの業務に携わりながら、職員との協業や実務経験を通して社会性を習得することや、身近な文化財を取り扱う作業体験から歴史への関心を醸成することを目指す、教育的な側面を有するものである。また、センター業務の推進という面でも効果的な取り組みであった。そのほか、本学で開講されている講義の受け入れも行っており、今年度の教育支援活動は例年以上に充実したものであったといえる。

**まとめ** 2010年度は4件の発掘調査を実施し、調査研究員の大半が発掘調査に従事することとなった。公開・教育活動についても例年以上の事業を実施しており、年間を通して業務の繁忙な状況が続いた。

その他、これまで長年の懸案事項であった資料の保管について、2010年度後半期に工学部16号館を借用することとなり、資料の一部を移動・収藏した。年度末には文・法・経済学部講義棟において収藏することとなり、工学部16号館の収蔵資料を再度移動した。これにより当面のスペース不足の問題は解消することができたが、今後の調査によってさらなる資料の蓄積が見込まれる。今後、センター施設全体の計画的な改善・更新をすすめるなかで、資料の保管スペースについても適切な場を確保していく必要がある。

（野崎）

## 付 編

### 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

#### (1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

〔平成16年4月1日  
岡大規程第93号〕

##### (趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に關し、必要な事項を定めるものとする。

##### (目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に關すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に關すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に關すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に關する重要な事項。

##### (自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

##### (教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

##### (センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を統括する。

##### (副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

##### (調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

##### (調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るために、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

## (管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

## (運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

## (事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

## (雑則)

第12条 この規程に定めるものほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

## 附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

## (2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

〔平成16年4月1日〕  
〔学長裁定〕

## (趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

## (審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

## (組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長
- 三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
- 四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人
- 五 センターの調査研究室長
- 六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

## (委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

## (委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

## (事務)

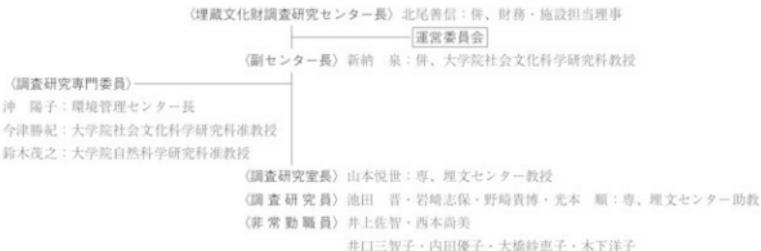
第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

## 附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

## 2. 2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

### (1) センター組織



### (2) 運営委員会

#### 【委員】

北尾善信 財務・施設担当理事（センター長）	大塚愛二 大学院医歯薬学総合研究科教授
新納 泉 大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）	沖 陽子 環境管理センター長（調査研究専門委員）
久野修義 大学院社会文化科学研究科教授	山本悦世 埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）
柴田次男 大学院自然科学研究科教授	山下隆幸 施設企画部長

#### 【2010年度協議・報告事項】

- |                  |      |                              |
|------------------|------|------------------------------|
| 第69回 2010年 7月29日 | 議 題  | ・平成21年度決算について                |
|                  | 報告事項 | ・平成22年度予算（案）について             |
|                  |      | ・発掘調査について                    |
|                  |      | ・教員の採用について                   |
|                  |      | ・助教の採用について                   |
| 第70回 2011年 1月24日 | 協議事項 | ・平成23年度予算（案）について             |
|                  | 報告事項 | ・平成23年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について |
|                  |      | ・発掘調査について                    |
|                  |      | ・第12回岡山大学キャンパス発掘成果展について      |

## 3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

### 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

平成12年5月15日  
埋蔵文化財調査研究センター長  
施設部長

#### I. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。

3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

## II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等
  - 1) 安全で機能的な服装にする。
  - 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
  - 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
  - 4) グライダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
  - 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2. 掘削
  - 1) のり面の角度
 

造成土：通常の土壤の場合は50~60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。
  - 2) のり面の保護
 

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
  - 3) 深い遺構（深さ15m以上の遺構）
 

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業
  - 1) 作業中には安全帯を使用する。
  - 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
  - 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。
4. 発掘用機械類の操作  
(ベルトコンベアー・ポンプ等)
  - 1) 調査用電源の設置と取り扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
  - 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
  - 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
  - 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
  - 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

(重機関係)

  - 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
  - 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
  - 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5. 健康管理
  - 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

## III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1) ~ 3) どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

## 付 表

付表1 1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地 区 名	種類	面積	調査名 称	調査組織	調査面積 (m <sup>2</sup> )	文獻	備 考
1980	施 田	立会	面	同宿院病院跡新宮	岡山市教育委員会	8		
	津島南	BD26	+	農	寺宿舍新宮	+		
	津島北	+	文古	合併処理施設	+			
	津島北	+	文古	合併処理施設	+			
	津島南	BD09、 DC09-11	+	基物整備（共同採取付）	+			
	津島南	BD ~ BE04 ~ 07	+	路上設技場改修（配水管設置）	+			
	施 田	医 病	面	高気王治療室新宮	+			
		+	+	動物実験棟新宮	岡山県教育委員会	+		
		+	+	病理解剖体腔部処理保管室新宮	岡山市教育委員会			
		+	医	運動場改修	+			
	津 島	AW06 - 10、 AX05 - 14、 AX08、BD07、 BE10	試解	排水系幹整備	+			津島AW14区で発生時代 の依頼をせりに擬測。 その後、岡山市・岡山縣 教委が残存表面等の調査 を実施
	津島北	AW14	発解	排水系中槽 (NP-1) 施設	岡山大学	240	3	小橋法日黒道路・津島岡 大第1次調査
	津島南	試解	学	武道館新宮	岡山県教育委員会	23		
	津島北	AY15 - 16	+	校舎新宮	+	70		
	施 田	医	標本保存庫新宮	岡山県教育委員会	80			
		+	医	外來診療棟新宮	岡山県教育委員会	5	40	2
		+	立会	動物実験施設間通排水管・ガス管理設	岡山県教育委員会	1		
	施 田	AE - AN22、 AE22 - 26	+	衛 電話ケーブル排設	岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

## 文献

1. 先木真一 1983 「鷺山大学附属部附属施設物実施設計工事に伴う排水管付造工事に伴う土工調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
2. 河本 浩 1983 「鷺山大学学部附属施設外診療棟新設に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
3. 古留秀典 1986 「岡山大学津島地区小橋法日黒道路 (AW14区) の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学埋蔵文化財調査室

付表2 2009年度以前の構内主要調査（1983～2009年度）

※凡例								
・総合番号：調査の地区別に通し番号（立会調査は施設別に記載）								
・津島岡大道路第1次調査は多段開設敷設による調査であることをから、総合番号を+1として区別している。								
・総合番号のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、総合内の番号記載を省き、全てが総合内に含まれた場合には総合番号に（ ）を付している。								
・立会調査で、付表に記載する基準：①中世土層以下を確認した箇所 ②明確な遺構・遺物を確認した箇所								
・番号：年度別開拓番号								
・文獻：付表4～5の番号に対応する。								

付表2-(1) 発掘調査

&lt;津島地区：津島岡大道路&gt;

総合番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	概 要	文獻
①	1982	-	AW14	小橋法日黒道路（津島岡大道路第1次 調査） 排水集中槽 (NP-1) 施設	10.28~11.24 84.19~35	24	発生時代中期・古代溝	3
①	1983	11	BE14-18、 BF17-18、 BG14-15	津島岡大道路第2次調査 排水管理設	84.19~3.5	365	発生時代早~前期集落	4
②	1983	12	BH13	津島岡大道路第2次調査 合併処理施設	11.14~11.22 84.19~35	276	発生時代早~前期水田開闢遺構（溝抜）	4
③	1986	2	AV00、AW00-01	津島岡大道路第3次調査 男子学生寮	12.1~87.618、 82.1~9.5	1590	縄文時代後期~弥生時代早期の貯蔵穴と河 道および集落、弥生時代の初期~近世の水 田・溝、古代の条里開闢溝	19
④	1986	3	BF-BG09	津島岡大道路第4次調査 室内堆肥場	87.119~1.22	70	発生時代初期の溝、中世河道	6
26	1988	1	AY06-08、 AZ06-07	津島岡大道路第5次調査 生物学研究科棟	627~893.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河 道、弥生時代末~近世の水田開闢溝	27
27	1988	2	AV-AW04-05	津島岡大道路第6次調査 生物学応用工学科棟	920~895.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河川、古代条里開 闢溝、弥生時代初期~近世の水田・溝	35
	1989	1						

総合 番号	年度	番号	調査地標	調査名 称	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	概 要	文献
28	1988	3	AV-AW05-06	津島岡大遺跡第7次調査 : 信昭工学科	10.12~89.3.1	800	縄文後期集落、弥生時代前期~近世水田	35
29	1990	1	AY-AZ08	津島岡大遺跡第5次調査 : 自然科学実験棟	4.3~4.21	90	古墳時代後期の溝	27
44	1991	2	BD18-19	津島岡大遺跡第8次調査 (A地点) : 伝伝子実験施設	7.23~12.25	600	縄文時代の土坑、弥生時代~近世の溝	32
45	1991	3	BH13	津島岡大遺跡第8次調査 (B地点) : 合併処理場	7.23~12.25	140	弥生時代溝、古代~近世水田	32
50	1992	1	AU-AW04	津島岡大遺跡第9次調査 : 佐佐間能登用工作科	7.1~93.12.9	600	縄文時代後期の蔚巣穴と河道、弥生時代~近世の水田	47
51	1992	2	BB-BC10~11	津島岡大遺跡第10次調査 : 保健管理センター	93.21~33.1, 4.17~7.31	400	弥生時代後期~古墳時代集落、近世耕作開 拓遺構	64
54	1993	2	AV-AW11~12	津島岡大遺跡第11次調査 : 総合情報処理センター	9.14~94.1.11	640	縄文後期遺構	36
55	1993	3	AV-AW13~14	津島岡大遺跡第12次調査 : 16書館	94.29~33.1, 4.1~11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代中期~古 墳時代溝、古代~近世溝 (条里開通)	64
64	1994	2	AW-AK11~12	津島岡大遺跡第13次調査 : 楠原厚生建設北工場	106~11.30, 95.7.10~10.4	816	縄文時代後期ビット、弥生時代水田、弥生 ~古墳時代溝。	41
69	1995	2	BB-BC12~13	津島岡大遺跡第14次調査 : 楠原厚生建設南工場	10.25~96.2.14	856	弥生時代前期水田、弥生~古墳時代の溝	46
70	1995	3	AW00-01	津島岡大遺跡第15次調査 : サウナイトベンチャービジネスラボ : ラブリー	96.1.16~4.25	1600	縄文時代後期~弥生時代早期の蔚巣穴と河 道、縄文時代後期溝、弥生時代前期水田、 古墳~中世水田、溝	36 72
74	1996	2	BD19~20	津島岡大遺跡第16次調査 : 動物実験棟新校	5.7~15	30.3	A地点: 縄文時代と古墳時代の土坑 B地点: 中世の溝、古代の柱穴跡、弥生時代 の水田	44
75	1996	3	AW02~04	津島岡大遺跡第17次調査 : 総合管理 (子循環施設)	5.21~97.1.9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水田、 古代の水田	44
85	1998	2	BB11	津島岡大遺跡第18次調査 : 佐々木施設 (南) 新宮に伴うポンプ機 設置	4.7~4.10	16	古代の溝状遺構	53
86	1998	3	AZ09-10	津島岡大遺跡第19次調査 : コラボレーションセンター	7.27~99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の西溝、古墳時代~ 中世の溝、近世道路沿い遺構、溝	65
87	1998	5	AY07	津島岡大遺跡第20次調査 : 館舎 (1階) 新宮に伴うギング棚取 除	10.19~28	16	黑色土面上に溝、中世溝	53
88	1998	6	AX09	津島岡大遺跡第21次調査 : ベレベーラー設置	11.6~24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期~前期、 古代土坑、溝	65
89	1998	8	AW02-03	津島岡大遺跡第22次調査 : 枢舎 (2階)	99.31~7.12	7735	縄文後期河道・墓葬、弥生時代河道・木田 町野、古墳時代溝、古代~元禄溝 (条里開 通)・水田野跡	53
104	1999	5	AZ15-BA14	津島岡大遺跡第23次調査 : 総合研究棟	00.23~7.28	1339	縄文時代後期河道・航跡、弥生~中期前河道、 溝・溝、弥生中期~近世	80
111	2000	3	AZ14	津島岡大遺跡第24次調査 : 総合研究棟裏り廊下	12.5~14	34.2	縄文時代後期河道・航跡	80
112	2000	4	BA15	津島岡大遺跡第25次調査 : 敷木施設装置	01.12.9~31	20	中世~近世の溝、杭	61
113	2000	5	BC-BD14~15	津島岡大遺跡第26次調査 : 事務所	01.3.26~9.30	1500	縄文~弥生時代の河道・蔚巣穴・土坑・炉、 近世の溝・堆	76
121	2001	2	BB-BC14~15	津島岡大遺跡第27次調査 : 濱立五丁場年記念館	02.21~6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代、古墳時代の 溝、中世の野跡 (条里開通)	68
127	2002	2	AW-AY06~08	津島岡大遺跡第28次調査 : 自然科学実験棟	4.30~9.20, 11.28~03.11.5	1796	弥生時代初期の粧跡、中世~古代の溝、溝	87
128	2002	4	BF16	津島岡大遺跡第29次調査 : 共同溝	9.18~10.3	626	弥生~古墳時代の溝、ビット	71
163	2007	1	BC19~20	津島岡大遺跡第30次調査 : 山岡山アソシエイバータ	8.1~12.17	10354	縄文~近代の遺構・遺物、古代の道路状遺 構、弥生~古墳の溝	93
166	2008	1	AX04	津島岡大遺跡第31次調査 : 山岡山アソシエイバータ	6.17~8.22	212	弥生時代初期の野跡、古代の道路状遺構、 縄文~近世の遺物	95
184	2009	1	AX02	津島岡大遺跡第32次調査 : 武道場新校	7.16~10.13	383	縄文時代後期~近世の遺構・遺物、縄文時 代後期蔚巣穴	100

## &lt;鹿田地区: 鹿田跡&gt;

総合 番号	年度	番号	調査地標	調査名 称	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	概 要	文献
①	1983	9	AU-BD28~40	鹿田跡第1次調査 : 外来診療棟	7.27~11.22 84.1.9~8.31	2188	弥生時代中期後半~中世集落	7
②	1983	10	BG-BD18~21	鹿田跡第2次調査 : NMR - CT室	8.1~12.30	176	弥生時代後期~中世集落	7
③	1986	1	CN-CU27-28, CT-CV19~27, CX-DD16~25, DD-DG22~23	鹿田跡第3次調査 : 館舎	6.2~11.29	2390	中世の集落、古代の河道と横脚	16
④	1987	3	DD-DF25, DG-DG'27~28	鹿田跡第4次調査 : 館舎周辺の配管	11.2~11.23	30	古代の河道	16
⑤	1987	2	BB-EH35~42	鹿田跡第5次調査 : 管理棟	10.6~88.3.2 88.3.23~3.31	1192	弥生時代中期後半~中世の集落	24
⑥	1990	2	BW-CG67~71	鹿田跡第6次調査 : アイソート・総合センター	11.20~91.6.30	690	弥生~古墳時代の集落、中世集落	40

付 表

総合 番号	年度	番号	境内座標	調査名 称	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	概 要	文献
25	1997	4	BH55-BX61, BY56-57	鹿田遺跡第7次調査 ：基礎研究地	98.227~8.6	829	古墳時代初期・中世の集落。近世の水田 地	85
27	1998	4	BP~BS30~32	鹿田遺跡第8次調査 ：基礎研究	7.28~9.1	165	古墳時代溝・中世溝	85
28	1998	7	CD033~37, CE-CF28~37, CG-CI20~37, CK-CL25~37	鹿田遺跡第9次調査 ：基礎	11.27~99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世～近世集落	53
31	1999	3	CD-CE10~12, DD-EF16~22	鹿田遺跡第10次調査 ：共同調査地	5.7~10.14	2441	古代の帆列（河道内）。弥生時代ピット。 近世溝	56
32	1999	4	CD-CM19~42	鹿田遺跡第11次調査 ：基礎	8.19~12.22	2020	古墳時代水田跡等、古代池底遺構。中世～ 近世集落	56
40	2000	2	CO-CV35~44, CN-CM38~41, CN28~38	鹿田遺跡第12次調査 ：スキルガーディセンター	10.2~01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代・中世集落、 近世土塁、溝	56
46	2002	3	BL-EH46~51	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教習研究地	4.30~10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土塁留目・溝 中世の集落、近世土塁群	98
55	2003	1	CD-CM12~20	鹿田遺跡第14次調査 ：基礎（日程）	7.31~12.17	1331	古墳～古墳時代の傾斜・溝、中世の井戸、 土塁・溝、近世のため池・土塁	71
56	2003	2	BQ-BS45~56	鹿田遺跡第15次調査 ：総合教習研究地外堀工事	10.16~10.29	304	古墳時代初期の井戸・溝、中世溝群	98
59	2004	1	AH-AI6~7, AP12~13, AN-AO4	鹿田遺跡第16次調査 ：立派駐車場新設工事	10.21~11.8	49.15	近世～近代の耕野・溝・畠・土塁、中世の 土塁、並木～古墳の河道	81
60	2006	1	BR-BY60~64	鹿田遺跡第17次調査 ：総合研究地（考古学）	7.30~11.14	642	古墳時代住居址、古代溝状遺構、中世井戸・ 溝・建物、近世土塁・溝	88
64	2007	1a	BT13~BY20	鹿田遺跡第18次調査 ：中世柵地	10.10~08.3.14	8722	古墳時代後期～近世の集落、井戸・溝	92
65	2007	1b	CG-CZ9~10	鹿田遺跡第18次調査 ：大水地	10.16~11.1	432	古墳後半井戸、近世入江式造構・護岸施設	92
66	2007	1c	CM-CN9~10, CO10~11	鹿田遺跡第18次調査 ：用水路改修	12.27~08.1.16	56	弥生時代土塁・溝	92
26	2008	1	AW~AY22~23	鹿田遺跡第19次調査 ：津宇部段丘部	6.20~9.22	80	弥生時代後期の「方形高まり」貝塚、並 木・土塁・溝、古墳時代土塁・溝、古代 ピット、近世土塁	95
80	2009	1a	BZ~CC31~40	鹿田遺跡第20A次調査 ：中央取水権（共同調査点）	6.18~7.31, 8.5~24	632	弥生時代～近世の遺構・遺物	102
81	2009	1b	BS30~23, BT~BW20~24, BX~CD13~25	鹿田遺跡第20B次調査 ：中央取水権（本体・季地点）	10.15~11.2.22, 3.1~8	2482	弥生時代～近世の遺構・遺物	102

## &lt;三朝地区：福呂遺跡&gt;

総合 番号	年度	番号	境内座標	調査名 称	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	概 要	文献
①	1997	1・2	—	福呂遺跡第1次調査 ：実験研究地	97.11.0~26, 7.26~31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世、近世 集落	55
②	1997	3	—	福呂遺跡第2次調査 ：実験研究地新設部分	97.11.25~12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表2-(2) 試掘・確認調査

## &lt;津島地区：津島岡大遺跡&gt;

総合 番号	年度	番号	境内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(3)	1983	1	BH13	合併処理場予定地	2.5	—	→津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	2	BF17	排水管中間ポンプ懸予定地	3.5	—	—	1
5	1983	3	BE-BG14, BE-BH15, BE18, BF16~18, BC18	排水管設置予定地	2.0	—	29ヶ所で試掘→津島岡大第2次調査：1983 年度	1
6	1983	4	BF22~23	農場新舗新設予定地	20~30	0.6	2~4所、上層部<1986年度工事立会>	1
(7)	1983	5	BC-BD15	人字季節開拓予定地	20~30	0.9	2~4所、→津島岡大第2次調査：2000年度	1
(8)	1983	6	BH10	保全管理センターアーク予定地	20~30	0.8	→津島岡大第10次調査：1999年度	1
9	1983	7	BH16	季節合宿新設予定地	0.9	0.9	1ヶ所<1987年度工事立会>	1
10	1983	8	AW05	牧舎新設予定地	3.0	1	1ヶ所	1
12	1985	1	BE08	溝埋設予定地	3.5	1.2	遺物など未発見<1986年度工事立会>	5
13	1985	2	AX02	研究施設予定地	26~34	1.2	3ヶ所、縄文・弥生土器出土	5
14	1985	3	AV~AW99~01	男子学生寮新設予定地	20~30	1	→津島岡大第3調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BF-BG69	同内運動場新設予定地	24.12~1.7	11	→津島岡大第4次調査：1986年度	6
(8)	1986	4	AY~AZ07	自然科学研究科棟新設予定地	16~32	0.6~0.8	→津島岡大第5次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02（上生地D）	外国人宿泊施設新設予定地	22~28	—	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	8
(23)	1987	5	AV11	総合情報処理センター新設予定地	20~30	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	身障障害者エレベーター建設予定地	30~35	約10	弥生・近世の遺物、古代・中世の水田 施設として調査	8
25	1987	7	BD09	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器 新設して開発	8
29	1988	17	AX01~06, AW04	施設建設予定地	20~35	—	→津島岡大第6：7次調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18~19	動物実験施設・遺伝子実験施設	23	11~12	→津島岡大第8次調査：1991年度	11

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
31	1988	20	BC29	国際交流会館	2.5	1.2	少量・荒骨の遺物出土。 →1988年度工事立会。	11
33	1989	2	AZ-BA05	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の落込み。縄 文時代後期・中期の瓦片。 →織紋・て満を、田畠38.5m <sup>2</sup> 。	14
34	1989	3	AZ17	合併処理池設置予定地	4.0	1.6~2.0	少量・明治の水田の耕野・溝。 →1989年度工事立会。	14
35	1989	4	BD02	学生合宿所予定地	2.0~3.2	1	縄文時代早・中期の耕野 →1989年度工事立会。	14
36	1989	5	AV-AW13	図書館新館予定地	3.0	1.4~1.6	→津島圓大第12次調査：1993年度	14
40	1990	3	BC02	学生合宿所シングル棟予定地	2.5	1.1	縄文時代後期・中期の耕野・溝。 →1989年度工事立会。	18
41	1990	6	AW-AX11	福生牛施設予定地	3.9	1.4~1.6	→津島圓大第13次調査：1994年度	18
56	1990	3	BE-BF22~23	貴志川用河床実験実施施設	1.5	—	少・近世耕作土。 GL~1.1mで黑色土。縄文土器1点出土。 盛り土保存。	30
65	1994	3	BD20	動物実験施設	2.0	0.9	GL~1.1mで黑色土。縄文土器1点出土。 盛り土保存。	33
71	1995	4	BE26	国際交流会館新館予定地	4.1~2.4	1.6	河古~中晩の土壤確認。以下は湿地状態。 遺構・遺物なし。(明治のみ) →工事立会。	38
72	1995	5	AW02-03	環境理工学部新館	2.4	1.2	→津島圓大第17次調査：1996年度	38
73	1995	6	BF07	ガラシングルボックス移設	3.0	3	標高25mで急斜上。出土・古墳時代の溝2 条、古代1条。	38
90	1998	9	AZ09	コロボレーションセンター新館に伴 う試掘調査	2.7~3.4	1.3	→津島圓大第19次調査：1998年度	53
91	1998	10	AW02-03	役場(日程)新館に伴う調査	4.5	1.2	→津島圓大第22次調査：1998年度	53
92	1998	13	AW04	システム工学科棟新館に伴う調査	2.8	1	GL~1.8mで無土層、織紋瓦の遺構 5~6m、TP1~3~5・最高地6m、TP2~ 4は乾燥地帯。TP1で生糞、TP3で赤 生糞・ビット。TP4で黒土。	53
93	1998	14	AU02-03-06, AV03	道路保護区整備に伴う調査	2.4~3.8	0.8~1.6	→津島圓大第23次調査：1999年度	53
105	1999	6	AZ15, BA14	総合校舎新館に伴う調査	2.7, 3.5	0.8 1.1	河古土以下。岩盤となる岩盤層 →津島圓大第25次調査：1999年度	56
106	1999	7	AV08	環境理工学部新館に伴う調査	1.2	0.2	河古土以下。岩盤となる岩盤層 →津島圓大第26次調査：1999年度	56
114	2000	6	AX00-02-03, AZ06, AW08	國文・弥生時代における環境復元に伴 う調査	2.6~3.2	1.7~0.9	6~所掘削、國文・弥生時代の微高地、吉 代川を確認	61
115	2000	7	BB14	前立50周年記念館新館に伴う調査	2	0.8	→津島圓大第27次調査：2001年度	61
129	2002	5	BD15	事務局日本被覆移転に伴う調査	2.1	—	赤色土の落ち残石	71
165	2009	2	AV14	字産保育室新館予定地	3.24	1.95	縄文層まで確認	102
186	2009	3	BF20	農業部構内植物工場新館予定地	北東2.28, 南西2.33	北東2.23, 南東1.11	縄文層まで振出、溝・暗渠確認	102

## &lt;鹿田地区：鹿田遺跡&gt;

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(4)	1984	1	BU30-31	西高校北側用水橋手足地	1.4	0.5~0.7	中黄土層、包含層確認 <盛土保存>	2
(5)	1984	2	CT-CU-25, CZ19-20-23-24	医療系人文学部校舎新館予定地	2.7	0.8~1.0	→鹿田第3次調査：1986年度	2
6	1985	4	AJ33, AJ40, AK-14K-26	外災治療棟環境整備工事に先立つ範囲 確認調査	2.2~3.0	0.9~1.4	弥生時代・中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY-H268	アイトドローリンセタ-予定地	2.3	1.2~1.3	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	保健医学棟	2.2	0.9	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	CF-CG43-44, CH25-26, CK35-36, CK15	病院新館に伴う調査	2.0~2.4	1	→鹿田第9次調査：1998年度	53
82	2009	2	CR70-71, CW75	学生サークル棟新館に伴う調査	北東2.12, 北西2.29	北東0.9, 南西0.7	→鹿田第9次調査：1998年度	102

## &lt;食倉地区&gt;

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1990	4	—	資源生物学研究室西側跡確認調査	2.5	0.7	中黄土手以前の土壌層	18
2	1998	12	—	リオイ実験棟新館工事に伴う調査	1.5	0.4	近世・古墳地内、遺構未確認	50

## &lt;東山地区&gt;

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	2006	1	—	附属小学校校舎建設工事に伴う調査	3.0	0.3~0.5	4ヶ所、近世・古代3条、中世・昭時	88
4	2008	1	—	附属中学校校舎建設工事に伴う調査	2.3~2.4	1	2ヶ所、古代昭時	90

## &lt;三朝地区：福呂遺跡&gt;

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	1997	5-6	—	実験研究棟新館工事に伴う試掘調査	1.66~2.1	0.8	2ヶ所・福呂第2次調査：1997年度	50
5	2004	1	—	二朝駅跡周辺整備工事に伴う試掘・確認 調査	1.3	0.5~0.9	2ヶ所、遺構・遺物・遺物含む層確認され た。	81
6	2004	2	—	駅構内・電線遮切工事	1.0	0.85	1ヶ所、向床跡、段丘壁確認	81

付表2-(3) 立会調査

&lt;津島地区: 津島岡大遺跡&gt;

記入 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土層 (m)	概 要	文 献
11	1984	20	BD15~17	南地区合併処理槽周囲配水管埋設	10~22	1	溝・土坑、青生土層・須恵器	2
19	1986	12	BD08~09	段倉新宮	2.3	1.3	中・古世の溝・上部	6
20	1986	21	BG08	ハンドホールコート敷設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	25	BP07~08	段倉新宮に伴う電気管配	1.8	0.9	中世埴輪	6
32	1988	17	BG10~11	チラスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL~約2mで黒色土、西に向かう落ちを観察	11
37	1989	8	AZ08	自然科學研究科移転工事用道路	1.4	~	弥生時代後期水田・溝	18
38	1989	10	AU06	段倉新宮に伴う電気管配	1.9	1	黑色土確認	18
42	1990	16	AV04~10	岡山市道本町津島東側拡幅に伴う種植工事1:電気管設	0.4~2.0	0.6~1.4	5~所、黒色土、桑室南北溝	18
43	1990	20	BC02~04,	岡山市道本町津島東側拡幅に伴う種植工事1:学生会宿舎鉛管配水管設置	2.3	1.2	GL~2.3mで黒色土	18
46	1991	9	BC18	防災用木樁	2	0.8	木製梁まで確認、石礫出土	21
47	1991	17	BB16	津島地区墓地整備(電気) ハンドホール・アース板	17~1.8	0.5	2~所、明治層・床面灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	津島地区墓地整備(電気):アース板	1.7	1	GL~1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC-BE-RF12	南北道路街路設置	1.5	~	3~所、GL~1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	造田子実耕種設施ハンドホール設置	1.5	0.75~1.1	漢文後期層まで掘削、溝2本	25
53	1992	34	AV12	段倉新宮に伴う電気管整備	3	1.7	造土土以下は粘土層	25
57	1993	17	BB~BC10~12	保育管理センター新宮に伴う外構工事 電気管配	1.8	0.6~0.7	保育管理センター本調査と同じ層序。黒褐色土はGL~1.15~1.7m、その直下には多層	30
58	1993	19	BB11	保育管理センター新宮に伴う旧棟改修 電気配線	1.1	0.8	歴史土層片、工法変遷	30
59	1993	23	BA07	津島地区墓地整備 共通利便施設将水処理施設等設置	3.2	~	明治~中世層・褐色土層、古代溝?、绳文時期土器	30
60	1993	28	BD~BE13	津島地区埋蔵文化遺物・南北道路歩道 ガラスカラバーハー設置	1.5	1	近世~中世層を確認	30
61	1993	33	BB~BG12~13	津島地区環境整備: 本館灯設置	1.8	0.5~1.2	10~所、近世~中世層まで掘削。一部で暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD~BE12~13	津島地区環境整備: 信号機設置	1.6	1	近世から中世層、一部で褐色土層	30
39	1993	39~41	BH05~07, BC05~41	野球場(バッテリ)・防球ネット改修	20~32	1	GL~12~20m付近で黒色土、以下は黄色 砂・青灰色土層	30
66	1994	9	BD~BE-BF04~07	地上競技場照明灯設置	2	0.96	オーナー擁壁(深80cm、深さ10m)、GL~1.92~20mで黒色土	33
67	1994	13	AV10, AW10, AU11	総合情報処理センター・新宮電気工事	2.2	1.5	近世2箇所、中世(背景か?)1箇所、GL~1.7mで黒色土、近世溝	33
68	1994	20	BD20	曉風閣	2.2	1.5	GL~1.9mで黒色土	33
76	1996	4	BC18	熱帯実験棟新宮に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	48
77	1996	5	BD16~19	熱帯実験棟新宮に伴うハンドホール設置工事	1.3	~	4ヶ所、造成土以下に5層確認	48
78	1996	12	AV02, AV03, AV04, AV99, AW02, AW04	サラリーパンチャービジネスラボラトリース新宮 外設置工事	10~1.5	0.76~1.1	6~所、明治層2箇所、近世層2箇所、中世層1箇所、後世層1箇所	48
79	1996	13	AV03~AW03	サラリーパンチャービジネスラボラトリース新宮 配管設置工事	2	0.95	古時代層まで掘削、古時代前中期の遺構、遺物	48
80	1996	18	AW03	段倉新宮予定地電柱移設工事	2	~	黒色土まで掘削	48
81	1996	25	AV13	附属図書館新宮: 水井戸・外構工事	1.3	1	造成土以下に青灰色粘土層・黄褐色粘土質・灰褐色粘土質	48
82	1997	16	BH13~BH13	南北道路ガラス管埋設工事	1.5	~	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11~BA13	南北道路ガラス管埋設工事	1.5	~	中世層	50
84	1997	24	BC12	高利厚生施設新宮に伴う高岡漬新設工事	2	0.8	GL~165mで黒色土。古代~近世の溝	50
94	1998	15	BA09	橋の外灯設置工事	1.47	1	GL~1.42mで黒色土	50
95	1998	22	AZ09, BA09	コロナレーションセンター支障配管 外構工事	1.4	1	GL~1.4mで黒色土	50
96	1998	24	BB12, BC12	角隅街灯設置工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	50
97	1998	31	AY06	段倉新宮に伴うガス管埋設工事	1.2~1.4	0.65~0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	50
98	1998	34	BC10	学生会館改修に伴うトラップ桿除去工事	2.2	1.45	GL~1.7mまで黒色粘土層。GL~2.2mまで 古褐色土層	50
99	1998	35	BA06	NTT地下移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘土質	50
100	1998	41	AX03~AY07	丸塚排水管設置工事	1.4	0.6~1.4	10~所、5地点で中世層、2地点で古代層、 1地点で古時代層まで掘削	50
101	1998	42	AU02	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1~1.3	GL~2mで南北後期層、GL~2.2mで縄文 土器層	50
102	1998	44	AV03, AW03	段倉新宮に伴う生活排水糞水槽設置工事	1.97	1.4	古時代層まで掘削、須恵器・土師器	50
103	1998	48	AW03	段倉新宮に伴うガス管埋設工事	1.45	1	中世層まで掘削	50
107	1999	8	AY00, AY01~03	橋の外灯設置工事	1.15~1.35	0.5~1.2	3~所で黒色土。(GL~0.85~1m) 確認	50
108	1999	12	AZ08~09	コロナレーションセンター新宮工事 に伴うハンドホール	1.08~2.1	1.03~1.16	2ヶ所、1ヶ所で古時代層まで掘削	50
109	1999	13	AW02	段倉(二期)新宮に伴うスロープ設置工事	3.5	1.2	開削面積25m <sup>2</sup> 、黒色土下面まで調査、近代 土坑・古代溝・縄文後期ビット	50
110	1999	42	AZ09	コロナレーションセンター新宮に伴 う排水桿	10~12	0.8~1.0	6ヶ所。1ヶ所で黒色土対応層まで掘削	50

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文獻
116	2000	17	BA12	津島地区電柱工事		1	造成土上に灰色粘質土・褐色粘質土層	61
117	2000	23	AY09	校舎改修工事 理学部本館基礎補強工事		1.3	造成土上に褐色粘質土・褐色粘質土・ 灰色粘質土	61
118	2000	28	AX10, AY10	校舎改修機械設備工事・電気	0.85~1.00	0.8~1.1	有孔ハンドホールはGL-16mまで掘削、 GL-15.2mで中世土 (東南から北西方向に 向かって走行)	61
119	2000	42	AW08, AX08	精密応用化学科棟都市ガス改修工事	1.6~2.05	1.45	GL-18.2mで中世粘土層 (中世?)	61
120	2000	44	BA16	総合研究棟改修電柱設柱工事	1.5~1.7	1	GL-14mで中世層?・平成層の墓山、土壌 を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	校舎改修電柱設備工事		1.6	10~1.2 2~所 GL-14mで灰土層上、GL-21m まで各層か?	66
123	2001	11	BB-BC16	木造桿電柱設置工事	1.5~2.1	1.2~1.4	2~所 GL-14mで灰土層上、GL-21m まで各層か?	66
124	2001	27	BB-BC13	木造桿岸壁修復工事	0.5~1.6	1	2~所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	木造桿木造橋		1.6	0.65~0.8 GL-14mで灰色粘質土層 (古代?) を確認	66
126	2001	31	BB14	木造桿岸壁修復工事に伴う旧電車廬基礎補強工事	1.05	0.45~ 0.75	12~所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	校舎改修電気設備工事		1.8	1.5~ 3~所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13~15	木造桿新設工事・將水桿・管路	1.2~2.5	0.7~1.2	美濃文土跡・石谷がまとまって出土、石質 土・泥炭	71
132	2002	51	BB13	木造桿新設その他の工事・將水桿・管路		1.57	0.8 中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13-BD14	木造桿新設その他の工事・外灯	0.90~1.19	0.8 ヨリ所で中世層と古代層まで掘削、GL-1.3 mで黑色土	71	
134	2002	55	BC07~09	一般教育棟G棟外設置設置工事	1.0~1.26	0.95	4~所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB~BC14~15	前五十周年記念講堂新設工事・汚水排水 管	1.0~2.3	0.85~1.0 黒色土上面まで掘削	71	
136	2003	1	BB13~15	前五十周年記念講堂に伴う掘削 (将水桿・管路工事)		1.3	0.7~0.8 中世層まで掘削	74
137	2003	4	AX06	電気研究棟改修電機設備工事 (オーストリア建設工事)		1.4	0.9 古代層?まで掘削	74
138	2003	6	BC15	田舎廻原筋引改修電機設備工事	2.43	0.85 GL-1.9mで黒色土、GL-21mで繩文系 層確認	74	
139	2003	7	BB, BC18	音楽部改修電機設備工事 (電設電力・電線引き込み建柱工事)		1.7	0.7 #0.5m、GL-1.2m前後で黑色土層、GL- 1.5~1.6m前後で繩文系層確認	74
140	2003	8	AX06~BA06	総合研究棟新設その他の工事 (汚水排水)		1.7	0.7~0.8 標準3.3~3.4mで黑色土、洪生・古代の東西 多��、丘陵・近代の東西溝・崎峰	74
141	2003	14	AW, AX06, 07	総合研究棟新設電気設備工事 (待行)		1.4	~ 中世層まで掘削	74
142	2003	15	AW~AX06~07	総合研究棟新設その他の工事 (排水)	0.5~2.5	1.6 軒下で繩文系層まで掘削した箇所あり、汚 水溝	74	
143	2003	17	BC~BD15	田舎廻原筋引改修電機設備工事 (外部排水・雨水配管)		2.75	1.1 軒下、繩文系層確認	74
144	2003	21~ 1	BG~BH13	公会堂水桿新設工事No.1区間 豊島部分骨格処理		1.8	0.9 繩文系層まで掘削	74
145	2003	21~ 2	BE~BG10	公会堂下水桿新設工事No.2区間 体育館裏・武道場西	1.95~2.25	0.8~0.9 軒下・繩文系層確認、管路で洪生早・面削まで 掘削、洪生溝・繩文土壌	74	
146	2003	21~ 4	AZ16	公会堂下水桿新設工事No.4区間 文・枝・2号館西	2.45	1.5 繩文系層まで掘削	74	
147	2003	21~ 5	BA10	公会堂下水桿新設工事No.5区間 理学部	1.9	0.7 手掘の埴土層を確認	74	
148	2003	21~ 6	BG22	公会堂下水桿新設工事No.6区間 豊島学部4号館東	1.5~1.9	0.9~1.4 埴土基盤層まで掘削、洪生・古墳初期段階	74	
149	2003	21~ 7	BT16	公会堂下水桿新設工事No.7区間 湯島筋泊所	1.15~1.3	0.8 中世層まで掘削	74	
150	2003	21~ 8	BI15	公会堂下水桿新設工事No.8区間 南宿舎	2.0~2.45	1.1 繩文系層確認まで掘削	74	
151	2004	1	BB~BD26	公会堂下水桿新設工事 留学生等宿泊施設		1.22~1.68	10 中世層まで掘削	83
152	2004	6	BB9~10	(詳) キヤノンシステム設備 留学生センター西	0.5~1.15	0.4~0.6 5~6段階区分層・道槽・繩文層確認	83	
153	2005	3	AV08	工芸部改修電機改造工事 (既設電柱撤去取り付け)		0.85	GL=0.9mで造成土、以下、青灰~白灰 色の粘質土3層を確認、「白色土層」は確 認されず	83
154	2005	5	AW09	工芸部総合研究棟改修電気設備工事 (アース板設置)		1.8	~ 基盤層~黑色土~明治の土層積層確認	83
155	2005	9	BE02, BG07	キャバパス基礎整備 (門扉改修等) 工 事	1.0~1.3	0.7 築堤地點・GL-0.7mで明治土と堆積土、 高さ~1mで中世層確認、築堤地點: 近畿 新町、中世層確認	83	
156	2005	13	BC~BE03, BB~BC02	ブール改修 (将水管改修) 工事	0.75~2.4	0.8~1.3 築堤地點: 「黑色土」層確認、青灰~古 墳層、高さ~1mで中世層確認、古墳土坑、古 代人頭骨、土壌	83	
157	2005	14	BB~BC04	サッカーフィールドネット設置工事	2.0~2.2	~ オーバーによる掘削、一部で「黑色土」確 認	83	
158	2006	2	AX10	工芸部総合研究棟改修電機改造工事 に伴う支承部撤去工事・耐震化改修基礎 設置	1.4~1.6	1.0 近代耕作土層以下。中世層まで5枚の層を 確認、近畿側・南北方向の溝	88	
159	2006	3	AZ~BA02~04	教育学部公会堂水桿新設工事	1.3~2.3	0.7~1.0 軒下所、深さ2.3m、配管、深さ1.05~ 1.93m、黑色土層あるいは白基層まで掘削、 東西方向の溝	88	

付 表

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文獻
160	2006	5	BA-BB02, BC02	ブル改修接続工事	1.7	0.7~0.8	黑色土層あるいは基盤層まで、古墳時代頃の溝状遺構	88
161	2006	11	AX08~09	「アース構造合意実験Ⅱ期」改修工事・耐震工事に伴うアース構造基盤掘削	1.8	—	古墳~弥生層	88
162	2006	13	BF16	貴賀2号墓南側柱材設置	2.0	—	少佐層まで	88
164	2007	4	BA12	合掌式水道接続工事(理学部他)	2.0	0.8~0.9	GL~16mで黒色土層認、弥生時代の溝	92
165	2007	8	AV-AX07~08	電気研究棟改修工事・施設及び昇降機設置工事	1.4~1.7	1.2	近世~中世層確認	92
166	2007	10	AW07~08	電気研究棟改修工事・外構構・配管(東方部)	1.1~1.4	0.9	近世層確認、土坑1基	92
167	2007	13	BA-BC20	「イキヌベ・シヨウ」施設外構改管工事	1.2~1.4	0.6~0.8	魂文時代~近代上層確認、中世、近世の溝	92
169	2008	7	AZ09	地下ヘルメット液化防護施設工事・是柱削除	4	—	黒色土なし、GL~4mほどで複層を確認	95
170	2008	21	AY03-AZ03- BA03	電気研究棟(教育系)改修電気設備工事・是柱削除	2	—	3地点掘削し、北地点では黒色土みられず	95
171	2008	22	AY04	電気研究棟(教育系)改修電気設備工事・施設施設改修	1.7~1.28	—	古土壤下に薄らしくは河通の埋土とみられ、其層を確認	95
172	2008	26	AZ03	電気研究棟(教育系)改修機械設備工事・都心ガス設備	1.2	—	GL~0.95mで黒色土を確認	95
173	2008	28	BB12	KDDI神奈川地区局新設工事・建柱	1.8	0.8~1.05	白褐色質土層まで確認、黑色土未確認	95
174	2008	32	BB04	メモリ系統水道メーターボックス取扱工事	0.9~1.5	—	中世層(?)まで確認	95
175	2008	33	BJ17	南側合電電源装置工事	2	—	およそGL~1.2~1.5mで黒色土層認	95
176	2008	39	AX04	人気品来施設改修工事・ガス管	0.85~1.21	1	中世層まで確認	95
177	2008	40	AX05	人気品来施設改修工事・ガス管移設	1.1~1.2	0.68~ 0.95	2地点掘削し、古跡まで確認	95
178	2008	42	AW00~01	新宿センターオフィス水道接続工事	0.85~1.75	0.7	中世~近代の瓦礫を含むされる南北溝4本を検出、黒色土上面まで確認	95
179	2008	43	AY01	教育学部体育館耐震改修工事・動物室	0.85	0.85	黒色土上面で弥生~古墳時代の水田跡等を確認	95
180	2008	44	AY03-AZ03- BA03	教育学部体育館改修機械設備工事・電気設備	1.2~1.7	—	2地点掘削し、北地点では中世層まで、南地點では東西溝の埋土を確認	95
181	2008	49	AY02	教育学部体育館改修電気設備工事・是柱削除	0.3~1.7	—	古土壤まで確認	95
182	2008	52	BB10~11	人気品来施設改修工事・一般教育施設棧ガス設備	0.7~1.2	0.55	GL~1.0m以下で複層、土坑1基、 sond. ?条	95
183	2008	53	AV04~06, AW04	北部屋外ガス配管新設工事	0.8~1.48	0.8~1.1	一部で中世層まで確認	95
187	2009	6	BE-BF04~08	電気有機蒸留槽(普通教育)改修工事・高社ケーブル	管路0.7~0.8- 0.9m	—	東洋瓦斯・中世層および近世層まで	102
188	2009	14	BB10	閑谷整備(施設進捗工事)新設工事	0.8~0.95	0.6	実機管理センター北東で弥生・遺構埋土確認	102
189	2009	16	AU06	人気品来施設改修工事・ガス管	0.7~0.95	—	一部弥生・混合層確認	102
189	2009	17	AU06~07	人気品来施設(動物糞育成)改修工事・排水管	0.65~0.9- 0.95m	1.25	北東部で河通埋土確認	102
190	2009	21	BB12	南北通路信号機付き待合室工事・西門南東	1.8	—	中世~弥生層まで掘削、雨面で黒色確認	102
		22	BA12	南北通路信号機付き待合室工事・西門北東	2.0	—	南北層まで掘削、黒色土確認	102
		23	BA13	南北通路信号機付き待合室工事・西門北西	2.05	0.58~ 1.25	南北層まで掘削、黒色土確認	102
		24	BD12	南北通路信号機付き待合室工事・事務室北東	1.95	—	南北層まで掘削	102
191	2009	25	AY-AZ02-03	電気研究棟二期(教育系)改修工事・ガス管	0.8	—	弥生層確認	102
		27	AY01-AZ03	電気研究棟二期(教育系)改修工事・電気設備	アース堆設16.5, 管路0.8- 外径10.8~13	0.4	アース堆設・南北層まで掘削、黒色土・中世以前の遺構埋土確認、管路・弥生・包含層・追構埋土確認、外径: 黒色土まで掘削	102
		29	AY02-03	電気研究棟二期(教育系)改修工事・屋外排水	1.15	1	黒色土・弥生遺構埋土確認	102
		30	AZ00~02	電気研究棟二期(教育系)改修工事・屋外排水	管路0.8~0.9- 1.12-1.2	0.7	管路: 包含層・灰町・小溝確認、北側埋土層まで掘削、黑色土確認、南側例: 魏文層まで掘削、黒色土無し	102
		32	AZ00~AY-AZ01	電気研究棟二期(教育系)改修工事・電気設備	アース堆設17, 管路0.8~0.9- 外径12.3	0.6	アース堆設・南北層まで掘削、黒色土確認、管路・含合層・上脚部小片確認、外径: 黑色土内	102
192	2009	42	AX16	文化祭ボーラー用便所施設工事	2.5	1.5	南北層まで掘削、南北中・後期漢字系確認	102
193	2009	48	BB16-BC17	総合研究棟(豪華系)改修工事・電気設備	管路1.45, アー ス管1.50~1.54	1.05	豪華系・近世層・古代層確認、アース板・豪 華管(豪華系)確認	102
194	2009	54	AUX03	環境理工学部公共下水道接続工事	A-23-B-24	0.9	A: 弥生~古墳層まで掘削、古代東西暦時 層確認、B: 黑色土上面まで掘削	102
195	2009	55	BC18	豪華系西水道改修層確認工事	2.7	0.55	岡山市教育委員会文化課対応、南北層まで 確認、黑色土確認	102

## &lt;鹿田地区：鹿田遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	構内実様	調査名 称	掘削深度 (m)	既成土厚 (m)	概 要	文献
3	1983	23	AO-AW22	外來淤泥帶水気配管設置	-1.3	-	弥生時代後期上層・分離形土製品、貝殻類	1
7	1985	6	AW-BE23, BEH-BE24	外來淤泥帶水気配管設置	1.3~1.7	0.7~1.3	中世・近世の遺構・遺物	5
8	1985	12	AG31, AG24, AF23	高幹渠廢整備工事・電気配線ハンダワーム施設	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中世包含層・ビット	5
9	1986	9	BI-EW4	記念施設の水管改修工事	0.8~1.3	0.8	中世包含層・主器出土	6
11	1986	24	CL~CR12, CR~CX13, CX~DA14	溝及び開墾工事	2	0.8~1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	資本施設に伴う基礎杭確認	2.5	-	弥生時代後期・遺構	8
15	1989	66	CE30-37-44, CJ-CJ45, L28-29	田管路排水地盤整備・外灯基礎	1.2~1.5	0.7~1.0	2ヶ所、中世層を確認	14
18	1992	29	BW71	アソート・センター・L形築溝・渠水橋	1.4~1.5	0.9	中世溝1条	25
19	1992	41	CJ73	テスコスト駄電線設置	1.2	1	古式土器1点	25
20	1994	5	DH60~62	溝岸改修工事	1.5	0.8	既成層以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝3条、ビット9基	33
21	1995	11	BG-BE38	鹿田地区墓群整備・附属病院液酸通路新設	1.5	1	既成土以下茶褐色土・青灰色粘土層・遺構なし	38
22	1995	14	CD07-68	鹿田地区墓群整備・既設タンク設置工事	2.3	1	中世2面確認、溝3条、溝内から中世・古代土器群出土	38
23	1995	17	CD08-CC11	鹿田地区墓群整備・附属病院液酸タンク設置改修工事	1.23	0.85	既成層確認、中世土器片、既設段工事地盤など(区間全長約1/2程度)は破壊	38
24	1995	23	DF56~67	防球ネット取設工事	3	0.8	既成6cmを12.4m、その内4.6mで上部片・石器出土、調査区西寄りは、GL-2m以下は既往通り	38
30	1998	36	BV73, CN78	技術新宮に伴う仮設支柱工事	1.2	1	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BW65~71	技術新宮に伴う給水網・管路	1.2~1.4	0.9	中世層まで掘削	56
34	1999	18	BW65	技術新宮に伴う木桿水橋	2.2	1.1	画面82cm、古墳溝、中世溝、ビット2ヶ所	56
35	1999	27	BY42-43, BI43-44	高幹渠廢整備(電気設備)・施中配管	1.25~1.45	0.45~0.5	既成層まで掘削、時期不明の遺構	56
36	1999	41	CF21~28, CL~CL28, CD~CT28~33	病院新宮に伴う共同解体	1.7	-	画面18cm、鹿田11次発見3区南側部分で部分ビット	56
37	1999	46	CN46~DE49	病院新宮に伴う汚水井・管路	2.3	1.2	古時代の瓦戸1基・土塀1基・中世罐等	56
38	1999	47	CM-CN-CP-CR-CT58, CV-DA-DC-DD-DP59	グラウンドソリューションネットポール	20~23	-	11ヶ所、南北60m×東西10m、7~10ヶ所付近は高高地、最北端は河邊	56
39	1999	48	BT51	病院新宮に伴う汚水桿水橋	2	1	既成土底下7層確認、古墳時代まで掘削か	56
41	2000	25	CD41~CN45	病院新宮その施工事・管路・雨水溝	1.6~1.8	-	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15~21-27, CO31~42, CS45, DV45	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	-	7ヶ所、瓦戸色土層・活松色砂質土層・暗色砂質土層を確認、高島鬼怒川	61
43	2000	29	DG27	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事	0.8~1.15	0.7	GL-0.85mで青灰色粘土層	61
44	2000	47	DG-DJ28~67	鹿田法庫無用水路環境整備改修	2.1~2.3	1.3~1.5	画面120cmの壁面調査、古代の遺構・河通	61
45	2001	37	BR-CA43, CA43~56, CA44~57, CL45, BR-CA55	鹿田教育研究施設埋蔵文化財発掘調査に伴う機械設置工事	1.65	0.7~0.9	中世層まで掘削。中世土器が多段出土した地域あり	66
47	2002	10	CH11~CN22	鹿田地ガス配管設理工事	1.0~1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT-BU11	鹿田地ガス配管設理工事	0.5~1.8	-	2ヶ所、GL-1.22mまで掘削した地点で中世または古代層確認	71
49	2002	22	CQ41~42	エカルギーセンター・機械新宮その施工事・共同溝清掃工事	1.5	-	1ヶ所、瓦戸層まで掘削	71
50	2002	25	CG41, CO43, CP43, CU38	エカルギーセンター・機械新宮その施工事・外灯	1.47~1.66	-	4ヶ所、中世層まで掘削	71
51	2002	27	CV36~45	エカルギーセンター・機械新宮その施工事・外構	0.9~1.9	0.9	中世の瓦戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI-BI45~53	鹿田教育研究施設新宮その施工事	1.85~2.0	0.8~1.0	5ヶ所、中世層まで掘削	71
53	2002	52	ED67	鹿田教育研究施設の施工事・機械清掃	1.25	-	中世層	71
54	2002	56	BG18	田舎合宿施設アーチストラップ改修	1.68	-	既成で弥生・古墳層、上部小片	71
55	2003	5	BS-BZ45, CA-CO46, CO45	鹿田教育研究施設新宮その施工事(屋外部分)	1.7	0.7~1.0	中世層に包含層まで掘削、近世土坑・中世窓多件、乳頭地層確認	74
56	2003	9	BL-BI45~53	鹿田教育研究施設外構工事(雨水・污水・廃棄物)	0.8~1.75	0.7~0.9	中世層に包含層まで掘削した箇所あり、古墳時代後期・中世舟形・近世土坑等を確認	74
57	2003	10	BR-BS0~54	鹿田教育研究施設水配管設理工事	1.33	0.8	一部で中世層確認	74
58	2003	13	BR53, BL54	鹿田教育研究施設外構工事(外灯)	1.4	0.8	中世層まで掘削	74
60	2004	3	AF16, AF~AJ17, AJ9~16	医病構内支管 ガス配管替工事	10~19m	0.7~0.8	既成版で近世～古代の木手畠、中世の岐疊を確認、弥生～古墳の河道と認定される砂層を確認	81
61	2004	5	AJ16~19, AJ16~19~, AJ~A009	医病構内支管 ガス配管替工事	0.9~19m	0.85	例で中世?～近代の岐疊を確認、弥生～古墳の河道と認定される砂層を確認	81
62	2005	3	DH-DJ18, DJ19	医学部電気セイツ周辺高圧ケーブル取付工事	1.1~2.5m	0.7~1.1	一部で弥生～近代層確認	83
63	2006	6	CT~CU45	エカルギーセンター・機械新宮に伴う工事	2.5	0.9	鹿田第12次発見地点と重複。同様の状況	88
67	2007	4	CC13~20, CD13~20	高幹渠廢整備(道路)工事	1.2~2.2	0.9~1.2	多層層まで掘削、中世東～南北漢溝延	92

付 表

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
68	2007	5	AS03~07, AV~AX07, BT09	中鉄機械屋跡水改修等の施工事	0.6~0.9, 1.4, 1.8	0.7	ガス管1・GL~1.8m, 中鉄東西溝、古墳時 代由北漢碑記	92
69	2007	7	BT11	中鉄機械屋跡工事・ガス管切断工事	1.28	0.5	中鉄溝跡・確認	92
70	2007	10	CO42, CV36	6呎堀柵(電気設備)工事	1.3~1.65	1.3	中鉄溝まで掘削、造橋跡土壁跡	92
71	2007	11	CG08, CF09~10, CG~CH1, CH11	環境整備(道路等)工事: ガス配管1	0.85~1.3	0.9	GL~0.85~1.3m, 中鉄溝(または堀)・ ピットなど確認、GL~1.0~1.3m, 中鉄溝・ ピット確認	92
72	2007	17	CL12, CM13, CN14~15	環境整備(道路等)工事: ガス配管2	1.10~1.2	0.4	中鉄溝、中鉄道構築上確認	92
73	2007	27	BT~BL265	鉄筋骨材棒(医学系)新嘗その他の施工事	1.35	1	中鉄溝確認	92
74	2007	28	CJ7~CP12	用水路改修工事	1.7~2.0	0.6~0.8	五合櫛及び川東側で高高地確認	92
75	2007	30	BE33	高木キルギー治療院改修工事	1.4	0.6~0.7	中世~近代の断面・溝確認、赤生後期土器 出土	92
77	2008	5	BT24~25	6呎堀柵(西堀柵とこわし地)工事 規則打ち跡水栓	0.98~1.4	0.7	赤生・基盤層を確認	95
78	2008	6	BQ24, BR24	6呎堀柵(西堀柵とこわし地)工事 ガイドコート	0.75	0.5	泥炭性堆積層を確認	95
79	2008	7	A053~54, AL54 ~AO64, AL54~ 61, AL62~AH65	高木キルギー治療院改修工事 ガス配管改修工事	0.26~1.0	0.5	近古層まで確認、土坑2基	95
83	2009	3	CB30, CB40	鹿田道路第20A次調査矢板打ち	0.8~0.9	0.7	中鉄溝まで掘削	102

## &lt;東山地区&gt;

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1983	13	—	財團小学校新設	4.0~5.0	—	シルト層中	1
2	1997	29	—	財團小・中学校地盤改良改修工事	1.2	0.79	GL~1.1mで近古水田層、渠1条	50

## &lt;三朝地区: 福呂踏跡&gt;

総合 番号	年度	番号	構内座標	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
4	1997	18	—	実験研究棟新設に伴う電気化設置工事	1	—	GL~10mで中世包含層は東に向かう上昇	50

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 (2010年度現在)

種類	調査名・地区名	前 叙 叙 (1箱) (約30リットル)						確 考 (主要時期・特殊遺物)	文献
		件数	上段	石器	木器*	織子*	その他	サンプル*	
柴掘	農田第1次調査 (外來施埋地)	601	506	155	20	0.5	1	28	出生中期~中世。近畿。木製便座・人 面彫刻土器・ガラス等
*	農田第2次調査 (NMB-CT室)	108.4	99	0.4	45	0.5	4	—	出生後期~中世。日舟・木船等
*	農田第3次調査 (松合)	64.6	41	0.3	18	0.3	5	古代~中世。石器	10
*	農田第4次調査 (配管)	4	2	0.3	0.5	0.2	1	古代・無縫製品	*
*	農田第5次調査 (管理棟)	117	88	25	6	15	19	出生後期~中世。近世	24
*	農田第6次調査 (アソート・総合センター)	62	59	65	1	15	—	中世。青銅鏡柄	40
*	農田第7次調査 (基礎医学棟)	78.3	72	—	13	—	1	50年代~近世。塗装木製品	53
*	農田第8次調査 (R10施埋棟)	10	10	—	—	—	—	出生~中世	53
*	農田第9次調査 (施埋1期)	120.1	96	0.1	13	9	2	出生~近世。木簡3点	56
*	農田第10次調査 (共同溝)	2	2	—	—	—	—	古代~近世	56
*	農田第11次調査 (施埋2期)	74	66	4	—	2	2	出生~近世。木簡1点	56
*	農田第12次調査 (エヌリギーセンター)	147	77	1	54	—	15	出生~近世。輪	61
*	農田第13次調査 (総合教育研究棟)	317	255	24	10	—	28	出生~近世	71
*	農田第14次調査 (施埋2期)	66	54	—	3	9	中世~近世	74	
*	農田第15次調査 (総合教育受講室周辺)	3	3	—	—	—	—	古墳初期~中世	74
*	農田第16次調査 (2体骸骨埋葬レバーテー他)	1	1	—	—	—	—	出生~近世	80
*	農田第17次調査 (総合研究棟・医学系)	111	68	4	8	1	30	出生~近世	85
*	農田第18次調査 (中世施埋地周辺)	184	156	19	18	—	31	出生~近世	92
*	農田第19次調査 (学部部屋)	375	136	1	4	—	234	出生後期~近世。宿泊、織物、籠刷毛等	95
*	農田第20次調査 (中世施埋地・共同溝)	382	201	81	71	4	25	出生後期~近世。木簡、植物、虫物	本書
*	津島岡大1次調査 (NP-1)	10	4	1	3	—	2	出生後期~古代。津島・湯物形木製品	本書
*	津島岡大2次調査 (外來施埋周辺環境整備・配管)	305	15	15	—	—	4	出生早期~出生前期	4
*	津島岡大3次調査 (学生寮)	73	55	15	2	4.5	10	文政後期~古墳初期。古代~近世 右肩拍印・靴頭沃丁・片岩	19
*	津島岡大4次調査 (原内運動場)	1	1	—	—	—	—	出生早期~出生前期 <試掘調査遺物を含む>	6
*	津島岡大5次調査 (大学自然科・研究科)	89	75	3	1	8	2	文政後期~古墳・古代・木簡・墨跡等	27
*	津島岡大6次調査 (生物応用工学科棟)	54	38	1	9	6	—	文政後期~近世。人形木製品	35
*	津島岡大7次調査 (情報工学科棟)	425	21	0.5	1	—	20	文政後期~近世	35
*	津島岡大8次調査 (遺伝子実験施設)	125	11	0.5	—	—	1	文政後期~近世	32

種類	調査名・地区名	施設(1施設約30リットル)					備考 (主要時期・特徴遺物)	文献	
		瓶数	上器	石器	木器*	様子*			
発掘	津島大第9次調査(生体機能応用工学科)	37.5	37	25	3		15	縄文後期～近世	47
	津島大第10次調査(生体機能応用工学科)	89	80	25	7		2	弥生前中期～改世	65
	津島大第11次調査(総合的歴史整理センター)	5.5	3	0.5			2	縄文後期～改世	36
	津島大第12次調査(同書簡)	72	41	1	20		10	縄文後期～古世	65
	津島大第13次調査(福利厚生施設 北)	12.5	12	0.5				縄文後期～古墳前期・中世	41
	津島大第14次調査(福利厚生施設 南)	13	12				1	出生～古墳	46
	津島大第15次調査(サウナイトバッヂチャージネスラボラトリー)	68	14	10	20		24	縄文後期～中世。縄文陶器・出生早期遺物、アンペラ、堅葉姫	72
	津島大第16次調査(動物実験棟)	0.3	0.3					縄文後期～中世	44
	津島大第17次調査(環境理工学部校舎Ⅰ期)	85	62	11			12	縄文後期～改世	77
	津島大第18次調査(南風林ガバメント)	1	1					縄文後期～改世	53
	津島大第19次調査(コラボレーションセンター)	34	24	1	4	2	3	縄文後期～近世	64
	津島大第20次調査(環境理工学部ガバメント)	1	1					縄文後期～改世	53
	津島大第21次調査(工学部エレベーター)	7	5	2				縄文中期～近世	64
	津島大第22次調査(環境理工学部校舎Ⅱ期)	38	27	4	3	1	3	縄文後期～改世、古代彌部材、衝撃物	77
	津島大第23次調査(総合研究棟)	96.5	25	85	60	2	8	縄文後期～近世、桃(縄文)、石梯	80
	津島大第24次調査(総合研究棟渡り廊下)	21	3	0.1	1			縄文後期～古世、桃(縄文)	89
	津島大第26次調査(貴字館教本施設)	0.3	0.1		0.2			中・近世	61
	津島大第28次調査(事務室本部棟)	34	18		5	1	10	縄文後期～改世	76
	津島大第29次調査(前立十四周年記念館)	15	14	1				縄文中期～近世	68
	津島大第30次調査(自然科学研究能能研究棟)	17	15	2				縄文後期～古世	71
	津島大第31次調査(貴字館教本施設)	21	2	0.1				縄文後期～近世	71
	津島大第32次調査(岡山市インキュベータ)	37.2	16	0.1	18		41	縄文後期～古世	93
	津島大第33次調査(大学附属東ニア店舗)	8	7	1			1	縄文後期～近世	95
	津島大第34次調査(教育行政会場)	62	14	3			45	縄文後期～近世	100
	津島大第35次調査(貴字館教本施設)	136	11	15		0.1		縄文中期～近世	本番
	津島大第36次調査(国際交流会館)	1	1					桃島～近世	本番
	桃田道跡第1次調査(先耕開拓施設)	10	9				3	縄文早期～出生中期・中世	55
	桃田道跡第2次調査(先耕開拓施設スロープ)	21	2			0.1		中世～改世	55
試掘	桃田(駕場場)	1	1					出生～中世	5
確認	津島北(男子学生寮)	1	0.7	0.3				縄文後期～出生前期	*
	津島北(自然科学研究施設)	1	1					縄文後期～出生前期	6
	津島土生(外国人宿舎)	1	1					縄文～中世	8
	津島北(身障者用エレベーター)	0.3	0.3					中・近世	*
	津島南(身障者用エレベーター)	0.7	0.7					縄文～中世	*
	津島北(校舎)	1	1					縄文～古墳	11
	津島南(動物・畜生子実験施設)	0.7	0.7					縄文～出生、中・近世	*
	津島南(宿題交換会館)	0.3	0.3					少雲	*
	津島北(合併トイレ)	0.2	0.2					中・近世	14
	津島南(学生合宿施設)	0.4	0.2				②2	中世	*
	津島北(身障者用エレベーター)	0.3	0.3					縄文	*
	津島北(附属施設)	0.8	0.8					古墳～中世	*
	津島南(学生合宿施設ホスピタル)	0.4	0.4					縄文～中世	18
	合農(資源生物学研究施設)	0.1	0.1					古墳	*
	桃田(アズキートガ能合センター)	1	1					中世～近世	*
	津島北(福利厚生施設)	0.5	0.5					出生～中世	*
	津島南(動物実験施設)	0.1	0.1					縄文～古世	33
	津島北(環境理工学部)	0.1	0.1					—	53
	津島北(ampus II)	0.1	0.1					—	53
	桃田(附属小学校)	1	1					出生～近世	本番
	東山(附属小学校校舎)	1.1	0.1				2		85
正倉	80年度	2	2					分割形土製品	1
	84年度	1	1						2
	86年度	1	1						3
	88年度	0.5	0.5						6
	89年度	0.5	0.5						8
分布	89年度 三郷・本郷	0.3	0.3						14
正倉	91年度 92年度	0.3	0.3						21・25
*	93年度～99年度	0.8	0.8						30・33・ 38・44・ 50・53・ 56
*	00年度	3	3						61
*	02年度	8.5	2.5	6					71
*	03年度	2	2						74
*	04年度	1	1						81
*	05年度	1.1	0.1			1	—		83
*	06年度	1.1	0.1			1	—		87
*	07年度	0.5	0.5			—			92
*	08年度	1	1			—			95

種類	調査名・地区名	施設(1施設の約30リットル)					備考 (主要時期・特殊遺物)	文献
		施設数	上器	石器	木器*	骨器*		
立会	199年度	0.2	0.2					102
*	10年度	4.2	0.2			4	近現代、簡單構造風船、瓦罐	本書
		3956.5	2685.5	207.2	397.5	25	26.2	620.3

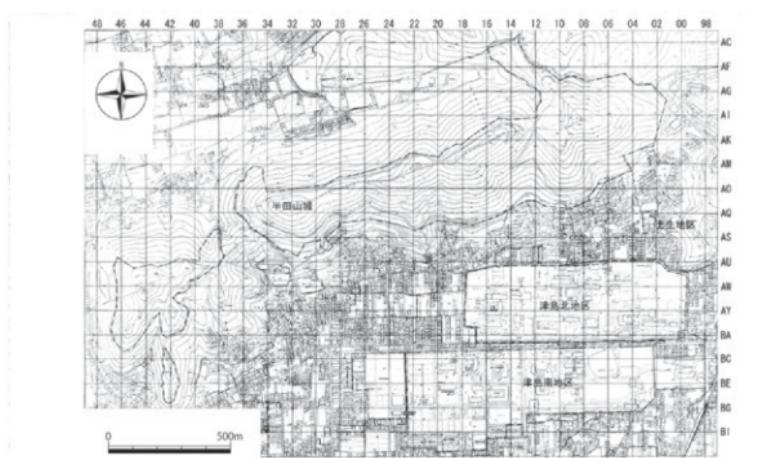
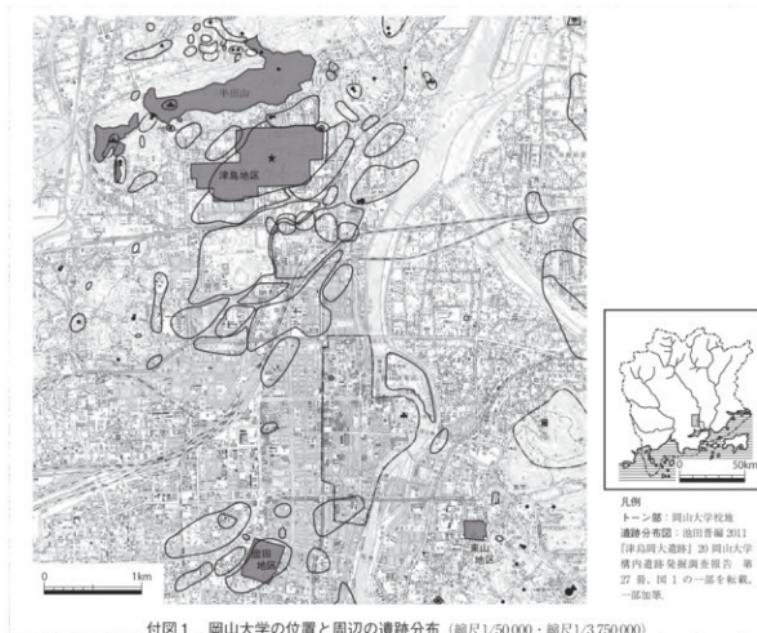
付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

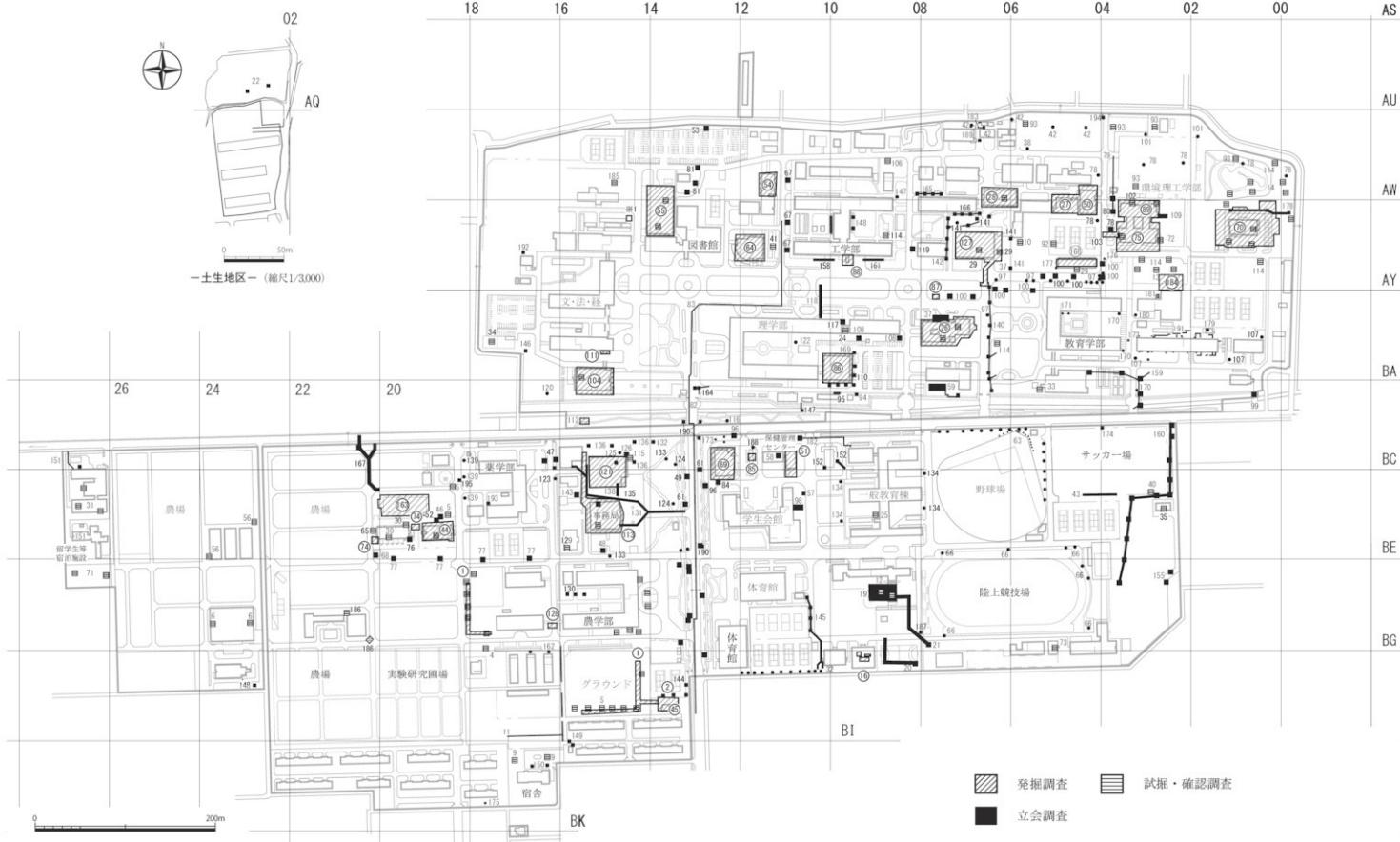
番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋古法累跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集		1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ(農学部構内BH13区他) 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊		1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1986年度	1987年10月

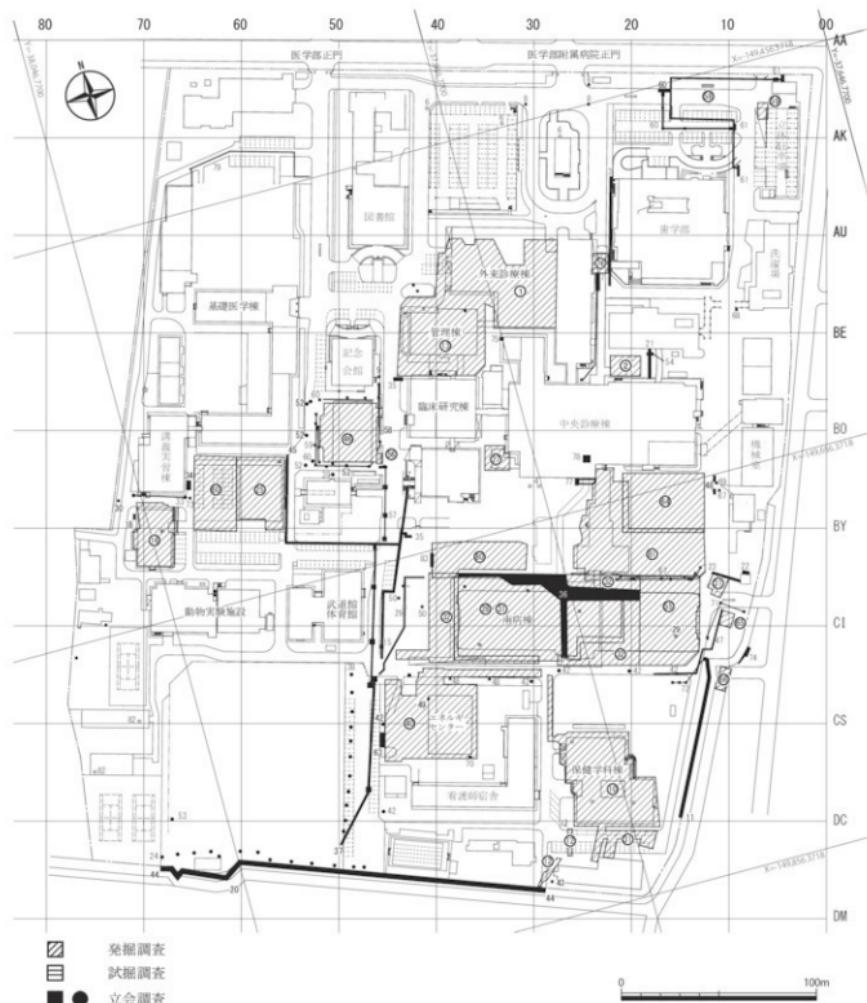
付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物(2011年3月まで)

番号	名	称	発行年月日
7	鹿田溝跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊		1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号		1988年10月
10	鹿田溝跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊		1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6	1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号		1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号		1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7	1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号		1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号		1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号		1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8	1990年度	1991年12月
19	津島岡大溝跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊		1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号		1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9	1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号		1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号		1993年3月
24	鹿田溝跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊		1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10	1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号		1993年11月
27	津島岡大溝跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊		1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号		1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号		1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11	1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号		1995年3月
32	津島岡大溝跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊		1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12	1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号		1995年10月
35	津島岡大溝跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊		1995年12月
36	津島岡大溝跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊		1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号		1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13	1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号		1996年10月
40	鹿田溝跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊		1997年3月
41	津島岡大溝跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊		1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号		1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号		1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14	1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年		1997年11月
46	津島岡大溝跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊		1997年12月

番号	名 称	発行年月日
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂溝跡Ⅰ 岡山大学構内溝跡発掘調査報告 第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内溝跡発掘調査報告 第17冊	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内溝跡発掘調査報告 第21冊	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第22冊	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年3月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第23冊	2007年3月
86	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18 岡山大学構内溝跡発掘調査報告 第24冊	2008年3月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年3月
89	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 -自然と人間、地中に埋もれた命の対話-	2008年3月
90	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第39号	2008年3月
91	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第40号	2008年9月
92	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2007	2008年12月
93	津島岡大遺跡19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第25冊	2009年3月
94	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第41号	2009年3月
95	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2008	2010年2月
96	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第42号	2010年2月
97	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第43号	2010年3月
98	鹿田遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第26冊	2010年8月
99	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第44号	2010年12月
100	津島岡大遺跡20 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第27冊	2011年3月
101	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第45号	2011年3月
102	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2009	2011年3月

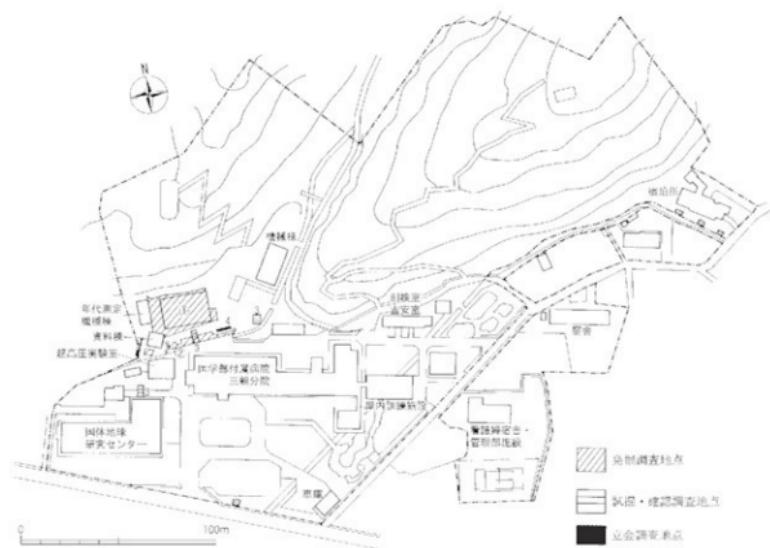






\*番号は付表2の総合番号に対応する。

付図4 2009年度までの調査地点【2】—鹿田地区—（縮尺1/2,500）



## 第Ⅱ部

### 岡山大学構内遺跡発掘調査報告

#### 第1章 津島岡大遺跡第34次調査

—国際交流会館新設に伴う発掘調査—

#### 第2章 鹿田遺跡第21次調査

—外来診療棟周辺他環境整備に伴う発掘調査—



# 第1章 津島岡大遺跡第34次調査

## —国際交流会館新館に伴う発掘調査—

### 第1節 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯
2. 調査体制
3. 調査の経過

### 第2節 調査の記録

1. 調査地点の位置
2. 層序と地形
3. 遺構と遺物

### 第3節 自然科学的分析

1. 植物珪酸体分析
2. 花粉分析

### 第4節 結語

## 例　　言

1. 本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、国際交流会館新館に伴って実施した津島周辺道路第34次調査の発掘調査報告である。  
同調査地点は、岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号に所在する。
2. 津島周辺道路第34次調査地点は津島地区構内壁標AU・AV13・14区に位置し、発掘調査期間は2010年7月30日～9月28日、調査面積は1500m<sup>2</sup>を対象とした。
3. 発掘調査は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
4. 本報告作成にあたっては、石器石材の同定において鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科）にご示教頂いた。記して感謝申し上げる。また、株式会社古環境研究所に植物珪藻体分析および花粉分析を依頼し、その成果を本報告に収録した。
5. 調査時の遺構実測・写真撮影は光本順が行った他、陶澤真梨子・奥原このみ・黒田祐介（以上、岡山大学大学院社会文化科学研究科修士課程）が補佐した。
6. 報告書作成にあたっての生産担当は以下の通りである。  
＜遺物＞土器・石器の整理・実測・浄理・観察表：山本悦世・光本・西本尚美  
　　遺物写真：南健太郎  
　　＜遺構＞浄理・西本
7. 本報告の執筆分担は次回に示した。
8. 編集は、新納一郎（副センター長）・山本悦世（調査研究室長）の指導のもとに、光本が担当した。
9. 本報告に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

## 凡　　例

1. 本報告で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標第V座標系（世界測地系）の座標北である。  
方位に関する記述では、本報告では調査時に使用した座標を用いる。
2. 遺物番号は、遺構別に番号を付すが、土製品にはT、石器にはSをつけて通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめて、実測図と組み合わせて掲載している。  
観察表の表記基準は以下の通りである。
  - ① 内外面の色調を併記する場合は、「内面/外面」の順序で表示する。
  - ② 脊土は、微弱：移粒径0.5mm未満、細弱：0.5～1mm未満、粗弱：1mm～2mm未満、細縫径2mm以上を基準とする。
  - ③ 法量の単位は「cm」である。復元値には\*付きの数字を表し、残存値には（ ）を付した。
4. 遺構は、碑國などで以下のように記号で種類を表記する場合がある。  
土塊：SK、溝：SD
5. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
6. 基本土層の本文表記は（ ）を使用した。

## 第1節 調査の経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

岡山大学津島キャンパスにおいて、国際交流会館を2010年度に新設する計画が立てられた。建設場所は津島北地区の北東部で、岡山大学附属図書館北側の駐車場箇所にある。

工事計画として示された掘削面積は1590m<sup>2</sup>であった。建築工法については、ベタ基礎工法が提案された。これは、可能な限り地下の遺物包含層に掘削が及ぼない形が模索された結果であった。ベタ基礎工法で施工するにあたり、当該地点の造成土と包含層の厚さ、および遺跡の状況をより正確に把握する必要があった。そのため、2010年4月23~28日の期間に当センターで試掘・確認調査を実施した。3箇所のトレンチによる試掘・確認調査の結果、調査予定地点における造成土厚の推定に必要なデータが得られた。また、試掘・確認調査地点では遺構・遺物が乏しかったものの、南に近接する第12次調査地点（図書館地点）の調査成果<sup>1)</sup>と関連する、弥生時代早期～前期の黒色土層に対応する土層が見つかった他、旧地形としては北～西部にかけて土地が低くなることが予想された。

この試掘・確認調査のデータに基づき、工事掘削の深さについては地表の基準標高から約23mとなり、掘削深度は中世層上面まで収められることとなった。こうした遺跡のデータおよび建築工法を受け、次のような方針で発掘調査を実施することとなった。当該地点については遺構・遺物が希薄と予想されることと、工事掘削深度が中世層上面でおさまることから、平面調査としては中世層上面までとした。あわせて中世以前の層位データを得るために、調査区南辺を中心に部分的な断面調査を実施することとした。また、調査をより効率的に実施するため、機械による表土掘削と並行して、それが終了した箇所については発掘調査を順次実施することとなった。機械掘削については、近代層上面と近世層上面でそれぞれ遺構の有無を確認しながら、工事に必要な掘削深度まで実施することとした。調査には、調査研究員2名が担当することとなった。

註

1) 山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡大遺跡』11 岡山大学構内道路発掘調査報告第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

### 2. 調査体制

#### 【発掘調査：津島岡大遺跡第34次調査】（発掘調査年度：2010年度）

調査主体 岡山大学（学長 千葉喬三）

調査担当 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（センター長 北尾善信）

調査員 光本 順（助教、調査主任）、山本悦世（教授、調査研究員）

運営委員会

センター長	北尾 善信	環境管理センター長	沖 陽子
副センター長	新納 泉		（調査研究専門委員）
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悅世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二		（調査研究室長）
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫	事務局施設企画部長	山下 隆幸

【報告書刊行】(報告書刊行年度:2011年度)

運営委員会

センター長	北尾 善信	環境管理センター長	沖 陽子
副センター長	新納 泉	(調査研究専門委員)	
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悅世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二	(調査研究室長)	
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫	事務局施設企画部長	秋山 明寛

### 3. 調査の経過

2010年7月30日に機械掘削を開始し、それと並行して発掘調査を実施した。機械掘削が最終的に完了したのは9月7日、発掘調査の完了は9月28日である。

機械掘削・発掘調査は調査区北半（以下、北区）の東端から始めた。北区において中世層上面で確認した遺構は鰐溝のみであった。断面調査として、調査区東壁および北壁において、弥生時代早～前期の「黒色土」層まで掘り下げを実施し、包含層堆積状況の検討を行った。また古代の条里遺構の推定ラインを予想して調査区北壁際の一部を掘り下げるが、同遺構は確認されなかった。

調査区南半（以下、南区）の機械掘削は8月19日から開始した。調査区東辺を機械掘削中、近世土坑が壁際に存在することが判明した。その後、南区内の平面調査で中世層上面を検出した際に、東西方向に並ぶ近世の土坑を確認した。調査区中央付近については、近世層上面で土坑2基を検出した。近世土坑は南区において10基を確認した。南区南壁沿い・東壁沿いにおいて土層断面の調査を実施し、前者では「黒色土」層～绳文時代層まで、後者では黒色土層まで掘り下げを行い、層序の記録を行った。南区南壁については、雨の影響により西半の一部

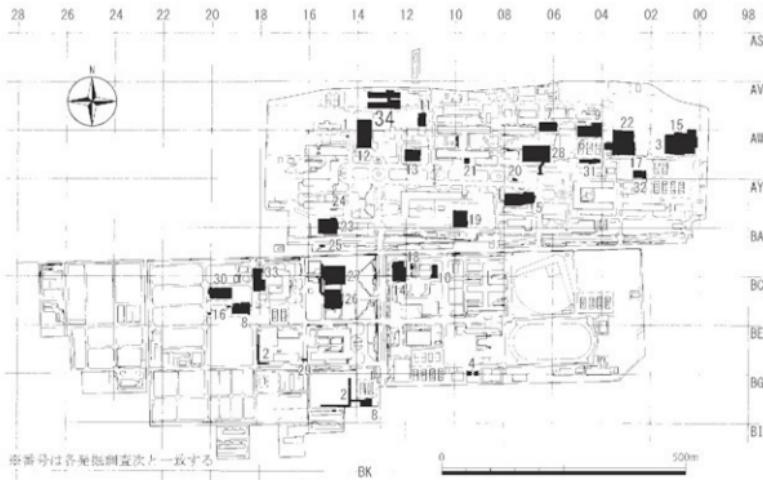


図28 津島岡大遺跡構内座標と各調査地点 (縮尺1/10,000)

の壁が崩落したため、最終的な記録をとることができなかつた一方で、弥生時代の溝数条を確認した。また、南区南壁・東壁の調査において、「黒色土」層上面の畦畔を確認した。

調査最終日の9月28日には、㈱古環境研究所に依頼して、南区南壁の土壤サンプル採取を実施した。

## 第2節 調査の記録

### 1. 調査地点の位置

本調査地点は、岡山大学津島キャンパス北地区の北東部、構内座標ではAU・AV13・14区に位置する。

本調査地点にもっとも近接する既往の調査地点は、附属図書館の発掘調査（第12次調査）<sup>1)</sup>である。同調査では縄文時代の遺構や弥生時代前期の水田が検出されるとともに、旧地形の様相も明らかにされた。すなわち、図書館地点の調査区は南半が高く、北半へ向かって標高を低くし、調査区外の南方に想定される微高地頂部と、北方に想定される低湿地部の中間にあたるものとして位置付けがなされた。この成果に基づけば、本調査地点においては、縄文時代以降の低位部の存在と、図書館地点と同様の縄文時代・弥生時代遺構の広がりが確認される可能性が予測された。また津島キャンパス内における条里遺構の研究<sup>2)</sup>から、古代の南北条里が本調査地点内（13-20ラインから東へ5m付近）を通ることも予想された。

註

- 1) 山本悦世・岩崎志保編2003「津島岡大遺跡」11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 岡山大学理系文化財調査センター
- 2) 池田 静2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」「津島岡大遺跡」19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊岡山大学理系文化財調査研究センター pp.63-72

### 2. 層序と地形

#### (1) 層序（図30～32）

調査地点内の区割りとして「北区」「南区」という呼称を用いる（図30）。層序については、北区北壁・東壁および南区東壁・南壁において実施した断面調査の成果に基づく。なお、柱状図J以西については断面調査のための掘削を行ったものの、その後の壁面の崩落により記録化はなし得なかった。

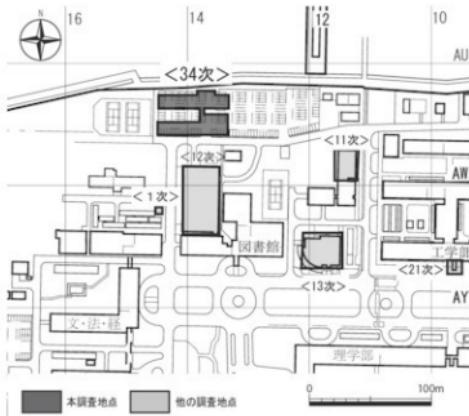


図29 調査地点の位置（縮尺1/4,000）

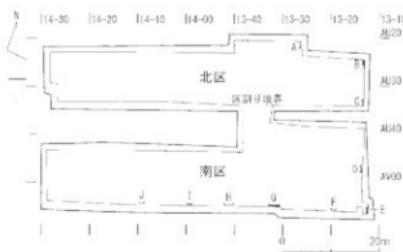
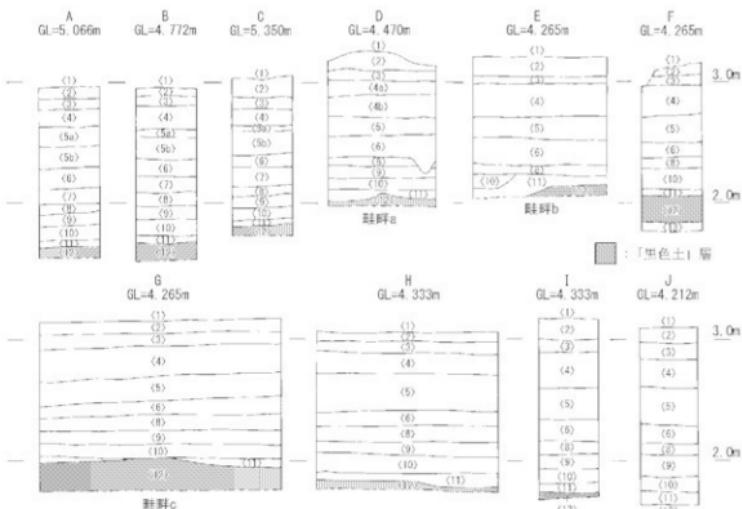


図30 調査区割りと土層断面の位置（縮尺1/1,000）



層位	時期	北区		南区	
		北端 柱状図A	東端 柱状図B・C	東・南端 柱状図D～E	東・南端 柱状図F～G
(1)	近代	造成土	造成土	造成土	造成土
(2)	近代	青灰色粘質土(砂利多)	青灰色粘質土(砂利多)	青灰色粘質土(砂利多)	青灰色粘質土(砂利多)
(3)	近代	淡緑灰色粘質土(砂利・Fe多)	淡緑灰色粘質土(砂利・Fe多)	淡緑灰色粘質土(砂利・Fe多)	淡緑灰色粘質土(砂利・Fe多)
(4a)	古世	淡灰黃色砂質土(Fe多)	淡灰黃色砂質土(Fe多)	淡灰黃色砂質土(Fe多)	淡灰黃色砂質土(Fe多)
(4b)	古世	淡灰黃色砂質土(Fe多)	淡灰黃色砂質土(Fe多)	淡灰黃色砂質土(Fe多)	淡灰黃色砂質土(Fe多)
(5a)	中世	灰色固粘質土(Fe多・Mn)	灰色砂質土(Fe多)	淡緑灰色粘質土(Fe多)	淡緑灰色粘質土(Fe多)
(5b)	中世	灰色粘質土(Fe多・Mn)	灰色砂質土(Fe多)	淡緑灰色粘質土(Fe多)	淡緑灰色粘質土(Fe多)
(6)	飛鳥	暗灰黃色粘質土(Fe多・Mn)	暗灰黃色粘質土(Fe多)	暗灰黃色粘質土(Fe多)	暗灰黃色粘質土(Fe多)
(7)	飛生～古墳	暗灰黃色粘質土(Fe多・Mn)	暗灰黃色粘質土(Fe多・Mn)	暗灰黃色粘質土(Fe多・Mn)	-
(8)	飛生後期	暗灰色粘質土(Mn多)	暗灰色粘質土(Mn多・Fe)	暗灰褐色粘質土(Fe多・Mn)	暗灰褐色粘質土(Fe多・Mn)
(9)	飛生中・後期	暗黃灰色粘質土(Mn多・Fe)	淡灰黃色粘質土(Fe・Mn)	淡灰黃色粘質土(Fe・Mn)	淡灰黃色粘質土(Fe・Mn多)
(10)	飛生前・中期	暗黃灰色粘質土(Fe多・Mn)	淡灰黃色粘質土(Fe多)	淡黃灰色粘質土(Fe多・Mn)	淡黃灰色粘質土(Fe多・Mn)
(11)	飛生前・中期	暗黃灰色粘質土(Fe)	暗灰褐色粘質土(Fe多)	淡灰褐色粘質土(Fe多)	淡灰褐色粘質土(Fe多)
(12)	飛生早・前期	黑褐色粘質土(Fe)(黒色土)	黑褐色粘質土(Fe)(黒色土)	黑褐色粘質土(Fe多)(黒色土)	黑褐色粘質土(Fe多)(黒色土)
(13)	縄文後期	-	-	青灰色・淡黃褐色粘質土	-

図31 調査区土層断面(1) (縮尺1/40)

（1層） 1907～1908年に実施された旧日本陸軍駐屯地造営に伴う造成土、および岡山大学設置以降の造成土を一括した層である。現地表面の標高は、調査区北辺で約5.0m、南辺で4.3m前後となり、北側が南に比べて高くなる。この比高は、（2層）以前の土層の状況とは逆となるため、造成によって意識的に形成されたものと考えられる。

（2層） 青灰色粘質土で、上面には畝溝がある。近代耕作土と考えられる。上面標高は北区で2.95～3.00m、南区で3.20～3.30mを測る。

（3層） 北区では淡緑灰色砂質土、南区では暗綠灰色砂質土を呈する。（2層）同様に砂利を多く含む。上面標高は北区で2.90m、南区で3.05～3.10mを測る。（2層）との土質の類似性から、近代耕作土と考えられる。

（4層） 北区では淡灰黃色砂質土となり鉄分を多く含む。一方、南区の一部では（4 a層）・（4 b層）に分層した。（4 a層）が淡灰黃色砂質土で、（4 b層）が暗綠灰色砂質土となる。上面標高は北区で2.72～2.86m、南区で2.80～

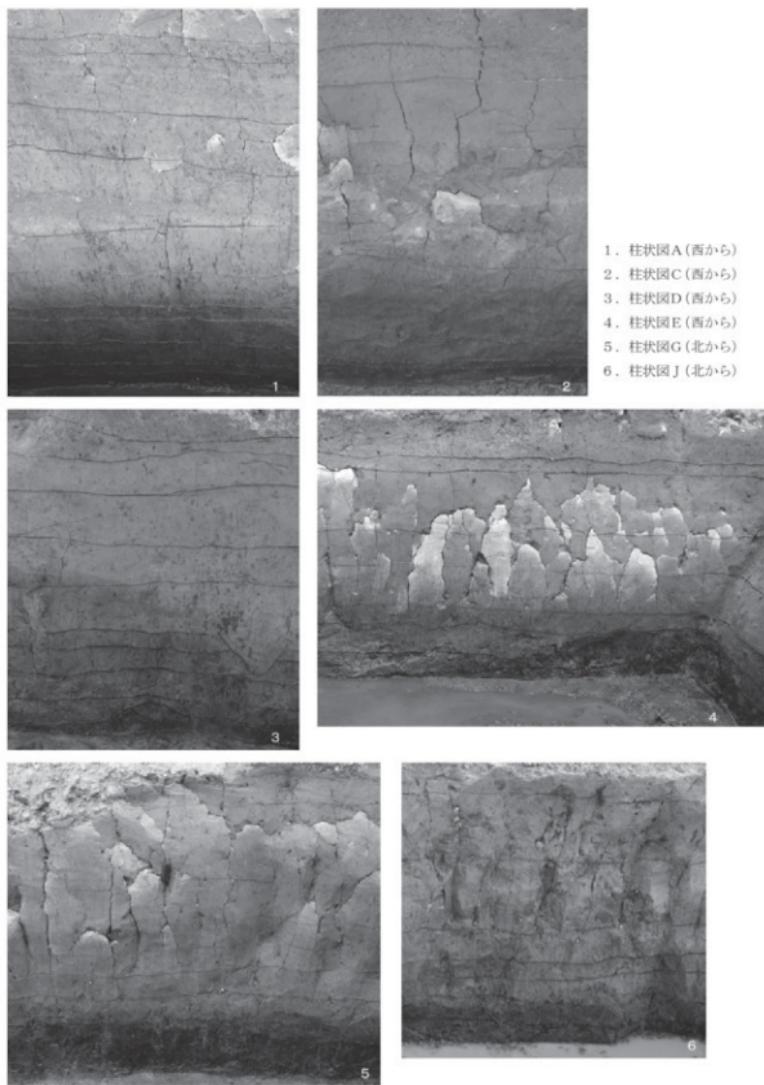


図32 調査区土層断面(2)

2.99mを測る。近世に属する土坑群の多くは、本層から掘り込まれている。本層は近世耕作土と考えられる。

**(5層)** 北区では〈5a層〉〈5b層〉に区分した。〈5a層〉は灰色粘質土～砂質土で鉄分が多く、マンガンも含まれる。〈5b層〉は灰色粘質土を基調とし、鉄分を多く含む。一方、ひとつの層として認識した南区〈5層〉は淡緑灰色粘質土で、鉄分を多く含む。上面標高は北区で2.50～2.60m、南区で2.60～2.77mを測る。南区においては西方が低くなる。時期については、13～14世紀初めの土師質土器椀小片が含まれるため、鎌倉時代の包含層と考えられる。津島岡大遺跡における中世後半の造成層に相当し、灰色を基調とする色調および土質から耕作土と考えられる。なお、本調査地点における通常の平面調査については、工事掘削がおよぶ本層上面までにとどめた。

**(6層)** 北区・南区とともに暗灰色粘質土となり、鉄分を多く含む。〈5層〉同様に色調および土質から耕作土と考えられる。北区の本層中から7世紀前半の須恵器が出土しているため、本層の時期は飛鳥時代に相当する。上面標高は、北区で2.28～2.45m、南区で2.28～2.60mを測る。

**(7層)** 北区において認識した暗灰黄色粘質土である。鉄分が多く含まれるほか、マンガンも含まれる。上面標高は2.15～2.40mを測り、北側に向かって低くなる。本層もまた耕作土としての性格が色調・土質から推定される。出土遺物がないため本層の時期は明確でないが、層序から弥生～古墳時代に相当するものと考えられる。

**(8層)** 北区において暗灰色粘質土、南区において暗灰褐色粘質土を呈する。色調が全体に黒みがかったり、鉄分・マンガンを多く含む特徴的な土層である。本層は、湿地状の土地において堆積した泥炭層の一種であるものと推定される。上面標高は、北区で1.99～2.15m、南区で2.13～2.39mを測る。時期については出土遺物がみられないが、層序から弥生時代後期頃に属するものと考えられる。

**(9層)** 北区において暗黄灰色～淡灰色粘質土、南区において淡灰色砂質土となり、北区が粘質、南区が砂質となる。こうした粘質／砂質の傾向は、本層以下で認められるもので、旧地形の影響によるものと考えられる。鉄分・マンガンを含む。上面標高は、北区で1.93～2.05m、南区で2.05～2.29mを測る。時期については出土遺物がみられず明確でないが、層序から弥生時代中～後期頃に属するものと考えられる。

**(10層)** 北区において暗黄灰色～淡灰黄色粘質土、南区において淡黄灰色砂質土となり、〈9層〉同様に北区が粘質、南区が砂質となる。鉄分が多く、マンガンも含まれる。上面標高は、北区で1.80～1.87m、南区で1.95～2.18mを測る。時期については出土遺物がみられず明確でないが、層序から弥生時代前～中期頃に属するものと考えられる。

**(11層)** 北区において暗灰色粘質土、南区において淡灰褐色砂質土をなす。鉄分を多く含む。上面標高は、北区で1.65～1.76m、南区で1.75～2.11mを測る。本層は「黒色土」の上層にあたるものである。南区の溝1～6は本層から掘り込まれたものである。時期については出土遺物がみられないため明確でないが、図書館地点との対比から弥生時代前期に属するものと考えられる。なお、南区南東隅（柱状図E）では、本層の整形による畦畔の可能性がある層の盛り上がりが認められた。しかし、それは北側への〈10層〉の落ちを伴う一方で、〈10層〉の南側への落ちが南壁では確認しておらず確実なものとはいえない。

**(12層)** 北区において黒褐色粘質土、南区において黒褐色砂質土をなす。弥生時代早期～前期の「黒色土」層に該当する。上面標高は、北区で1.61～1.69m、南区で1.63～2.06mを測る。北区の上面標高は北端部（柱状図A）が最も低く、南端部（柱状図C）にかけて徐々に標高を高くする。南区の本層上面標高に関しては、東壁において2.00～2.06mを測る。また南区南東隅に位置し、かつ畦畔がみつかった柱状図Eから、同じく畦畔が認められる柱状図Fまでの上面標高は1.97～2.06mとなる。一方、柱状図Gの畦畔西端から柱状図Jまでは1.63～1.98mとなり、その中では柱状図G付近が最も高く、柱状図J付近が最も標高を低くする。こうした標高データをみると、畦畔がみつかった南東部の柱状図D～G間で標高が高い微高地状の土地をなすのに対し、それより以北・以西において低位部を呈するものと考えられる。なお柱状図J以西の堆積状況については、調査壁面の崩落により記録を行い得ず判然としないものの、〈12層〉上面までの掘削を目指した結果、深度が深くなつたことも崩落の一因

であったものと考えられる。したがって、柱状図J以西も低位部が続くものと考えられる。本層の土質は、こうした地形に対応し、微高地状部分において砂質が強く、低位部に至ると粘性が強くなる傾向がうかがえた。ただし両者を層位的に分層することは困難であった。本層上面において、本層を削り出すことで構築された畦畔を南区南東部で確認した(柱状図D・E・G)。本層での遺物の出土はみられなかった。本層の時期については「黒色土」の時期として從来から位置づけられてきた弥生時代早期～前期の範疇と捉えたい。

(13層) 南区南壁の柱状図F付近における掘削においてのみ確認した。黄灰色～淡茶褐色砂質土である。上面標高は1.75～1.82mを測る。遺物は出土していないが、津島岡大遺跡における縄文時代後期層と考えられる。

## (2) 地形

調査区の断面調査の結果に基づくと、弥生時代早期～前期の(12層)段階の地形については、本調査地点の北東～南西にかけて「低位部」が広がり、南区南東部を中心に「微高地状」を呈することが判明した。すなわち、低位部が北東から南西にかけて湾曲するように広がる地形が推定される。このあたりは、縄文時代後期の(13層)段階の地形を反映しているものと推定されるが、(13層)を確認したのが柱状図F付近のみであるため判然とはしない。

旧地形由来する土地の高低差は、近代の(2層)段階まで継続し、近現代の造成土である(1層)によって失われた。ただし、7世紀に属する(6層)段階までは高低差が20～30cmを測るが、中世の(5層)以降になると10～20cm程度に変化し、土地の起伏がいくぶん解消される傾向がみられる。

旧地形が生じた要因としては、大学敷地北縁部分にあたる本調査地点の立地、すなわち半田山山裾に接するという立地上の特徴が挙げられる。本調査地点において検出した近世土坑群の東西列が、13-40ラインから13-50ラインにかけて屈折する状況(図33)も、弥生時代の微高地状の土地と低位部の位置関係を踏襲したものと考えられる。また本調査地点西方の大学キャンパスの敷地境界が、北東から南西へ屈折する状況も、弥生時代の旧地形と対応する。したがって、立地に起因した旧地形の影響は、現代にまで何らかの形で反映されているものと考えられる。

縄文時代～弥生時代の地形に関して図書館地点(第12次調査)と比較すると、同地点の縄文時代後期層の上面標高は北半で1.65m、南半で2.1～2.2mであり、「黒色土」層では北半で2.0m、南半で2.4mとなる。本調査地点南東部の(13層)(12層)の上面標高は、図書館地点北半における縄文時代後期層および「黒色土」層の標高と類似するものといえる。したがって、本調査地点南区南東部の微高地状の土地は、図書館地点北半から続く一連の土地であり、図書館地点南方の自然堤防よりも標高が低くなる緩斜面の北西部にあたるものと考えられる。

## 3. 遺構と遺物

本調査地点においては、(5層)上面(鎌倉時代)までの平面調査の過程で鉛溝と近世の土坑11基、また調査区裏面の調査の際に畦畔1面と弥生時代の溝6条を検出した。調査区内の包含層の残存状況について

表7 検出遺構一覧  
a. 土坑

番号	時期	上面形	長辺/短辺(m)	底面高(標高m)	深さ(m)	側面形
1	近世	—	楕1.81/0.32	2.35	0.47	直鉢形
2	近世	多角形	2.15	1.78	1.07	直鉢形
3	近世	楕丸長方形	楕0.56/2.80	2.25	0.56	直形
4	近世	—	—/1.85	2.48	0.44	直鉢形
5	近世	楕丸長方形	1.95/1.38	2.00	0.58	直形
6	近世	楕丸長方形	1.84/1.64	1.82	0.20	直形
7	近世	楕丸長方形	2.53/1.70	2.03	0.80	直形
8	近世	円形	3.72/3.00	1.75	1.04	直鉢形
9	近世	円形	1.82/1.26	2.31	0.26	直鉢形
10	近世	楕丸長方形	—/1.10	2.02	0.90	直形
11	近世	楕丸長方形	2.58/1.55	1.75	0.83	直形

b. 溝

番号	時期	長さ(m)	幅(m)	底面高(標高m)	深さ(m)	側面形	方向
1	弥生前	129	N 0.17, S 0.49	N 1.76, S 1.99	N 0.11, S 0.08	直形	S→N
2	弥生前	129	N 0.65, S 0.43	N 1.81, S 2.02	N 0.12, S 0.06	直形	S→N
3	弥生前	129	N 0.36, S 0.41	N 1.85, S 2.05	N 0.08, S 0.03	直形	S→N
4	弥生前	129	S 0.34	S 1.96	S 0.09	直形	—
5	弥生前	129	S 0.34	S 1.72	S 0.28	逆凸形	—
6	弥生前	129	S 1.00	S 1.75	S 0.42	逆凸形	—

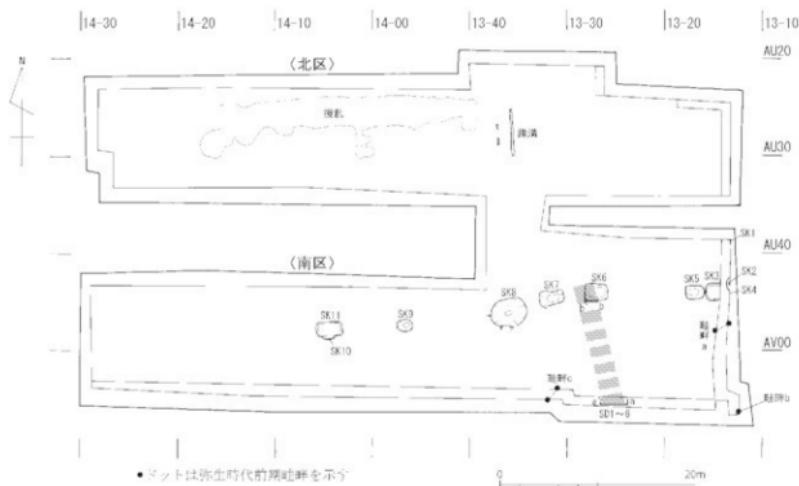


図33 検出遺構全体図（縮尺1/500）

は、北区西半の北辺において近現代の掘削によって近代以前の包含層が失われていたものの、それ以外は良好に遺存していた。以下では弥生時代および近世の遺構に関して説明を行いたい。なお溝については、北区中央付近の〈5層〉上面において、一部明確なものを記録した。溝は南北方向にのび、最長のもので最大長4.78m、最大幅0.22m、深さ6cmを測る。浅いものでは、最大幅0.13~0.18m、深さ2cmとなる。溝埋土は淡灰白色砂質土である。土質からみれば溝は〈5層〉に伴うものと考えられる。条里遺構の研究から予想された、古代の南北

条里（13-20ラインから東へ5m付近）については、北区・南区の断面調査で検討したが、該当する位置に溝や畦畔等の遺構は見出せなかった。

#### (1) 弥生時代の遺構・遺物

##### a. 畦畔（図30～33）

南区南東の壁面において、「黒色土」である〈12層〉上面につくられた畦畔を三箇所確認した（畦畔a～c）。これらは、調査区壁面における断面形状から畦畔として蓋然性が高いと判断したものである。なおこれら以外の、周辺における細かな凹凸や傾斜もまた、本来は畦畔をなす可能性は存在する。

畦畔a・cは、北東から南西にのびる。畦畔bは南区南東コーナー（西壁・南壁）においてみつかったもので、それと対応する畦畔が周辺に認められなかったことから、これについても北東から南西方向にのびるものと考えられる。こうした畦畔の方向は、〈12層〉の微高地状緩斜面の平面形に沿ったものと考えられる。なお、これらの畦畔の断面図（図30：柱状図D・E・G）は畦畔を斜めに切った状態を示す。

畦畔は、いずれも〈12層〉を削り出す形でつくられている。畦畔周縁の〈12層〉の上面標高は畦畔a付近で2.03m、bで2.07m、cで1.94mとなる。畦畔頂部の標高は、畦畔aで2.08m、bで2.16m、cで2.02mである。畦畔の高さはaで5cm、bで9cm、cで8cmを測る。推定しうる畦畔の幅は、畦畔aが0.29m、畦畔cが0.48mとなる。〈12層〉および上層の〈11層〉から遺物が出土していないため、これら畦畔の時期については特定しえないが、津島岡大遺跡における「黒色土」上面畦畔の時期である弥生時代前期中頃～後半が推定される。

##### b. 溝（図33・34、表7）

溝1～6 調査区南壁および近世の土坑6の壁面において、6条の溝を確認した。2つの箇所でみつかった溝群は、その位置関係と掘り込み面、断面形状、切り合い関係から一連のものと考えられる。土坑6底面では平面的にも溝が認められたが、溝の方向については南東～北西方向であり、調査区南壁の溝群へのびることを示唆した。

調査区南壁（a断面）では溝1～6、土坑6壁面（b断面）では溝1～3・6が認められる。溝群の掘り込み面は、上面が溝2・3による削平のため不明である溝1を除けば、いずれも〈11層〉である。溝群の上面標高は、南のa断面で2.00～2.09m、北のb断面で1.91～1.94mとなる。〈11層〉段階の地形については、南区南東部が微高地帯、その周辺が低位部となる〈12層〉でみられた状況を踏襲している。溝群は、微高地状の土地を縱断しながら低位部に向かってのびる。溝1～3では溝の底面標高を断面a・bで比較し（表7）、いずれもa断面では底面標高が高く深さが浅いのに対し、b断面では底面標高が低く、かつ深くなる。すなわち溝1～3に関しては、南の微高地状緩斜面から、北の低位部方向へと傾斜する形となる。

溝群の切り合い関係としては、次の3パターンが認められる。すなわち溝1→溝2→溝3、溝1→溝2→溝6、溝4→溝5→溝6である。こうした切り合い関係からは、溝6および溝3が相対的に新しく、溝1が古いことがわかる。溝3に関しては溝1・2の後に作られたことは明らかであるが、溝4～6との前後関係は不明である。また溝4に関しては、溝5・6の前に構築された一方で、溝1～3との前後関係は不明である。

断面形状については、溝1～4が浅い皿形となるのに対し、溝5・6は深い逆凸形を呈する。埋土に関しては、いずれの溝も、粗砂ないしは微砂が多く含まれる。a断面においては、溝1～4が淡・暗灰褐色砂質土となるのに対し、溝5・6は灰色を強めた色調であり、かつ黄灰色砂ブロックが含まれる。またb断面では、溝1～3が淡・暗灰色砂質土で灰色砂ブロックや〈12層〉（黒色土）に由来する黒色砂ブロックを含むのに対し、溝6が暗黄色砂質土で暗灰色粘土ブロックを含む。

このように、切り合い関係や断面形状、埋土の状況をみると、溝1～4と溝5・6とで差異が認められる。それを勘案すれば、構築順序については溝1→溝2→溝3の後に、溝5→溝6が位置づけられる。溝4については、前者の構築のまとまりの中で捉えられる。溝群から遺物は出土していないが、掘り込み面から考えれば時期とし

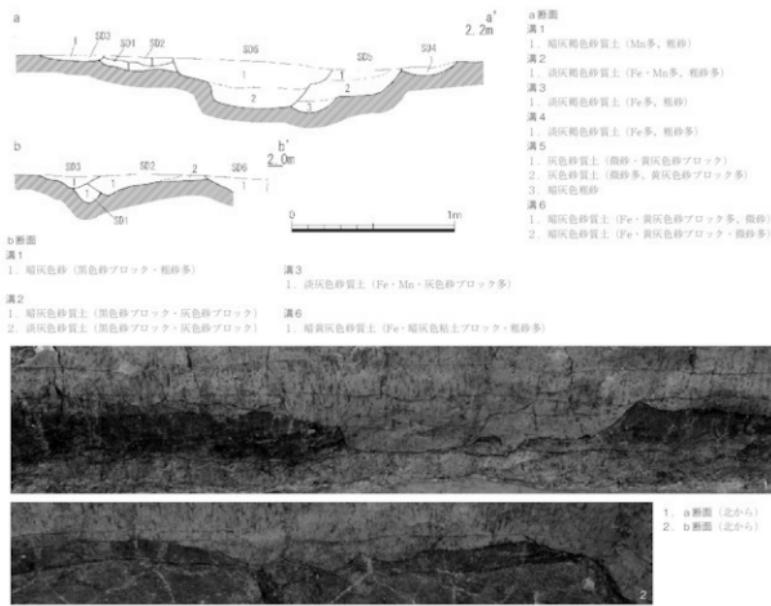


図34 溝1～6（縮尺1/30）

では弥生時代前期後半～末の範疇が想定される。本溝群は図書館（第12次調査）地点ではみつかっていないため、同地点北東から第13次調査（福利厚生施設北棟）地点にかけてのびるか、途切れるものと推定される。

## (2) 近世の遺構・遺物

### a. 土坑（図35～39）

南区において、近世に属する土坑を11基検出した。検出面は土坑7・8が〈4層〉であるが、土坑1～3・5・6・9～11は〈5層〉上面である。調査区東壁を観察すると、土坑の掘り込み面は土坑1～3が〈4層〉、土坑4が〈3層〉である。したがって土坑の本来の掘り込み面は〈4層〉ないしは〈3層〉であるものと考えられる。なお土坑4は調査区東壁のみで確認したものである。それは断面形から溝である可能性もあるが、平面調査において溝に該当する埋土が見つからなかった点と、土坑2・3上方に切り合う形で構築されることから、土坑の範疇で捉えた（図36）。また、土坑3に関しては、〈5層〉上面で平面を検出した他、隣接する調査区東壁においても類似する埋土が認められた。平面形と底面標高を検討した結果、後者についても土坑3に属するものと判断した（図36・38）。近接して東西に並ぶ土坑3・5に関しては、平面的には何れも〈5層〉で検出したが、土坑3本来の掘り込み面である〈4層〉上面では両者は切り合い関係を有していたものと考えられる。

土坑は南北・東西の列状をなして分布する。南北列は土坑1・2からなる。土坑2に関してはその位置が西側の土坑3よりも北側に寄るため、南北列のひとつを構成するものと考えられる。調査区東壁際において検出した土坑1・2の平面的な中心は、東壁内にあるものと考えられる。検出状況から、土坑1の中心の方が土坑2より

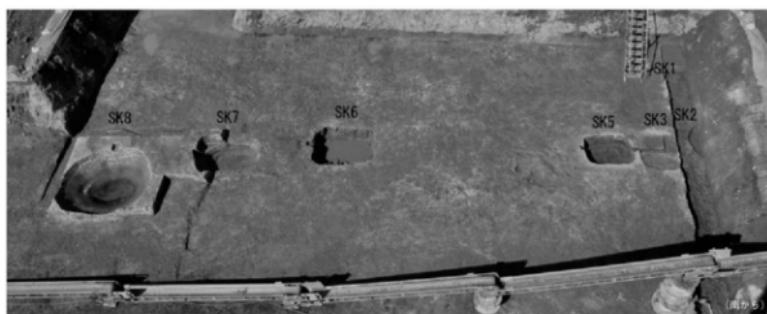


図35 土坑1～8全景

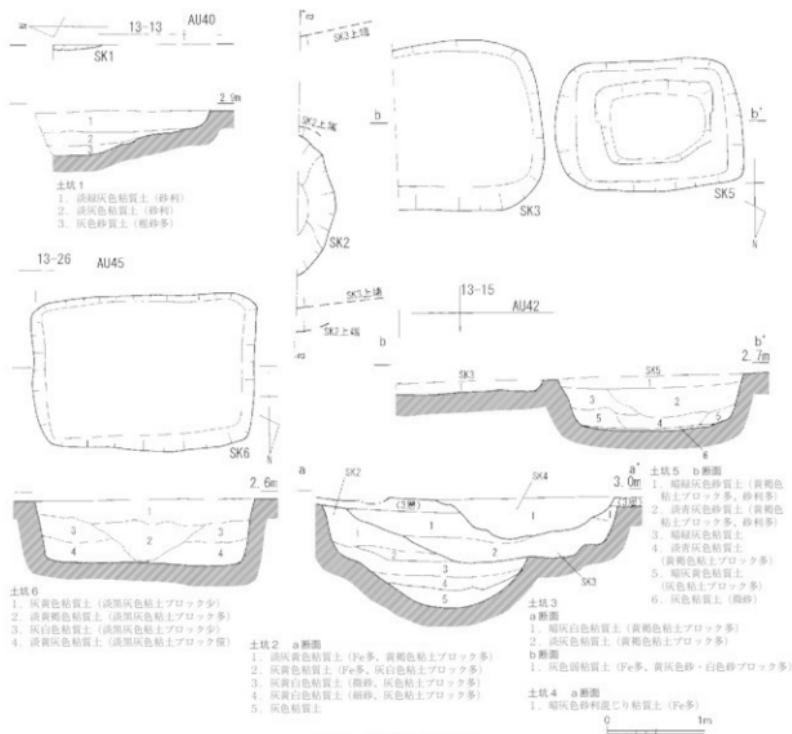
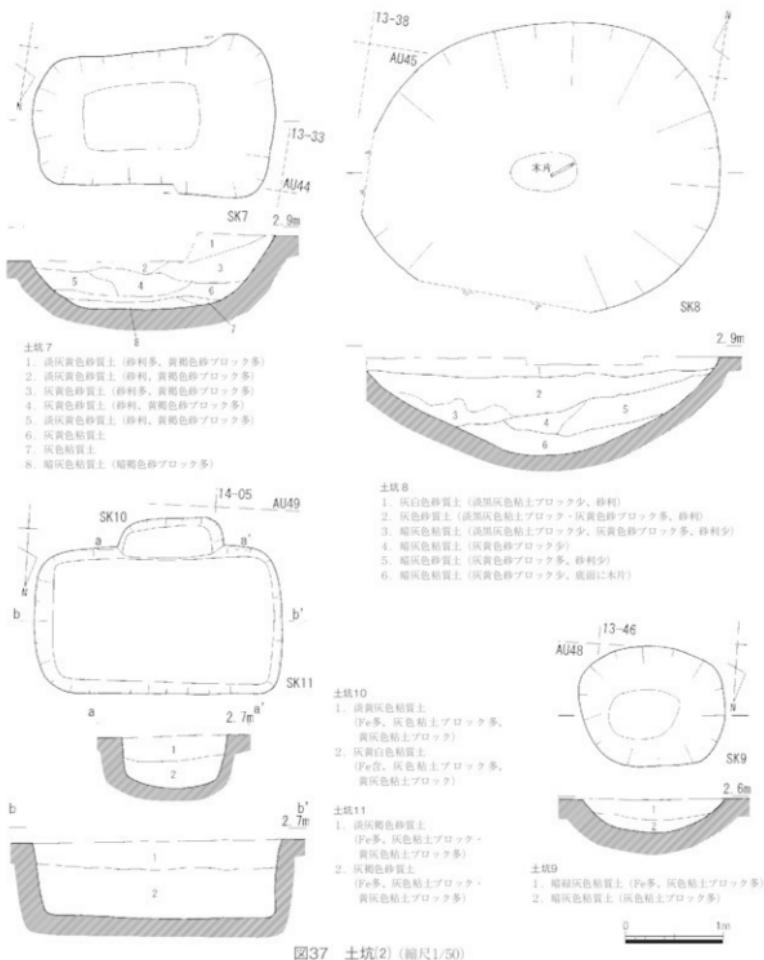


図36 土坑(1) (縮尺1/50)



も東壁寄りに位置する。したがって、南北列の方向はやや東に振った形になるものと推定される。土坑2上面の復元規模が2.5m、土坑1のそれが2.7m前後と推定すると、南北列は13-10ラインの西側に構築された土坑群と考えられる。北区ではこの南北列は検出されていない。その要因については、北区においてもともと構築されていないか、あるいは列の軸が東に振れたため調査区外に土坑が位置するためと考えられる。土坑2の南方にも南北列は認められないが、これに関しては列が存在していなかったものと考えられる。

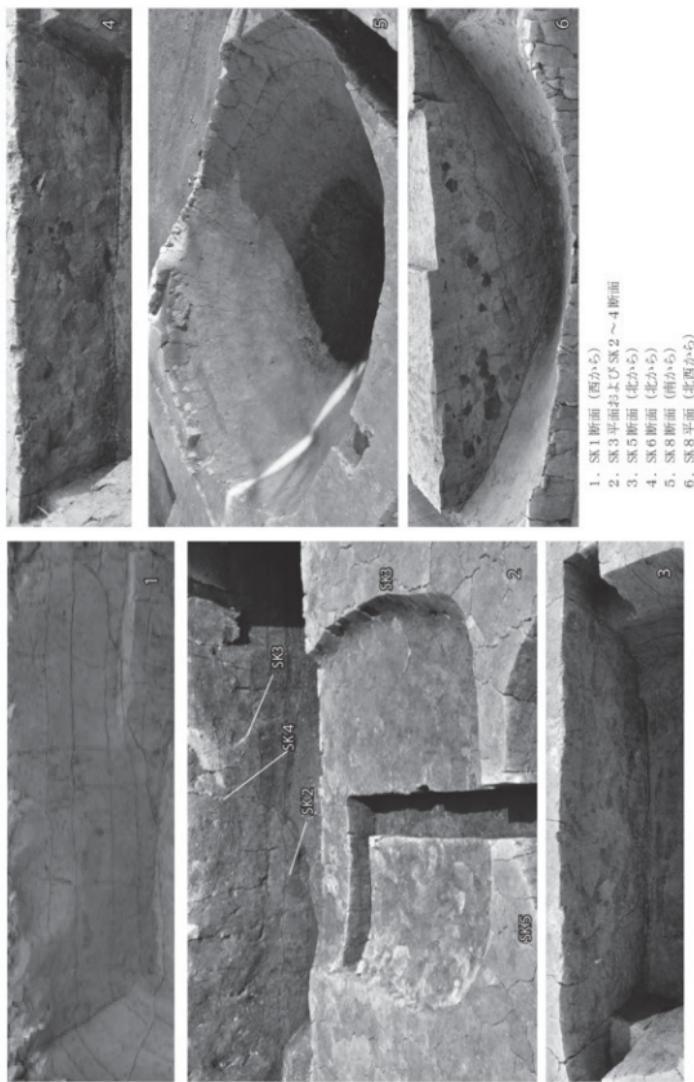


図38 土壠(3)

表8 土坑分類表

断面形	番号は土坑番号を示す			
	隅丸長方形	円形	多角形	不明
箱形	3・5・6・7・10・11	—	—	—
鑿鉢形	—	8・9	2	1・4

した土坑2を壊す形で構築されたものであり、東西・南北列の交点にあたるものと考えられる。列bは土坑7・8からなり、列aから南西方向に屈折する列である。列cは土坑9～11からなるほぼ東西方向を指向する列で、AU48ラインを中心軸とする。このように列bにおいて東西列が屈折する様相は、弥生時代早期～前期まで遡る旧地形、すなわち調査区南東隅が微高地状で、その周辺が低位部からなる土地と対応する。列a～bにおける列の屈折については、旧地形にみられた微高地状の土地周縁部に当たる。旧地形の影響は、土坑群が構築された〈4層〉や〈3層〉段階まで土地の高低差を伴って継続するものである。土坑の配列にも、こうした旧地形の影響が及んだものと推定される。なお、土坑の東西列に対応する東西溝や畦畔等の遺構は検出されていない。

こうした土坑の配列に関しては、中世～近代の条里<sup>11)</sup>との関連性が注意される。南北列については、13-05ラインに想定されている中世～近代の南北条里との関連性が考えられる。これは、現在の岡山大学津島キャンパスの中心を通る「南北道路」中央に位置するものである。一方で、東西列に関しては該当する条里は存在しない。

土坑の平面形・断面形については、表9のようにまとめることができる。平面形を隅丸長方形、円形、多角形、不明、断面形を箱形と鑿鉢形に区分した。結果、組み合わせとしては「隅丸長方形・箱形」「円形・鑿鉢形」「多角形・鑿鉢形」「不明・鑿鉢形」となる。このうち、「隅丸長方形・箱形」がもっと多く、6基からなるが、いざれも東西列に属する。東西列には他にも「円形・鑿鉢形」となる土坑7・8が認められる。南北列の土坑1・2については

一方、東西列は土坑3～11で構成されるが、その列は次の列a～cのように細分しうる。列aは土坑3～6までの東西方向の列であり、AU48ラインを中心軸とする。土坑3は、南北列と推定

いては断面形が鑿鉢形をなす。土坑2の平面形については、検出した標高2.1mのレベルにおいては、一辺0.4～0.5mの4つの辺が認められた。少なくとも土坑2下半に関しては、平面が8～10角形の掘り形を呈するものと推定される。土坑の規模は、検出面によって異なるが、〈4層〉で検出した土坑8は長さ3.72m、幅3.00mを測り、本土坑群中でもっとも大型となる。いずれの土坑からも、設置された桶等の容器はみつかっていない。

埋土については、全体としては灰黄色、緑灰色、灰色を主体とし、微砂・粗砂・砂利の他、各種の粘質・砂質ブロックを多く含む。特徴的な埋土として、「黒色土」である〈12層〉に由来する淡黒灰色粘土ブロックが土坑6・



番号	種類・器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	形態・手法・備	地土	色調
1	焼津槽・鍋	—	66	—	内外・乳白色施釉、1/4残	微砂	褐色
2	焼津槽・器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形態・手法・備	石材	色調
S1	石造物	59	72	39	尾根のコーナー部分、切妻形か。前面は2面加工。側面は3面加工。	乳黄	

図39 土坑出土遺物（縮尺1/4）

8において認められた。〈12層〉の深さまでの掘削を確認した土坑は、土坑2・6・8であり、土坑5に関しては、〈12層〉近くまで土坑の掘削が及んだ可能性がある。土坑6・8に関して〈12層〉のブロックが含まれることは、土坑掘削時の埋土と土坑を埋める際の埋土とが同じであった可能性を示唆する。

いずれの土坑からも、遺物がほとんど出土しておらず、土坑の時期を示すような遺物は少ない。土坑8からは唐津焼と考えられる碗が1点（図39-1）出土した。また、土坑6からは石造物の一部である可能性がある流紋岩製石製品1点（図39-S1）の他、近世瓦小片1点が出土した。土坑群の時期については、検出面と出土遺物から近世の範疇で捉えられる。

土坑群の機能については判然としない。断面形が擂鉢形を呈するものに関しては水溜の機能、「隅丸長方形・箱形」については墓としての機能も果たしうる形状である。

#### 註

- 1) 池田 晋2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡』19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25番 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.63-72

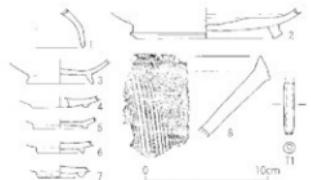
#### (3) 包含層出土遺物・遊離遺物（図40）

調査区全体でコンテナ（約28ℓ）1箱分の遺物が出土した。その多くは〈5層〉上面および〈4層〉から出土した土器小片である。

1は北区東側溝〈6層〉、2は土坑6埋土、3～8・T1は南区〈5層〉上面から出土した。1の須恵器杯蓋は7世紀前半（TK217型式）、2の須恵器高台付杯身は7世紀後半（TK48型式）に相当するものと考えられる<sup>1)</sup>。7世紀代の須恵器としては、他に北区〈5層〉において1と同型式と考えられる杯蓋片と杯身片が各1点出土している。また、2と同一となる可能性のある口縁部小片が土坑6から出土している。3～7は土師質高台付杯身の底部である。3が13世紀、4～7が14世紀初頭と考えられる。8の備前焼擂鉢は14世紀初頭に属するものと考えられる。

こうした包含層出土遺物および遊離遺物は、從来から言及されてきた津島岡大遺跡における諸活動と関連するものと考えられる。津島岡大遺跡においては、これまで6世紀末・7世紀初頭を中心とした道路状遺構が出現することや<sup>2)</sup>、中世後半における土地造成の実施<sup>3)</sup>が指摘されてきた。本調査地点の須恵器は、7世紀代における土地造成等の活動との関連の中で理解されるものと考えられる。また13～14世紀初頭の土器に関しては、〈5層〉の造成時期を示しているものと考えられる。

（光本 順）



#### 註

- 1) 田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店
- 2) 光本 順2005「古墳時代後期から中世における道構群の変遷」『津島岡大遺跡』15 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.79-86
- 3) 山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡大遺跡』11 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

参考	種類・形態	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	形態・手法・地	鉄土・色調
1	須恵器・杯蓋	-	-	-	内外・鋸歯ナデ	細砂 灰
2	須恵器・高台付杯身	-	12.5	-	内外・杯部・鋸歯ナデ・外(底面)・鋸歯ヘラケズリ後ヨコナデ。1/4強	細砂 淡灰白
3	土師質土器・碗	-	5.5	-	内外・壺底、刷り付け高台。1/2残	細砂 淡灰白
4	土師質土器・碗	-	4.5	-	内外・壺底、刷り付け高台。黒斑。1/2残	細砂 乳灰
5	土師質土器・碗	-	4.4	-	内外・壺底、刷り付け高台。高台1/1残	細砂 乳黄灰
6	土師質土器・碗	-	3.9	-	内外・壺底、外・ナデ、刷り付け高台。高台1/1残	細砂 乳程灰
7	土師質土器・碗	-	3.6	-	内外・壺底、外・ナデ、刷り付け高台。高台1/1残	細砂 乳程灰
8	備前焼・擂鉢	-	-	-	内・ヨコナデ施。刷目。外・ヨコナデ	細砂 淡灰白
参考	種類・形態	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形態・手法・地	鉄土・色調
1	土球	(4.4)	0.9	0.9	圓筒不規則	細砂

図40 包含層出土遺物および遊離遺物（縮尺1/4）

### 第3節 自然科学的分析

津島岡大遺跡第34次調査地点では、縄文時代～近代までの包含層を対象に、植物珪酸体分析・花粉分析を実施した。土壤サンプル採取地点は南区南壁である（図41）。土壤サンプルの採取は、2010年9月28日に㈱古環境研究所・杉山真二氏が行い、同研究所により分析がなされた。

以下では、植物珪酸体分析・花粉分析結果を収載する。

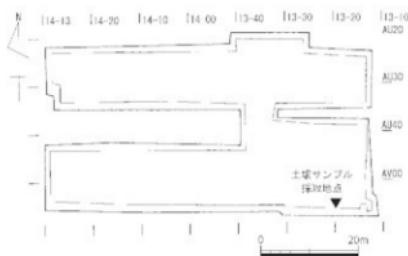


図41 土壤サンプル採取地点（縮尺1/1,000）

#### 1. 植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

##### a. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

##### b. 試料

分析試料は、南区南壁の2層～12層から採取された計16点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。このうち、〈2層〉と〈3層〉は近代、〈4層〉は近世、〈5層〉は中世、〈6層〉は飛鳥時代、〈8層〉は弥生時代後期、〈10層〉は弥生時代前～中期、〈11層〉は弥生時代前期、〈12層〉は弥生時代早期～前期、〈13層〉は縄文時代とされている。

##### c. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピースを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機能細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試

表9 津島岡大遺跡第34次調査における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	施点・試料	南区南壁																検出密度 (単位: ×100個/g)
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	
イネ科	Oryzaceae																		
イネ	<i>Oryza sativa</i>		164	28	43	43	36	34	55	49	33	7	14	19	7	7	7	7	
ムギ類 (穀の表皮細胞)	<i>Hordium</i> <i>Triticum</i> (husk Phytolith)		7																
コシ属	<i>Phegopteris</i>						7			7		7	7	7	7	7	7	7	
シノ属	<i>Zeyervilax</i>		43				7												
キビ属型	Panicoid type											7	7	7	13	7	7	7	
ススキ属型	Micranthoid type		7	6		14								14	6				
ウンクサ属A	<i>Aneurogramme</i> A type		21	6	7	7	7	7	28	13	7	14	13	21	7	7	7	13	
タケモ科	Bambusoideae																		
メダガ属型	<i>Pleiospatha</i> sect. Nipponocalamus		14	6	7	7	7	7		7	14	21	19	14	42	42	33		
ネガサ属型	<i>Pleiospatha</i> sect. Nezara		128	21	61	57	36	74	7	7	53	51	82	63	221	146	133	125	
チヤキザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		7	7	31	7				7	7	14	7		7	4	7	20	
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		29	63	61	36	21	34	14	35	33	22	21	26	49	84	96		
未分類等	Others		107	91	117	108	36	141	42	105	112	166	240	157	214	195	244	145	
その他のイネ科	Others																		
表皮毛起源	Husk hair origin		57	7	25	22		34			13	7	14	13	14	7			13
棒状胚体	Rodshaped		71	21	49	50	21	34	21	56	26	58	41	76	103	49	42	26	
扁平胚等	Others		121	42	43	86	36	27	69	28	39	51	69	113	131	70	63	53	
樹木起源	Arborescent																		
その他の	Others		7	6					21	14	7	7	7	6	7	14	7	7	
(海綿骨片)	Sponge spicules			7	21	14	43	34	28	20	7								
植物珪酸体組成	Total		785	284	455	437	214	389	249	328	355	412	555	585	827	612	642	488	
おもな分類群の確定生産量 (単位: kg/m²cm²): 試料の復比重を1.0と仮定して算出																			
イネ	<i>Oryza sativa</i>		4.83	0.83	1.26	1.26	1.05	0.99	1.63	1.44	0.69	0.21	0.40	0.56	0.20	0.20			
ヨシ属	<i>Polygonum</i>						0.45		0.44		0.42		0.43	0.79	0.43	0.44	0.44	0.42	
ヨシ属	<i>Miscanthus</i> type		0.09					0.18					0.17	0.08					
ススキ属型	<i>Pleiospatha</i> sect. Nipponocalamus		0.17																
メダガ属型	<i>Pleiospatha</i> sect. Nezara		0.62	0.10	0.29	0.17	0.35	0.03	0.03	0.25	0.24	0.40	0.30	1.06	0.60	0.60	0.60	0.60	
ネガサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		0.05	0.05	0.23	0.05				0.05	0.05	0.11	0.05		0.05	0.10	0.05	0.15	
チヤキザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		0.09	0.19	0.18	0.11	0.06	0.10	0.04	0.10	0.10	0.06	0.06	0.23	0.23	0.15	0.25	0.14	
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>																		
タケモ科の比率 (%)																			
メダガ属型	<i>Pleiospatha</i> sect. Nipponocalamus		18	9	16	36	15	52		16	29	32	29	11	34	34	30		
ネガサ属型	<i>Pleiospatha</i> sect. Nezara		67	29	38	53	54	66	21	18	53	42	53	40	71	49	45	47	
チヤキザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		6	15	30	10				27	10	19	7	3	7	4	12		
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		9	55	24	21	20	19	27	55	21	11	8	30	15	10	18	11	
メダガ率	Medaka ratio		85	29	47	69	80	81	73	18	69	20	85	70	81	83	79	77	



図42 津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における植物珪酸体分析結果

料1 gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### d. 分析結果

表9および図42に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕 イネ、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科-タケ亜科〕 メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科-その他〕 表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕 その他

#### e. 考察

##### (1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オバール）が試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

南区南壁では、〈2層〉（試料1）から〈13層〉（試料16）までの層準から採取された計16点について分析を行った。その結果、〈2層〉（試料1）から〈12層〉（試料13、14）までの各層からイネが検出された。このうち、〈2層〉（試料1）では密度が16,400個/gとかなり高い値であり、〈6層〉（試料7）でも5,500個/gと高い値である。また、〈3層〉（試料2）、〈4層〉（試料3、4）、〈5層〉（試料5、6）、〈8層〉（試料9）でもおよそ3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これららの層準では稲作が行われていた可能

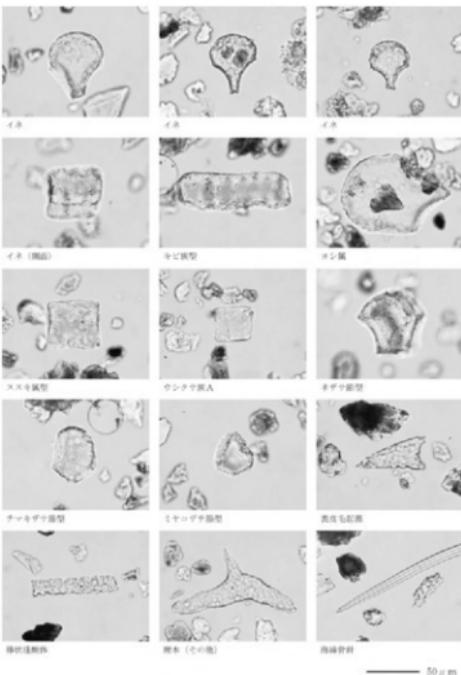


図43 津島岡大遺跡第34次調査の植物珪酸体（プラント・オバール）

性が高いと考えられる。

〈10層〉(試料10,11)、〈11層〉(試料12)、〈12層〉(試料13,14)では、密度が700~1,900個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

### (2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものは、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類(穂の表皮細胞)は、〈2層〉(試料1)から検出された。密度は700個/gと低い値であるが、穂(初穂)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

### (3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位の〈13層〉ではネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木(その他)なども認められた。〈12層〉ではネザサ節型がやや増加し、イネ、キビ族型が出現している。〈11層〉から〈10層〉にかけてはネザサ節型が減少し、スキ属型が出現している。〈7層〉から〈6層〉にかけては、イネが増加し、イネ科の各分類群は減少している。〈5層〉から〈3層〉にかけても、おおむね同様の結果であるが、ヨシ属、キビ族型などのイネ科や樹木(その他)はほとんど見られなくなっている。〈2層〉ではイネが大幅に増加し、シバ属が出現している。おもな分類群の推定生産量によると、〈12層〉から〈11層〉にかけてはネザサ節型が優勢であり、〈7層〉より上位ではイネが優勢となっている。

以上の結果から、〈13層〉(縄文時代)から〈12層〉(弥生時代早期～前期)にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類を主体としてキビ族やウシクサ族なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺にはヨシ属が生育するような湿潤なところも分布していたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと考えられる。〈12層〉上部では少量ながらイネが検出されることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

〈11層〉(弥生時代前期)から〈10層〉(弥生時代前～中期)にかけては、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ、何らかの原因でメダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類は減少したと推定される。

〈8層〉(弥生時代後期)から〈6層〉(飛鳥時代)にかけては、稲作が本格化したと考えられ、竹笹類などのイネ科植物はあまり見られなくなったと推定される。〈5層〉(中世)から〈2層〉(近代)にかけては、継続的に稲作が行われていたと考えられ、〈2層〉の時期にはムギ類の栽培も行われていたと推定される。

### f.まとめ

植物珪酸体分析の結果、〈2層〉(近代)から〈8層〉(弥生時代後期)にかけては、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、〈10層〉(弥生時代前～中期)から〈12層〉(弥生時代早期～前期)にかけても、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、〈2層〉ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

〈13層〉(縄文時代)から〈12層〉(弥生時代早期～前期)にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類を主体としてキビ族やウシクサ族なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺にはヨシ属が生育するような湿潤なところも分布していたと推定される。その後、〈7層〉より上位では、稲作の本格化に伴って竹笹類などのイネ科植物はあまり見られなくなったと考えられる。

## 文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞壁酸体の形態によるタケアキ科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－、考古学と自然科学、19, p.69-84.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17, p.73-85.

## 2. 花粉分析

株式会社 古環境研究所

## a. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査

表10 津島岡大遺跡第34次調査における花粉分析結果

花粉	花粉形	遺跡地質														
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
Aster	アスター属															
Tulip	ツリップ属															
Ficus callosa, Diphysa	フジカキ属 ダヒヤ属	96	2			1	15	15	6	9	8			4	7	
Cryptanthoxylon japonicum	クレタントクスヨウ属	3		1	24	32	18	24	16	16	16					
Tetrapteron-Cephalariae-Caprifloraceae	テトラペロン属 セファラニア属 カプリフラワー属	1	1		5	19	18	18	18	18	18					1
Sals	サルスベリ属															3
Juglans	クルミ属															
Prunus rhoifolia	ルイボウ属															
Phytolacca strigulosa	フィトロカルカ属															
Abutilon	アブチロン属															
Borago	ボラゴ属															
Corydalis	コリダリスト属															
Carpinus Ostrya japonica	カーピン属-オストリヤ属															
Carpinus orient	カーピン属	1	2													
Castanea	カエデ属															
Fagus	カバノキ属															
Quercus rubra, Lepidobalanus	クヌク属-ナガシマクス属	2		1												
Quercus rubra, Cyclobalanopsis	クヌク属-アクシラクス属	3		3	27	67	55	52	24	22	8	4	6	12	4	4
Ulmus Zelkova serrata	ユリノキ属-ヤクモ	1			37	89	20	24	20	4	4	2	14	2	10	1
Alnus	アズキナシ属															
Aesculus turbinata	アセキス属															
Sophora	ソテツ属															
Vitis	ブドウ属															
Anemone Arctopetalum	アネモネ属															
Ochnoia	オクノイア属															
Moraceae-Ulmaceae	モクセイ科-ユリノキ科	1	1	17	4	8	8	4	5	5	1	1	10	1	1	
Loranthaceae	ラランタ科															
Santalaceae-Ulmaceae	サンタル科-ユリノキ科															
Nanophytal pollen	ナノフィタラ花粉															
Gramineae	イネ科	303	4	5	144*	118	91	107	122	12	19	30	104	8	11	31
Oryza type	イネ型	71	1		8	14	29	29	29	29	9	2	1	1	1	6
Cyperaceae	サイカツ科	2			12	20	15	15	15	15	9	2	1	1	1	2
Artemesia leibnii	アーテミシア属															
Monachilia	モノカヒラ属															
Polygonum	ポリゴン属															
Polygonum sect. Persicaria	ペルシカリアセクション	1														
Rhus	ラグジュアリ属															
Equisetum	エキセート属															
Osmunda-Coptosporangium-Amaranthaceae	オスマンダ属-コプトスボランジウム属-アマランサス科															
Caryophyllaceae	カリオフィラ科	1														
Ranunculaceae	ランンクル科	303*	7		1	1		1								2
Cordyline	コドリイネ属															
Cordyline japonica	コドリイネ属															
Horsetail	ホースエイ tail	1														
Psathyrocephalus	オオバコ属															
Valerianaceae	バーベナ科															
Loranthaceae	ラランタ科	2														
Asteraceae	アザミ科	1														
Artemisia	アーテミシア属	4	1	3	3	37	22	36	2	2	4	10	32	3	37	13
Artemisia minima	アーテミシアミニマ															
fern spore	シダ花粉	1	2		3	2	9	4	3	22	1	30	12	3	4	4
Monolete type spore	モノレット花粉	1														
Trilete type spore	トリレット花粉	22	5	2	2	303	261	206	253	233	15	45	81	3	14	25
Artemesia-Nanophytal pollen	アーテミシア-ナノフィタラ花粉	1	0	1	1	17	4	11	8	2	2	3	10	1	1	
Nanophytal pollen	ナノフィタラ花粉	452	22	5	4	436	193	191	178	243	41	142	36	39	50	23
Pollen frequency of 1cm <sup>2</sup>	試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	0.3	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
Unknown pollen	不明花粉	$\times 10^3$														
Fern spore	シダ花粉	1	2		5	11	14	3	2	22	2	24	20	4	8	1
Reinhardt eggs	リーンハルト卵															
Total	計															
Reinhardt eggs frequencies of 1cm <sup>2</sup>	試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	1.8														
Diatom remains	シダ花粉	0.0														
Charcoal fragments	木炭化物	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)

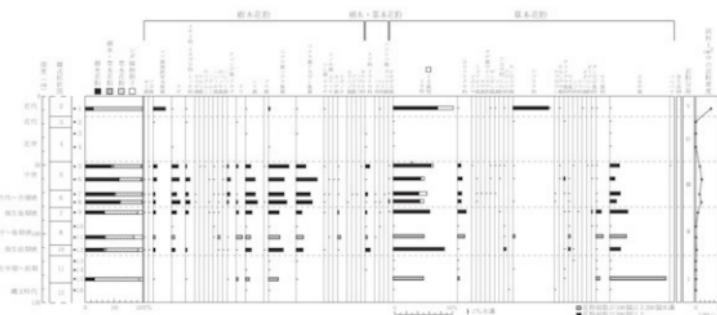


図44 津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における花粉ダイアグラム

においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥な環境下の堆積物では分解され残存していない場合もある。

### b. 試料

分析試料は、南区南壁の〈2層〉～〈13層〉から採取された計16点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

### c. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から  $1\text{cm}^3$  を秤量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で繽などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す

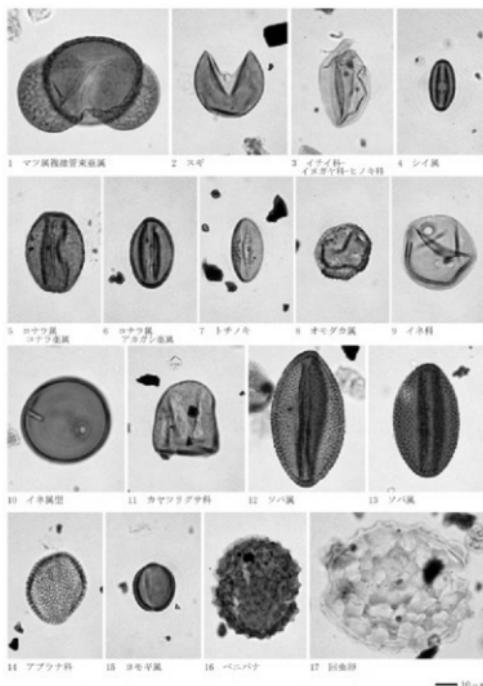


図45 津島岡大遺跡第34次調査の花粉・寄生虫卵

6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理

7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

#### 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

### d. 結果

#### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉26、シダ植物胞子2形態の計58である。また、寄生虫卵1分類群が検出された。分析結果を表4に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉总数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕 モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ノブドウ、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕 クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕 オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ヤブガラシ、キカシグサ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕 単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕 回虫卵

#### (2) 花粉群集の特徴

花粉組成の変化から下位よりI帯～V帯の5帯の花粉分帶を設定した。以下に各分帶ごとに特徴を記載する。

1) I帯:〈13層〉～〈12層〉(試料16)では、花粉がほとんど検出されなかった。〈12層〉下部(試料15)では花粉密度が低く、草本花粉が約85%を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科が優勢で、カヤツリグサ科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、シイ属などが認められた。〈12層〉上部(試料13, 14)でも、おおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。なお、試料14ではイネ属型が認められた。

2) II帯:〈11層〉～〈8層〉 花粉密度がやや高くなり、樹木花粉が約30%を占めるようになる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優勢で、カヤツリグサ科、キク亜科などが伴われる。また、〈11層〉(試料12)と〈8層〉(試料9)ではイネ属型が認められた。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が優勢で、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などが伴われる。

3) III帯:〈6層〉～〈5層〉 花粉密度が比較的高くなり、樹木花粉の占める割合が50%前後に増加している。草本花粉では、イネ属型が増加し、オモダカ属、ソバ属などが出現している。また、〈5層〉(試料5)ではベニバナが認められた。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギがやや増加している。

4) IV帯:〈4層〉～〈3層〉 イネ科、ヨモギ属、クワ科-イラクサ科などが検出されたが、いずれも少量である。

5) V帯: (2層) 花粉密度が高く、草本花粉が約85%を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)、アブラナ科(集塊あり)が優勢であり、ソバ属なども認められた。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属が優勢で、コナラ属コナラ亜属なども認められた。また、寄生虫卵の回虫卵が少量検出された。

#### e. 花粉分析から推定される植生と環境

(13層)(縄文時代)では、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

(12層)下部(弥生時代早期～前期)の堆積当時は、ヨモギ属やイネ科などの草本類が生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺地域にはナラ類(コナラ属コナラ亜属)やシイ属などの樹木が分布していたと推定される。(12層)上部では、花粉があまり検出されないが、(12層)下部とおおむね同様の状況であったと考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。なお、イネ属型の花粉が部分的に少量認められることから、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。これは、植物珪酸体分析で同層準からイネが出現していることと符合している。

(11層)(弥生時代前期)から(8層)(弥生時代後期)にかけては、カヤツリグサ科がやや増加していることから、堆積環境の湿润化が示唆される。また、イネ属型の花粉が部分的に少量認められることから、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。当時は周辺地域にナラ類、カシ類(コナラ属アカガシ亜属)、シイ属、クリ、スギ、マツ属(アカマツ・クロマツ)など多様性のある森林植生が分布していたと推定される。

(6層)(飛鳥時代)には稲作が本格化したと考えられ、(5層)(中世)にかけても継続的に稲作が行われていたと推定される。また、当時はソバやベニバナ(染色や薬用に利用)などを栽培する畑作も行われていたと考えられる。周辺地域の森林植生は、大きく変遷することはなかったと考えられる。(4層)(近世)から(3層)(近代)にかけては、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

(2層)(近代)では、集約的な稲作が行われおり、近隣ではアブラナ科やソバなどを栽培する畑作も行われていたと考えられる。アブラナ科には、アブラナ(ナタネ)、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。同層では寄生虫卵の回虫卵が検出されることから、人糞施肥の影響も示唆されるが、低密度であることから集落周辺などの人為環境における通常の生活汚染による可能性が考えられる。当時は周辺地域にマツ林(アカマツ・クロマツ)が二次林または里山として成立していたと推定される。

#### 文献

- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262.
- 島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p.
- 中村純(1967)花粉分析。古今書院。p.82-110.
- 中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究。13. p.187-193.
- 中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30.
- 中村純(1980)日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p.

## 第4節 結語

津島岡大遺跡第34次調査地点では、〈5層〉(中世層)上面までの平面調査と、調査区壁面における断面調査を実施した。結果、地形復元のためのデータの他、弥生時代の畦畔・溝、鎌倉時代の勧溝、近世の土坑群といった遺構を確認した。また、自然科学的分析として縄文時代～近代までの地層に関する植物珪酸体分析・花粉分析を実施し、環境復元のためのデータを得た。

### ①地形復元

調査区北壁・東壁・南壁の断面調査において、弥生時代早～前期の「黒色土」層まで掘り下げを行い(南壁の一部では縄文時代後期層まで)、近代までの地形の様相が判明した。弥生時代の地形としては、図書館(第12次調査)地点から連なる微高地状の緩斜面が調査区南東部にみられ、その周辺が低位部となる様相が明らかとなった。こうした地形による土地の高低差は、明治時代の旧陸軍による造成以前の段階まで維持した。断面調査で明らかとなつた弥生時代前期畦畔の分布や、近世土坑群の東西列の配置状況といった遺構の様相も、こうした地形復元データと整合的である。

### ②環境復元

本調査地点で実施した縄文時代後期～近代までの植物珪酸体分析・花粉分析の成果は、津島岡大遺跡における既往の分析データ<sup>1)</sup>と符号するものと考えられる。植物珪酸体分析の成果からは、〈12層〉(「黒色土」層)からイネのプラントオパールが出現するという、従来と同様のデータが得られた。花粉分析の成果によると、〈12層〉下部は、ヨモギ属やイネ科などの草本類が生育する比較的乾燥した環境であり、周辺にはナラ類(コナラ属コナラ亜属)やシイ属などの樹木が分布していたことが推定されている。また、〈12層〉上部では花粉量が少なく、その要因として「乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解された」(89頁)可能性が指摘されている。こうした花粉分析結果に関しても、既往の成果と同様であるが、「黒色土」の成立要因や性格については、より学際的方法から今後明らかにしていく必要がある。

### ③弥生時代の遺構

調査区南東部の微高地状緩斜面において、〈12層〉上面に構築された畦畔を確認した。また〈11層〉上面で微高地状緩斜面から低位部方向にのびる6条の溝を確認した。畦畔については、時期を示す遺物は認められなかつたが、図書館地点でみつかった弥生時代前期畦畔と一連のものと考えられる。すなわち本調査地点では、弥生時代前期畦畔の北縁部分がみつかったものと考えられる。図書館地点では「黒色土」上層にも前期畦畔が検出されているが、本調査地点における断面調査ではそれに該当する確實なものは確認されなかつた。溝群は、「黒色土」上面の畦畔より後に構築されたものである。この点において図書館地点の上層の畦畔との関連が注目されるが、それとの先後関係については不明である。しかしながら微高地帯から低位部方向へと底面が傾斜する溝の存在は、弥生時代前期段階の排水路の存在を窺わせるものとして注目しうる。

### ④近世の遺構

南北区において、南北および東西に列をなす土坑11基を検出した。南北列に関しては、調査区の外部に推定される中世～近世の南北条里との関連性が窺われた。また、東西列については条里との関連性は薄いものであったが、旧地形に由來する土地の起伏に沿って列の並びが屈折する様相が明らかとなつた。

(光本)

#### 註

1) 山本悦世2006「構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』pp.7-17

山本悦世2008「津島岡大遺跡における植物珪酸体分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』pp.20-23

## 報告書抄録

ふりがな	おかやまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさけんきゅうせんたーきよう2010							
書名	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010							
掲載箇所	第II部第1章 津島岡大遺跡第34次調査-国際交流会館新宮に伴う発掘調査-							
編著者名	光本 順(編著)、㈱古環境研究所							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号							
発行年月日	2012(平成24)年3月16日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
津島岡大遺跡	岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号	33201		34度 41分26秒	133度 55分09秒	20100730 ~0928	1590m <sup>2</sup>	国際交流会館新宮
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
津島岡大遺跡 第 34 次 調査地點	田畑	弥生時代前期		駐畔、溝				
	田畑	飛鳥時代				須恵器		
	田畑	鎌倉時代		耕作痕		土師器		
	田畑	近世		土坑		陶磁器、石製品		



## 第2章 鹿田遺跡第21次調査 —外来診療棟周辺他環境整備に伴う発掘調査—

### 第1節 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯
2. 調査体制
3. 調査の経過

### 第2節 調査の記録

1. 調査地点の位置
2. 第21次調査A・B地点
  - (1) 層序と地形
  - (2) 遺構と遺物
3. 第21次調査D地点
  - (1) 層序と地形
  - (2) 包含層出土遺物

### 第3節 自然科学的分析

1. 鹿田遺跡第21次調査で出土した木製品の樹種

### 第4節 結語

## 例　　言

1. 本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、外來診療棟周辺環境整備に伴って実施した鹿田道路第21次調柾の発掘調柾報告である。  
同調柾地点は、岡山県岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。  
鹿田道路第21次調柾地点は、鹿田地区構内埋柾においてA地点：AD～AF30・31区、B地点：AG・AH30・31区、C地点：AP・AQ26・27区、D地点：AS・AT25～28区に位置する。発掘調柾期間は2010年11月18日～12月9日、調柾面積は120.1m<sup>2</sup>（A地点：21.2m<sup>2</sup>、B地点：22.0m<sup>2</sup>、C地点：17.5m<sup>2</sup>、D地点：59.4m<sup>2</sup>）を対象とした。
2. 発掘調柾は岡山大学埋蔵文化財調柾研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
3. 本報告作成にあたっては、木村の樹種同定を能城修一氏（森林総合研究所）に依頼し玉様を頂いた。また石器石材の同定において鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科）、近世陶磁器に関して栗岡実氏（岡山市教育委員会）、鎌倉時代の稚子庄痕について小西猛朗氏（元九州大学教授）にご教示頂いた。記して感謝申し上げる。
4. 調柾時の遺構実測・写真撮影は光本順が行った。
5. 報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。  
<遺物>土器：石器の整理・実測・浄浮・観察表：山本悦世・光本・西本尚美  
　　木器の整理・実測・浄浮・観察表：山本・光本・西本  
　　遺物写真：南健太郎  
<遺構>浄浮：西本  
6. 本報告の執筆分担は次回に示した。  
7. 編集は、新納（研センター長・山本悦世（調柾研究室長）の指導のもとに、光本が担当した。  
8. 本報告を持つて正式なものとする。  
9. 本報告に掲載した調柾の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

## 凡　　例

1. 本報告で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標第V座標系（世界測地系）の座標北である。  
方位に関しては、本報告では調柾時に使用した座標を用いる。
2. 遺物番号は、遺構別に番号を付すが、土製品にはT、石器にはSをつけて通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめ、実測図と組み合わせて掲載している。  
観察表の表記基準は以下の通りである。
  - ① 内外面の色調を併記する場合は、「内面/外面」の順序で表示する。
  - ② 肋土は、微鉢：縫径0.5mm未溝、細鉢：縫径0.5～1mm未溝、粗鉢：縫径1～2mm未溝、細縫径2mm以上を基準とする。
  - ③ 法量の単位は「cm<sup>3</sup>」である。複元値には「付」の数字で表し、残存値には「（ ）」を付した。
4. 遺構は、構造などで以下のように記号で種類を表記する場合がある。  
土坑：SK、溝：SD  
5. 土層記述では鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
6. 基本土層の本文表記は「（ ）」を使用した。

## 第1節 調査の経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

2010年度に岡山大学病院の正面玄関を中心とした環境整備の実施計画が立てられた。環境整備の対象は、外来診療棟の玄関付近や歩行者通路、ロータリーである。そのうち、病院正門付近（鹿田キャンパス敷地北辺）の歩行者通路に設置される雨よけの庇部分、および外来診療棟玄関付近において、上屋構造物の基礎を設置するための掘削が一定面積でなされることとなった。すなわち病院正門付近では2箇所の掘削が予定され、その合計面積は43.2m<sup>2</sup> (21.2m<sup>2</sup>・22.0m<sup>2</sup>) である。また外来診療棟玄関付近においても2箇所の掘削が予定され、その合計は76.9m<sup>2</sup> (17.5m<sup>2</sup>・59.4m<sup>2</sup>) である。

これら合計4箇所の工事掘削については、包含層および遺構・遺物に影響を及ぼす可能性が存在するものと判断された。そのため、発掘調査を実施することとし、調査員1名が調査にあたることとなった。

### 2. 調査体制

#### 【発掘調査:鹿田遺跡第21次調査】(発掘調査年度:2010年度)

調査主体 岡山大学（学長 千葉喬三）

調査担当 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（センター長 北尾善信）

調査員 光本 順（助教、調査主任）

運営委員会

センター長	北尾 善信	環境管理センター長	沖 陽子
副センター長	新納 泉		(調査研究専門委員)
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悅世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二		(調査研究室長)
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫	事務局施設企画部長	山下 隆幸

#### 【報告書刊行】(報告書刊行年度:2011年度)

運営委員会

センター長	北尾 善信	環境管理センター長	沖 陽子
副センター長	新納 泉		(調査研究専門委員)
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悅世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二		(調査研究室長)
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫	事務局施設企画部長	秋山 明寛

### 3. 調査の経過 (図46・47)

調査地点名については、以下、北から南へ順に、病院正門付近をA・B地点、外来診療棟玄関付近をC・D地点と呼称する。調査経過については地点ごとに概述する。なお、近接する位置関係にあり、堆積する包含層が類似するA・B地点については、ひとつにまとめて報告する。

**A・B地点** A・B地点の表土掘削は、2010年11月15～17日にかけて実施した。表土掘削の過程で、A地点では調査区東辺に現代の擾乱が認められた他、南西隅において素焼土管を使用した近現代の井戸が確認された。A・

B地点の発掘調査は11月18日に開始し、12月9日に調査を終了した。A・B地点では、層序に共通性がみられたため、包含層の掘り下げをほぼ同時に進めていった。

B地点における〈7層〉(中世層)上面精査の際に、ピット状の窪みが南北に連なる形で存在することが判明した。B地点の調査区北壁・南壁断面を精査した結果、〈6層〉から掘り込まれた溝状遺構の存在を認識し、ピット状の窪みもそれに伴うものと観察された。さらにこの溝状遺構がA地点の西半にも存在することが明らかとなった。こうした両地点にまたがる中世の溝状遺構の全景写真を11月30日に撮影した。

その後、A・B地点において〈8層〉以下の調査を実施した。その結果、東西方向にのびる平安時代の河道を両地点で確認した。河道の調査では、湧水層近くまで掘り下げを行う過程で、平安時代の土器に加え、弥生時代後期土器片も出土した。そのため、下層に弥生時代の河道が存在することが推定された。しかしながら、湧水のため弥生時代河道の調査は困難であったことから、12月9日にA・B地点の調査を終了した。

C地点 C地点の表土掘削は、11月15日に実施した。その結果、工事掘削に必要となる地表から約80cmの深さで、調査区全面にコンクリート基礎が広がることが判明した。工事に必要な掘削深度がコンクリート上面まで収まるため、C地点に関しては11月15日の表土掘削のみで調査を終了した。

D地点 D地点の包含層については、外來診療棟建物と隣接することから、その建物基礎によって損なわれている可能性を調査前に想定していた。そのため、11月15日に重機による表土掘削を開始した調査区東端部分において、まず包含層の残存状況を確認することとした。その結果、地表面から1.6mの深さまで掘削したものの、その範囲において包含層は確認されず、かつての建物工事の際の埋土が認められた。また工事に必要な掘削深度が造成土・既設埋土内に収まる可能性が高い一方で、調査区南半では工事に支障となる雨水・汚水配管が東西に横断する形で存在することが判明した。

調査区東端以外においても包含層の残存状況を確認するべく、以下の方針で調査を継続することとした。すなわち調査区全体の表土を工事掘削深度まで掘削し、配管を調査区外に移設した後に、改めて包含層の確認作業を実施することとした。

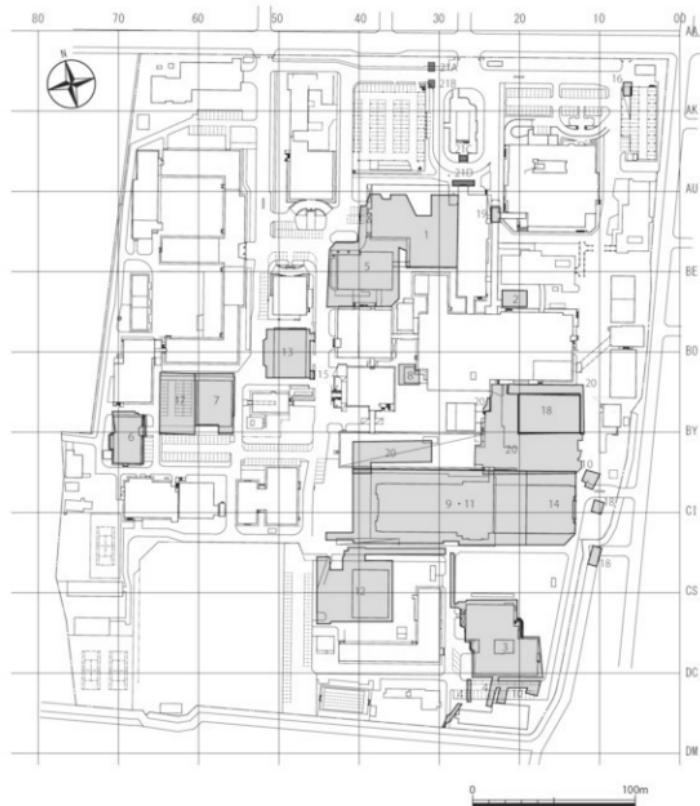
配管移設後の11月25日に、重機による調査区中央付近の試し掘りを実施した。その結果、工事掘削深度よりも深い標高において部分的に包含層が残存するものの、擾乱もまた深くまで及ぶ状況、すなわち、包含層の残存状況は悪いものの、建物基礎によって完全に失われてはいないことが判明した。工事掘削深度内には包含層が存在しないものの、当該地点の包含層の残存状況、ならびに建物基礎による遺跡の破壊状況の把握を目的として、部分的な発掘調査を実施することとした。手順としては、まず調査区北側2/3の範囲において部分的な発掘調査を実施し、その結果を踏まえ、南側1/3の発掘の是非を検討することとした。

11月29日に、調査区北側の擾乱を重機によって除去した後に発掘調査を開始した。発



1. 21 A・B地点調査開始写真（南東から） 2. 21 C・D地点調査終了写真（東から）

図46 調査状況



- |                     |                     |                              |
|---------------------|---------------------|------------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟       | 8 第8次調査：R I 治療室     | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外構】        |
| 2 第2次調査：NMR-C T室    | 9 第9次調査：病棟          | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター        |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 10 第10次調査：共同講演連     | 17 第17次調査：基礎研究棟              |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 11 第11次調査：病棟        | 18 第18次調査：中央診療棟              |
| 5 第5次調査：管理棟         | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 19 第19次調査：渡り廊下               |
| 6 第6次調査：アイソトープセンター  | 13 第13次調査：総合教育研究棟   | 20 第20次調査：中央診療棟間連            |
| 7 第7次調査：基礎研究棟       | 14 第14次調査：病棟        | <b>21 第21次調査：外来診療棟周辺環境整備</b> |
- ※建物名称は調査次の呼称による。

図47 発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

掘調査では、包含層の堆積状況を確認するため、調査区西側および東側にサブトレンチを設定した。サブトレンチを振り下げる過程において、西サブトレンチでは完形に近い弥生時代後期の台付鉢が1点、東サブトレンチでは同時期と考えられる壺破片が、ともに低湿地層とみられる土層中から発見された。他の土器が周囲に存在するか否かを検討するためにサブトレンチを拡張したが、弥生土器が密集する状況は認められないことを確認した。これらサブトレンチにおける土層の検討から、本調査区は南側に広がる弥生時代以降の微高地に隣接する低位部にあたるという知見が得られた。サブトレンチ以外の箇所についても精査を実施したが、弥生時代後期土器の出土はみられたものの、遺構は確認されなかった。

このように、調査区北側2/3の範囲内において調査を実施した結果、D地点については遺構が希薄であり、包含層の堆積状況、擾乱の状況、および旧地形に関するデータが得られたものと判断した。そのため、南側1/3については現状保存することとした。12月9日に本調査地点の調査を終了することとした。

## 第2節 調査の記録

### 1. 調査地点の位置（図48）

鹿田遺跡第21次調査地点は、鹿田キャンパス北辺に4箇所に分かれて位置する。構内座標は、AD～AF30・31区、B地点：AG・AH30・31区、C地点：AP・AQ26・27区、D地点：AS・AT25～28区である。

既往の調査地点との関係をみてみよう。B地点南周辺に位置する1985年の試掘確認調査・立会調査<sup>1)</sup>では、弥生～古墳時代の河道や中世包含層が確認された。4箇所の調査地点の東側にあたる第16次調査（立体駐車場）<sup>2)</sup>においても同様である。

外来診療棟玄関付近（C・D地点）については、南に接する外来診療棟地点（第1次調査）<sup>3)</sup>で弥生時代中期後半以降の集落が濃密に確認されたほか、南東の歯学部渡り廊下地点（第19次調査）<sup>4)</sup>においては弥生時代後期～古墳時代初頭の盛土状遺構が確認してきた。こうした弥生時代以降の遺構・遺物が、外来診療棟玄関付近の工事予定地にまで及ぶことが予想される一方で、外来診療棟建物基礎によってすでに遺跡が大きく損なわれている可能性も想定された。

なお、以下で記す調査成果では、前節の調査の経過で述べたように、表土掘削のみで調査を終了したC地点を除いて記述する。ま

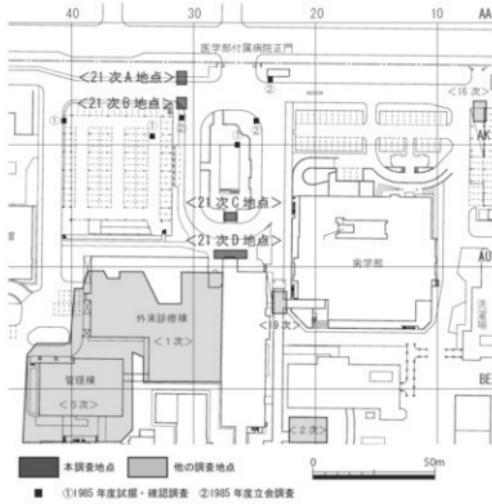


図48 調査地点位置図（縮尺1/2,000）

た一連の遺構や河道を検出したA・B地点をまとめて報告し、その後にD地点の報告を行う。

- 註 1) 山本悦世1987「医学部附属病院基幹環境整備工事に先立つ範囲確認調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』3、岡山大学埋蔵文化財調査室、pp.14-15  
 山本悦世1987「医学部附属病院基幹環境整備緑化工事-電気配線ハンドホール掘削-に伴う立会調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』3、岡山大学埋蔵文化財調査室、p.21  
 2) 高田貴太2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.18-22  
 3) 吉留秀敏・山本悦世編1988「鹿田遺跡」I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
 4) 野崎貴博2010「鹿田遺跡第19次調査(衛生部渡り廊下新設)」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.31-35

## 2. 第21次調査 A・B 地点

### (1) 層序と地形（図47・50、表10）

#### a. 層序

〈1層〉 造成土で、主に1917（大正6）年の岡山医学専門学校が鹿田キャンパスに移転された際のものである。上面標高はA地点で240m、B地点で232m、厚さはA地点で1.25m、B地点で1.13mを測る。なお、A地点では、本層上面から掘り込まれた近現代の井戸がみつかった。

〈2層〉 暗青灰色砂質土で、B地点の一部に残存していたものの、多くは〈1層〉の造成の際に失われていた。上面標高は1.45mとなる。鹿田遺跡における近代耕作土に相当するものと考えられる。

〈3層〉 緑灰色砂質土で、色調・土質とともに〈2層〉と類似する。上面標高はA地点で1.30m、B地点で1.34mとなる。〈2層〉同様に近代耕作土と考えられる。

〈4層〉 淡緑灰色砂質土で鉄分を多く含む。上面標高はA地点で1.07～1.25m、B地点で1.25～1.27mとなる。本層以下の層に関してはいずれもA地点北辺が低く、B地点南辺が高い。時期については14世紀前半の土師質土器挽小片を含む層であり、鎌倉時代に属するものと考えられる。

〈5層〉 淡黄灰色砂質土で鉄分・マンガンを多く含む。上面標高はA地点で0.95～1.10m、B地点で1.03～1.13mとなる。時期については14世紀前半の土師質土器挽小片を含む層であり鎌倉時代に属する。

〈6層〉 灰白色砂質土で鉄分・マンガン・白色微砂を多く含む。上面標高はA地点で0.81～0.95m、B地点で0.92～1.04mとなる。本層上面において溝状遺構（溝1）が構築されている。時期については13世紀後半の土師質土器挽小片を含む層であり、鎌倉時代に属する。

〈7層〉 灰黄色砂質土で、鉄分と白色微砂を多く含む。上面標高はA地点で0.75～0.83m、B地点で0.75～0.92mとなる。出土遺物はほとんどみられないが、土質から本層の時期は上層の鎌倉時代に近いものと考えられる。

〈8層〉 暗灰色粘質土で白色微砂を含み、層上面に凹凸がみられる。土質から、下層の河道埋土の上に堆積した湿地の様相の土層と考えられる。上面標高はA地点で0.60～0.67m、B地点で0.61～0.81mとなる。8世紀末～9世紀前半の土器を含むため、本層の埋没時期は平安時代前半と考えられる。

〈9層〉 淡灰黒色粘質土で有機質を多く含むほか、灰白色微砂を含む。土質と堆積状況から、河道埋土と考えられる。上面標高はA地点で0.45～0.52m、B地点で0.47～0.75mとなる。出土遺物から、時期は平安時代前半に属すると考えられる。

〈10層〉 暗灰色砂質土で白色微砂を多く含み、河道埋土と考えられる。上面標高はA地点で0.30～0.35m、B地

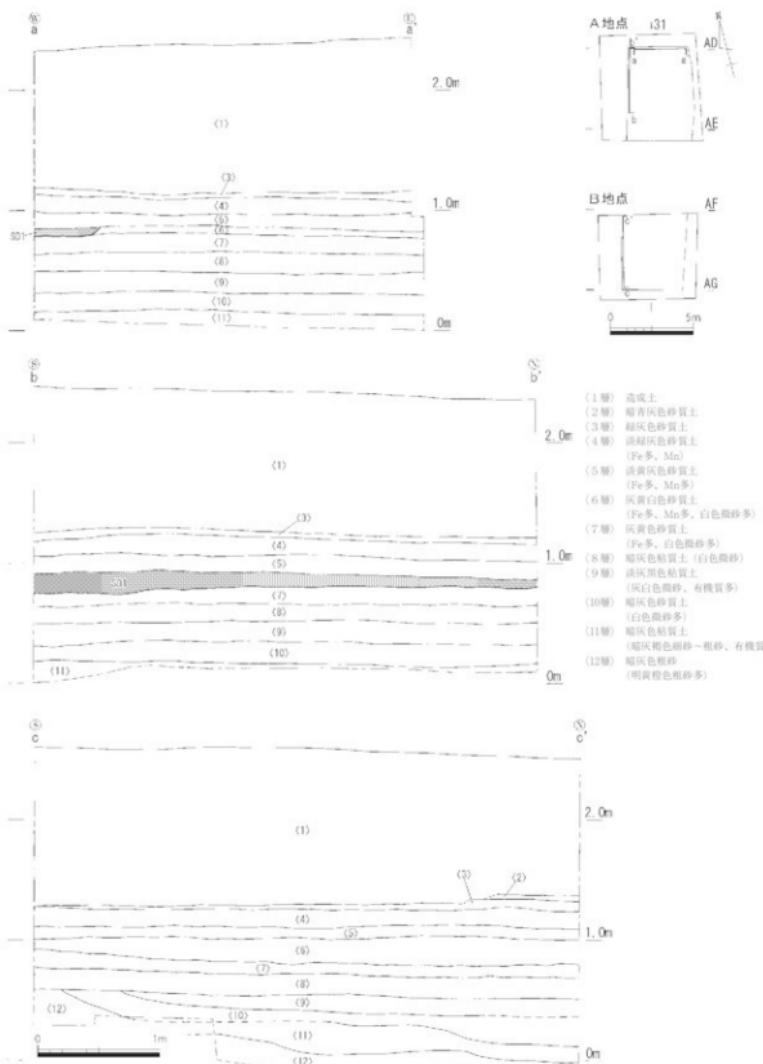


図49 21A・B地点の調査区の土層(1) (縮尺1/40, 1/300)

点で0.25~0.66mとなる。遺物は出土していないが、上下層の時期から本層も平安時代前半に属するものと考えられる。

〈11層〉 暗灰色粘質土と暗灰褐色細砂～粗砂が互層となる層で、有機質を含む。土質・堆積状況から河道埋土と考えられる。上面標高はA地点で0.12~0.23m、B地点で0.09~0.66mとなる。9世紀前半の土器が出土しており、本層の埋没時期は平安時代前半に属すると考えられる。

〈12層〉 暗灰色粗砂で明黄橙色粗砂を多く含み、河道埋土と考えられる。B地点において確認した層であるが、層下面は未確認である。上面標高は-0.02~0.39mとなる。8世紀末の土器および弥生後期土器が出土した。出土遺物から、本層の最終的な埋没時期は平安時代前半と考えられるが、弥生後期土器の存在から河道自体は当該期にまで遡るものと考えられる。なおB地点で本層を部分的に掘り下げようとしたものの、湧水のため掘り下げることができなかったため、本層を発掘停止面とした。

#### b. 地形

A・B地点は、弥生時代に遡る旧河道が位置する関係で、低位部としての地形の特色を有する。A・B地点では、平安時代前半の河道と鎌倉時代以降の包含層がみつかった。B地点で発掘停止面とした河道内埋土である〈12層〉からは弥生時代後期末の壺片等が出土しているため、平安時代の河道は、弥生時代以来の河道の上に形成されていたものと考えられる。平安時代の河道は東西方向に伸びるものである。当該期の河道肩はみつかっておらず、河道底については湧水の影響で確認しえなかつた。ただし、土層堆積状況からB地点が河道南岸に近い位置にあたり、A地点

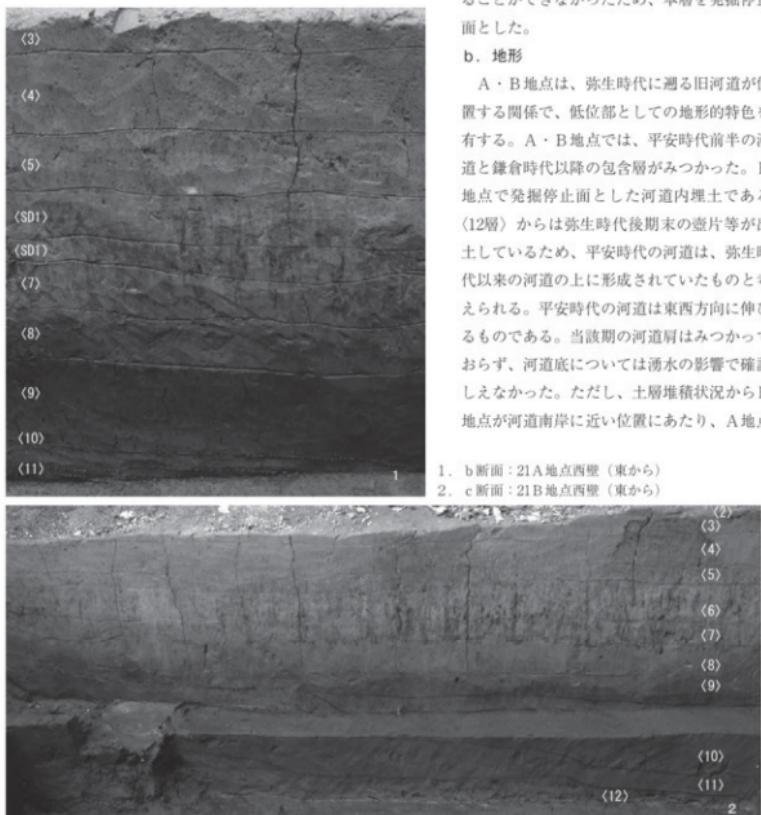


図50 21A・B地点の調査区の土層(2)

表11 本調査地点と第1次調査地点の標高差

	第21次調査A・B		第1次調査	
	145m (2層)	160~190m 木田面	160~190m 道構	150~180m 道構
鎌倉	107~127m (4層) 95~113m (5層) 98~109m (6層)			
平安	96~0.81m (8層)	150~170m 道構		

均質化するのは近代の〈3層〉段階である。

本調査地点の地形的特徴を、外來診療棟地点（第1次調査）との比較で検討したい（表11）。河道出土遺物は、後述のように出土遺物から外來診療棟地点でみつかった8世紀後半～9世紀前半の集落と同時期の所産である。したがって、この河道は鹿田遺跡において集落が営まれていた時期の時間幅の中で利用され、かつ埋没したものと考えられる。同地点における8世紀後半～9世紀前半の遺構の上面標高は150～170mとなる。A・B地点において河道が埋没し、最終的に湿地化した段階である〈8層〉の上面標高が0.60～0.81mであるため、河道が完全に埋没した9世紀前半においても集落とA・B地点との比高は1m前後を測り、本調査地点の土地の低さがうかがえる。外來診療棟地点との比高は近代の〈2層〉段階まで徐々に縮小しつつも継続する。なお、近代の造成によって形成された現地表面の高さに関しては外來診療棟地点では明確ではないが、同地点で造成土が1.2m前後存在したことから考えれば、造成後も0.4mほど本調査地点が低い状況を推定しうる。

以上のように、弥生時代以来の居住域であった外來診療棟地点と比較すると、本調査地点の弥生時代～平安時代の河道は、鹿田遺跡の北縁をなすものと考えられる。

## (2) 遺構と遺物

A・B地点では、平安時代前半の河道に伴う遺物を発見するとともに、鎌倉時代の溝状遺構1条を検出した（表12）。低位部である本調査地点には居住地を示す遺構は認めらない。それは本調査地点が通時代的に集落の周辺部であったことを示唆する。〈4層〉～〈12層〉まで、一定量の遺物が出土しているが、出土量は集落により近いB地点の方がA地点よりも多い。

なおA地点南西隅の造成土である〈1層〉掘削の際に、近現代の井戸1基がみつかった（図51）。井戸の掘り形は円形で、〈2層〉上面における径は1.43mを測る。底面標高は-0.50mである。本井戸は底に集水施設として紡錘形の樽（高さ0.60m、径0.46m）を据え、樽の上に板敷きを設置し、その上に素焼きの土管（径0.52m、高さ0.57m）を3個程度重ねて井側とするものであった。板敷きは6枚の板を格子状に組んだもので、土管の沈下、およびそれによる樽の崩壊を防ぐためのものと考えられる。本井戸は、格子状の板敷きの空隙に手押しポンプ等の管先端を挿入する形で使用されていたものと推測する。

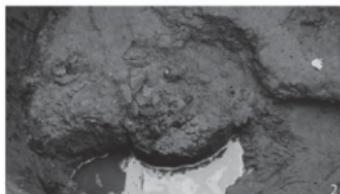
表12 A・B地点検出遺構一覧

### a. 溝

番号	時期	長さ(m)	幅(m)	底面高(m)	深さ(m)	断面形
1	鎌倉時代	15.1	2.82	N:0.73, S:0.73	N:0.23, S:0.29	扇形

南辺が河道最深部に近いものと考えられる。推定河道幅は8m以上となる。

この河道が生み出す比高の影響により、後の〈4層〉段階までA地点・B地点間の標高に差異が生じており、B地点がA地点よりも高くなる。両地点で土地標高が



1. 近現代井戸の井側と板敷き（北東から）  
2. 板敷きの下の樽（東から）

図51 近現代の井戸（A地点）

## a. 平安時代の遺構・遺物（図52・53）

河道の遺物 A・B両地点において検出した東西方向にのびる河道関連の層である〈8層〉～〈12層〉からは、平安時代前半の丹塗りの土師器皿2点（図53-3・4）や高杯1点（5）、杯身2点（1）、須恵器杯身2点（2）、須恵器小片5点、陽物形木製品1点（W1）、墨書を有する板材1点（W2）、礫が出土した。土器については、13号ボリ袋で1袋分であり、その多くはB地点から出土した。図示した1・2・5が〈8層〉、4が〈11層〉、3が〈12層〉からの出土である。3・5が8世紀末、1・2・4が9世紀前半と考えられる。したがって〈11層〉～〈8層〉段階の河道は9世紀前半に埋

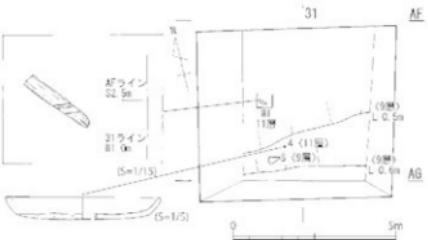
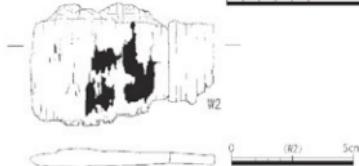
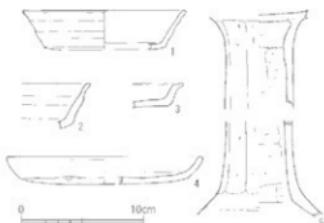
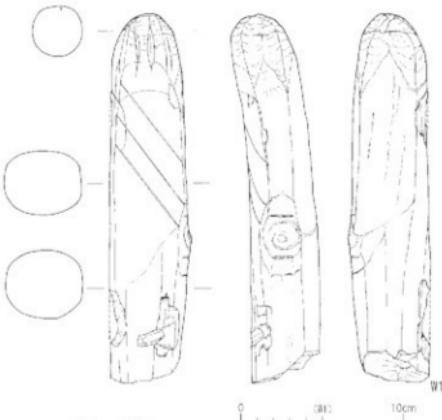


図52 21B地点河道内遺物出土状況（縮尺1/150）



陽物形木製品出土状況（東から）



番号	器種	最大径(cm)	最小径(cm)	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴・寸法・量	鉢	土	色調	
W1	須恵器・杯身	13.4	●10	3.3	ヨコナギ、底部ナギ、内側丹塗り、口縁		微細、比較的均質	淡灰・緑、赤茶(丹)			
2	須恵器・杯身	—	—	—	ヨコナギ、底部ナギ		微細	灰			
3	須恵器・器	—	—	—	口縁部は伏面、腹をもつ、ヨコナギ、内側丹塗り		微細	均質、茶色系	淡灰緑、赤茶(丹)		
4	土器類・器	●16.2	●13.8	2.2	ヨコナギ、底部ナギ、内側丹塗り、口縁		微細	均質、茶色系	淡灰緑、赤茶(丹)		
5	土器類・器	—	—	—	須恵器の底ナギ、ヨコナギ、木口		微細	均質	淡灰緑、赤茶(丹)		
W2	墨書き有字木板材	(5.1)	(7.0)	0.8	木口	板材	全体的に光澤感は無く、上方に若干の吹き、断面部・中央部はやや打け、先端・側面部は丸みを保つ、板材の丸みはやや低い、擦打による痕跡が付いて、木の墨書き部分はカッコ、先端部は変化、敲打による加工、先端上面には3条の墨書きがあるが、本来のものかどうかは不明確、前面欠損、片面に墨書き有り				

図53 河道内出土遺物（縮尺1/4, 1/3, 1/2）

没したものと考えられる。(12層)については出土土器から8世紀末に埋没した可能性が考えられる。なお図52で表示した(9層)の礎には加工は認められなかった。B地点では陽物形木製品と墨書きを有する板材が各1点出土した。陽物形木製品は先端が南東に向いた状態で、(11層)のごく緩やかな斜面部から出土した。陽物形木製品については、邪悪なものの侵入を防ぐまじない具として、古代の道の祭祀に使用されたものと推定されている<sup>1)</sup>。陽物形木製品の出土は、河道が集落内外の境界域として意味していたことを示唆する。板材はB地点北半から出土した。板材については、墨書きの内容については赤外線カメラで観察したものの、全体的に滲んでおり、判読しえなかった。反対側の面には墨書きの痕跡は認められない。これらの木製品については層序と出土土器から、9世紀前半に河道に持ち込まれたものと考えられる。

## 註

- 1) 平川南2006「『道祖神』進行の源流—古代の道の祭祀と陽物形木製品から」『国立歴史民俗博物館研究報告』133, pp.317-350

## b. 鎌倉時代の遺構・遺物

(図54・55)

溝1 鎌倉時代の道路の可能性がある溝状遺構を、A・B両地点において検出した。検出面は(6層)である。

規模は、現状の長さ15.1m、幅2.82m、深さはa断面で0.23m、b断面で0.29mを測る。本遺構の平面形については、A・B両地点

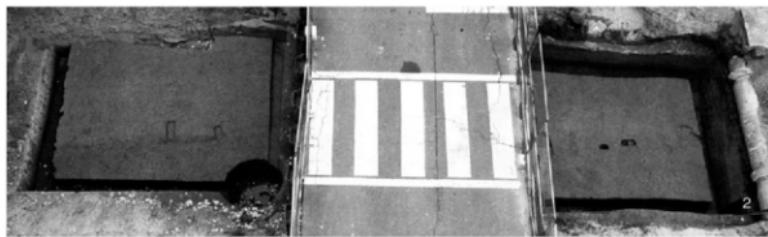
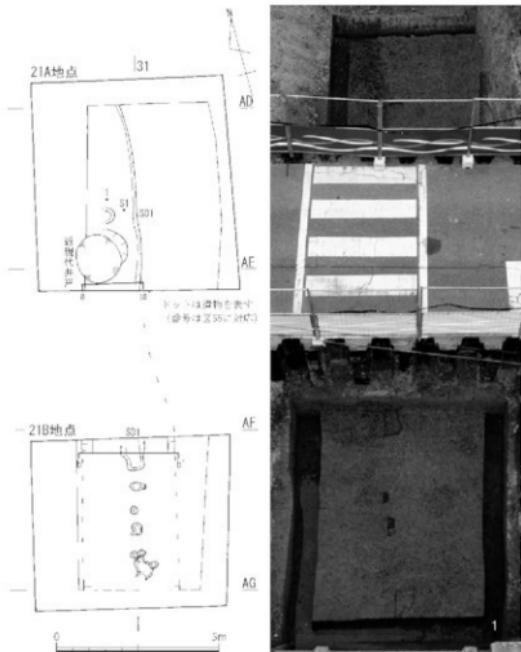


図54 21A・B地点の鎌倉時代遺構 (縮尺1/150)

での検出状況を比較すると、B地点における本遺構は調査区中央に位置し、かつ鹿田地区の地割りにはほぼ沿うのに対し、A地点での本遺構は調査区の西半に位置し、かつ北端が座標北方向に振れる傾向があるが分かる。したがって、A・B地点の間において、本遺構が座標北方向へと屈折するものと考えられる。

断面形は溝全体が幅広で浅い皿形を呈する。埋土は白色微砂を含む灰白色を基調とする砂質土である。b断面6層（灰褐色砂質土）はピット状の窪みの埋土を示すが、他の埋土と同様に白色微砂を多く含む土質である。溝の中央底面には、ピット状のやや不定型な窪みが認められる。窪みは不整円形が主体をなしており、A地点で2箇所、B地点で11箇所が確認される。A地点では、南半に径0.5m・深さ3cm、径1.2m・深さ4cmの円形の窪みが認められる。B地点では、径0.2~0.35m、深さ3~8cmの円形ないしは梢円形の窪みが主体をなす。一方で、北辺には長さ0.75m・幅0.70m・深さ4cmの長方形状の窪みや、南辺には長さ0.6m・幅0.5m・深さ5cmの不整形

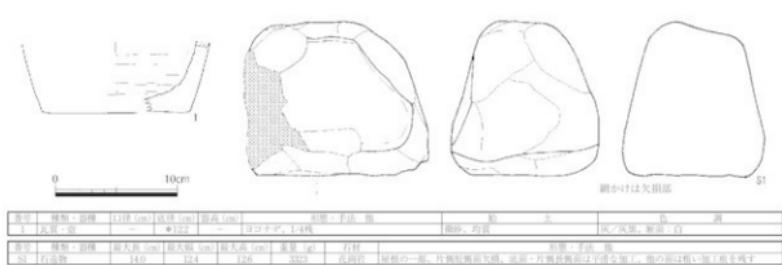
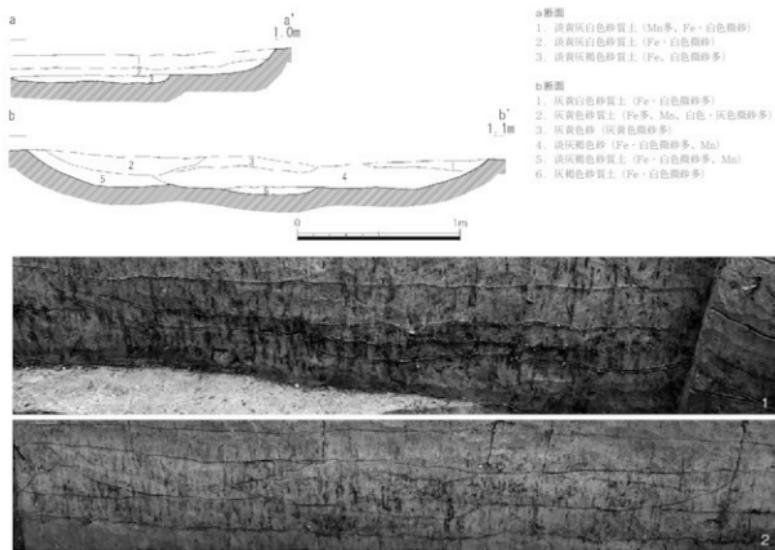


図55 溝1 (縮尺1/30、1/4)

形状の窓みも認められる。

遺物は、高台付土師質土器純小片が含まれていた他、A地点では瓦質壺片（図55-1）や石造物の一部（S1）が出土した。本遺構の所属時期は、瓦質壺片およびその他の土師質土器小片から13世紀末頃と考えられる。

本遺構の性格については、浅い皿形をなす断面形状、および底面の凹凸から、通常の溝よりもむしろ道路の整地にかかる遺構であることが推定される。また本遺構の走行方向は、鹿田地区の地割りから岡山平野の条里地割りへと屈折するものと考えられる。本地点付近が鎌倉時代の地割りの変換点にあたるものと推定される。

なお、本遺構を検出した（6層）（B地点）からは、大麦の圧痕を有する土師質土器片が出土した（巻末図版）。

### 3. 第21次調査D地点

D地点においては、遺構は確認されていないが、層序の検討から地形に関するデータが得られたほか、弥生時代後期の土器が出土した。

#### (1) 層序と地形（図56・57）

D地点では、包含層の堆積状況を確認するために調査区西端および東端においてサブトレンチを設定した。層序については、これらサブトレンチの所見に基づく。

##### a. 層序

〈1層〉 現代建物による搅乱土である。上面標高は3.26～3.32mで、厚さは1.92～2.17mである。

〈2層〉 暗緑灰色砂質土で両サブトレンチにおいて確認した。上面標高は1.25mとなる。遺物は出土していないが、土質から鹿田遺跡の近代層とは異なるものであり、層序から中世～近世層と推定される。

〈3層〉 西サブトレンチでは淡緑灰色砂質土、上面標高は1.09mとなる。東サブトレンチでは〈3a層〉と〈3b層〉に区分した。〈3a層〉は淡灰褐色砂質土で、鉄分が多くマンガンも含む。上面標高は1.15mとなる。〈3b層〉は灰茶褐色砂質土で鉄分を多く含む。上面標高は0.86mである。いずれの層からも遺物は出土していない。本層の時期については、中世層である可能性もあるが、東サブトレンチにおいて褐色系の色調を帯びる点から、鹿田遺跡第1次調査地点（外來診療棟）における弥生時代～古墳時代の包含層である可能性が考えられる。

〈4層〉 灰色粘土である。上面標高は西サブトレンチで0.67～0.73m、東サブトレンチで0.72～0.76mとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。本層より以下の層は、湿地または河道堆積層となる。遺物は出土していないが、下層の土質との類似性から判断すれば、弥生時代後期後半～古墳時代の包含層と推定される。

〈5層〉 暗灰色粘土である。上面標高は西サブトレンチで0.57～0.63m、東サブトレンチで0.65～0.77mとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。下位の〈6層〉同様の粘土層であることから、本層の時期については弥生時代後期後半の範疇と考えられる。

〈6層〉 暗灰褐色粘土である。上面標高は西サブトレンチで0.53m、東サブトレンチで0.55～0.59mとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。両サブトレンチにおいて弥生時代後期後半の土器が出土したことから、本層の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

〈7層〉 暗灰色粘土で、有機質を少量含む。上面標高は西サブトレンチで0.34～0.39m、東サブトレンチで0.35～0.40mとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。遺物は出土していないが、上層と同様の粘土層であり、層序から本層は弥生時代後期に帰属するものと推定される。

〈8層〉 灰色砂質土である。本層以下の層については、東サブトレンチの掘り下げにより確認した。上面標高は0.21～0.26mとなる。土質から河道堆積層である可能性がある。遺物は出土していないが、層序から弥生時代中～後期と考えられる。

〈9層〉 暗灰色砂混じり粘質土である。上面標高は0.06～0.10mとなる。砂混じりの粘質土であることから河道

堆積と考えられる。遺物は出土していないが層序から弥生時代中～後期と考えられる。

〈10層〉 暗灰茶褐色細紗で、有機質を多く含む。上面標高は-0.15～-0.10mとなる。

砂層であることから河道堆積と考えられる。遺物は出土していないが、層序から弥生時代中～後期と考えられる。

#### b. 地形

本調査区では弥生時代後期を中心とする低湿地および河道が存在していたことが判明した。〈4層〉～〈12層〉は湿地または河道堆積層であり、これらは弥生時代後期を中心に古墳時代まで降る可能性があるものである。こうした低湿地・河道の存在は、外來診療棟地点(第1次調査)<sup>13</sup>

の微高地の端が同地点と本調査地点との間に位置していたことを示唆する。外來診療棟

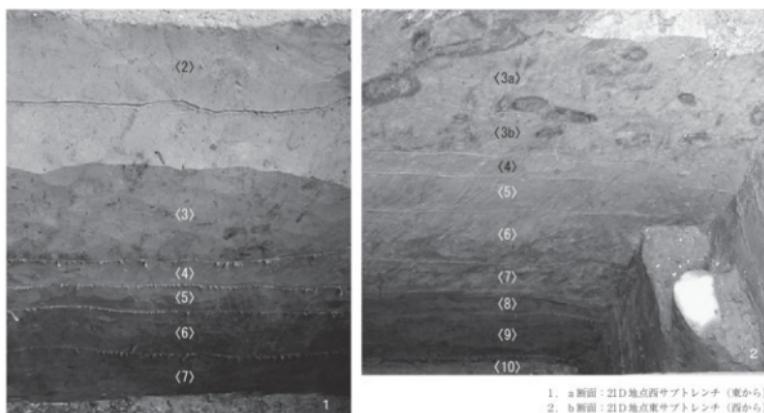
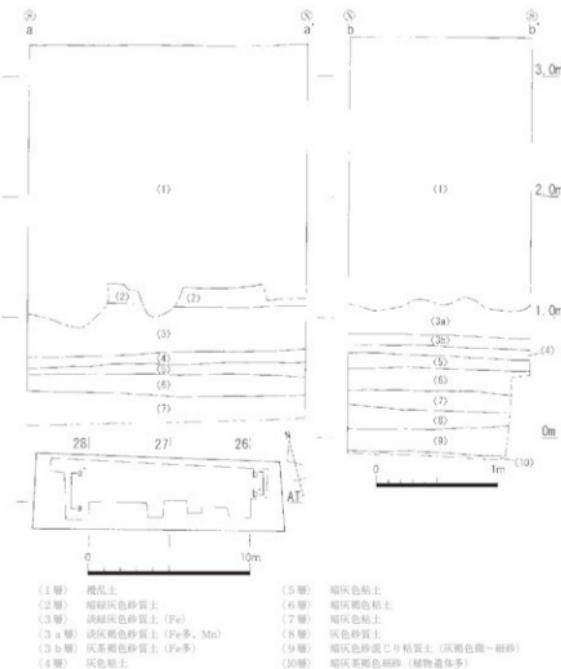


図56 21D地点の調査区の土層 (縮尺1/40, 1/300)

1. a断面：21D地点西サブレンチ（東から）  
2. b断面：21D地点東サブレンチ（西から）

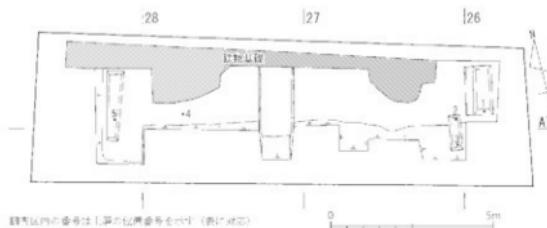


図57 21D地点平面図（縮尺1/150）

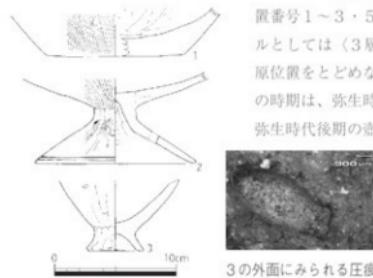


図58 21D地点出土遺物（縮尺1/4）

地点の弥生時代中期後半～古墳時代初頭の包含層（V層）の上面標高が1.8m前後であり、本調査地点で弥生時代後期後半～古墳時代頃の湿地層と推定した（4層）上面と比較すると、両者は1m程度の比高がある。なお外来診療棟地点における弥生時代の無遺物の基盤層（VI層）の標高は1.1m前後となる。

歯学部渡り廊下地点（第19次調査）<sup>2)</sup>における弥生時代後期～古墳時代初頭層（8層）の低位部箇所の上面標高が0.55mであり、弥生時代後期土器が出土した（6層）の標高と一致する。したがって、本調査地点でみつかった低位部層は、外来診療棟の微高地周辺に形成された低位部と一連をなすものと評価しうる。

#### 註

- 吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡』I 国山大学構内遺跡発掘調査報告 第3番 国山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 野崎貴博2010「鹿田遺跡第19次調査（歯学部渡り廊下新宮）」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.31-35

#### （2）包含層出土遺物（図57・58）

本調査地点では、包含層および擾乱土から弥生時代後期土器片が出土した。出土量は13号ポリ袋で2袋分相当である。図57の位置番号1～3・5は（6層）出土である。位置番号4については、出土レベルとしては（3層）に相当するが、建物基礎下の松杭の間で出土したため、原位置をとどめない可能性が高い。図示した高杯（図58-2）、台付鉢（3）の時期は、弥生時代後・3期に相当するものと考えられる。擾乱土中からは弥生時代後期の壺底部片（1）の他、同時期の破片が出土している。周辺における当該期の遺構等の存在を示唆する。

（6層）出土土器については、外来診療棟を中心とする調査区南方に広がる微高地から、低位部である本調査地点へと流れてきたものと推定される。（光本）

番号	種類	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手当	地	色
1	弥生土器	壺	—	—	41	内面：マゼリ、外面：オナハラ 側面：マゼリ風ナガ、1/5強	細粒	内面／外側：淡青白
2	弥生土器	高杯	—	—	132	内面：擦過、外面：マゼリ、3.6cm、側面下端に沈線、内径4.2cm	細粒	内面／外側：乳白色
3	弥生土器	台付鉢	—	—	46	内面：マゼリ、外面：擦過、口部：脚台形押出、マゼリ、多孔、脚台形丸入	細粒角閃石	内面／外側：灰褐色

### 第3節 自然科学的分析

第21次調査B地点で出土した墨書きを有する板材（図53-W2：標本番号OKUF-1373）および陽物形木製品（図53-W1：OKUF-1372）について、森林総合研究所木材特性研究領域・能城修一氏に依頼し、樹種同定を行った。

#### 1. 鹿田遺跡第21次調査で出土した木製品の樹種

能 城 修 一（森林総合研究所木材特性研究領域）

1. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 図59: 1 a-1 c (枝・幹材、OKUF-1373)

樹脂道を欠く針葉樹材。早材仮道管の径は大きく、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。黒褐色の樹脂をもつ樹脂細胞が早材の終わりから晩材に散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は孔口が水平に開くごく大型のスギ型で1分野に2個。

2. サクラ属（広義） *Prunus* s.l. パラ科 図59: 2 a-2 c (枝・幹材、OKUF-1372)

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して斜めに連なる傾向をみて散在する散孔材。道管の穿孔は單一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性にちかい異性で6細胞幅位。

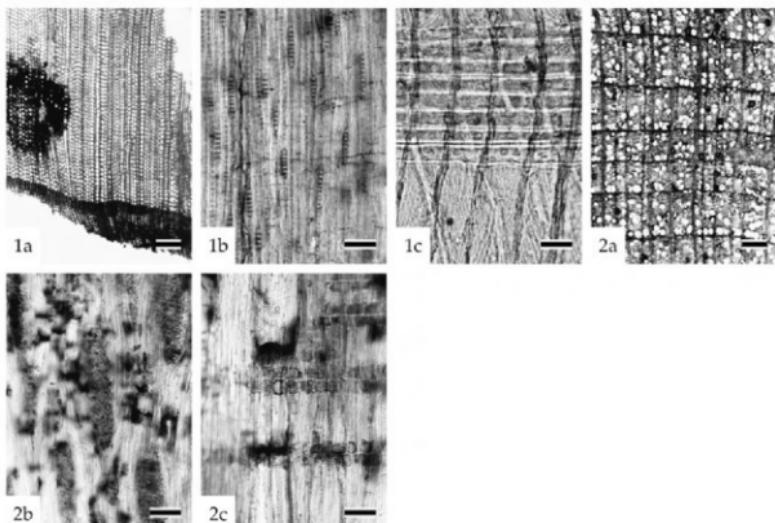


図59 鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の光学顕微鏡写真

1 a-1 c:スギ (枝・幹材、OKUF-1373), 2 a-2 c:サクラ属（広義）(枝・幹材、OKUF-1372). a:横断面 (スケール=200 μm), b:接縫断面 (スケール=100 μm), c:放射断面 (スケール=25 (1 c), 50 (2 c) μm).

表13 鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の樹種

標本	No.	PL.番号	樹種名	製品名	木取り	出土場所	本文中 標識番号	時代
OKUF-	1372	IE59-2	サクラ属	陽物形木製品	丸木	河道	IE53-W1	平安時代前半 (9世紀)
OKUF-	1373	IE59-1	スギ	墨書きを有する板材	板目	河道	IE53-W2	平安時代前半 (9世紀)

## 第4節 結 語

鹿田遺跡第21次調査A・B地点およびD地点の調査では小規模な調査であったものの、弥生時代の地形復元のためのデータや、地割りと密接に関連する鹿田遺跡周縁部における平安時代・鎌倉時代の遺構と遺物の様相が明らかとなつた。以下、地点ごとに成果をまとめよう。

### 【21次調査A・B地点】

#### 平安時代

8世紀末～9世紀前半における東西方向の河道の存在が明らかとなり、当該期の集落構造を考える上で重要な成果となつた。こうした河道は、周辺における既往の発掘調査や試掘・確認調査の成果とも一致するものである。本調査地点でみつかった平安時代前半の河道が、南の外來診療棟地点を中心とする当該期の集落と外界との境界域となっていたことが、B地点における陽物形木製品の出土から推定された。A地点の遺物量と比較して南のB地点の方が相対的に多いことも、そうした推定を裏付けるものといえる。標高の低い本調査地点の河道と、外來診療棟地点周辺の微高地との間で形成された地形の差異を基盤として、平安時代前半の鹿田荘の領域は構築されていたものと考えられる。

なお本河道は弥生時代に遡る河道の上に形成されたことが、出土した弥生土器から推定された。

#### 鎌倉時代

道路に関連するものと推定される、幅広で浅い溝状遺構がみつかった。本遺構の軸方向がB地点では鹿田キャンパスの平安時代に遡る条里と一致するのに対し、A地点では本遺構が西半に偏り、かつ座標北方向へと振れることが判明した。このことから、A・B地点の間において、地割りが変化することが推定された。A地点における本遺構の方向は、鹿田遺跡の北方の郡衙領の条里の里境と一致するとともに、さらにそれを北に伸ばせば、岡山大学津島キャンパスの南北道路に到達するものと考えられる<sup>1)</sup>。このことから、本遺構は本調査地点付近が鎌倉時代の鹿田荘の境界に位置していたことを示すものとして重要である。

### 【21次調査D地点】

層位データの取得を目的とする部分的な調査を実施したD地点においては、弥生時代～古墳時代の河道層・低位部層を確認した。これは、現代の建物基礎によって本来は存在していたと推定される上半の層位が失われていたものの、当該地点周辺の微地形を復元する上で重要な成果と考える。調査開始前には、本地点にまで外來診療棟地点の弥生時代の微高地が広がる可能性も想定していたものの、そうした微高地が本地点にまでは広がらないことが確認された。また、本調査地点の弥生時代の低位部が、歯学部渡り廊下地点の低位部と標高を等しくすることも判明した。一方で、本地点におけるサブトレーンチでみつかった弥生時代後期土器の量は少ないものであったが、このことは盛土状遺構から北の低位部にかけて多量の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が廃棄されていた歯学部渡り廊下地点とは異なるものと考えられる。本調査地点の層位と遺物の様相は、弥生時代後期頃の鹿田遺跡における土地利用の一端を示すものと評価しうる。

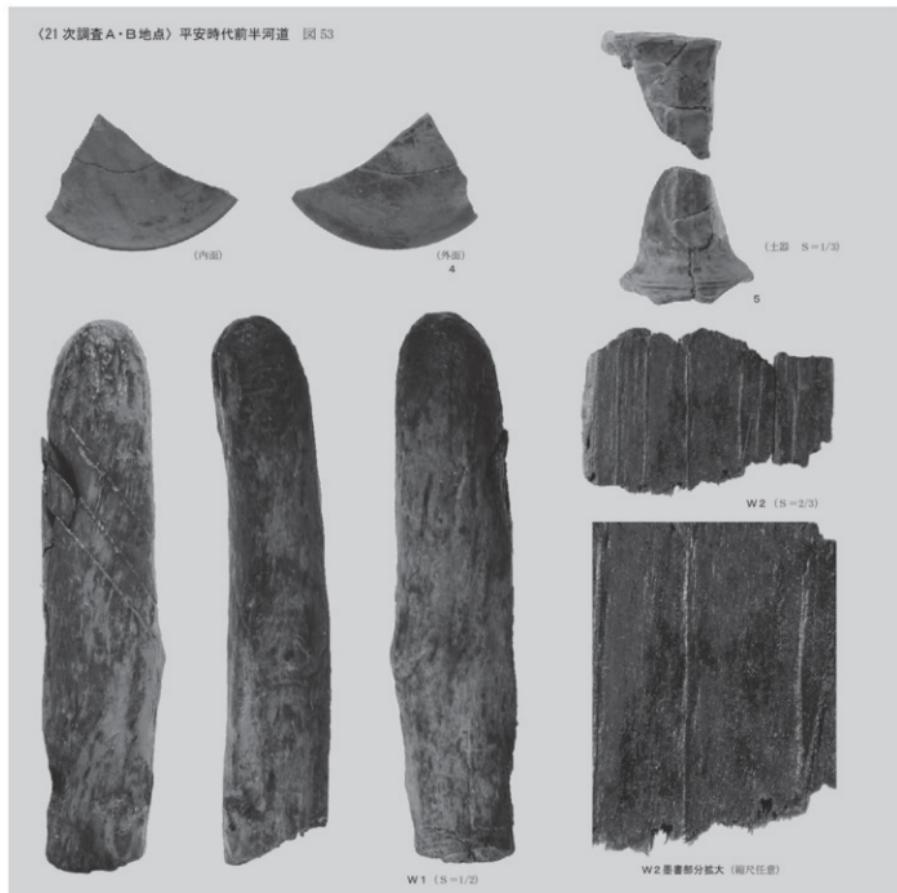
(光本)

#### 註

1) 池田 晋2011「旭川西岸の条里と津島岡大遺跡」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』第45号、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

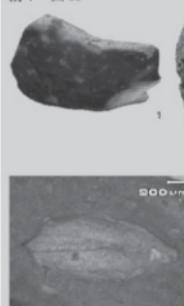
図版1 土器・木製品・石製品

〈21次調査A・B地点〉平安時代前半河道 図53



〈21次調査B地点〉鎌倉時代

溝1 図55



- 111 -

〈21次調査D地点〉

包含層 図58



## 報告書抄録

ふりがな	おかやまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさけんきゅうせんたーきよう2010							
書名	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010							
掲載箇所	第II部第2章 鹿田遺跡第21次調査－外来診療棟周辺環境整備に伴う発掘調査－							
編著者名	光本 順(編著)、能城修一							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号							
発行年月日	2012(平成24)年3月16日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
鹿田遺跡第21次調査A地点	岡山県岡山市北区鹿田町2丁目5番1号	33201	県2288	34度39分08秒	133度55分15秒	2010 11.18～	21.2m <sup>2</sup>	外 来 診 療 棟 周 辺 環 境 整 備
鹿田遺跡第21次調査B地点				34度39分08秒	133度55分15秒		22.0m <sup>2</sup>	
鹿田遺跡第21次調査C地点				34度39分06秒	133度55分16秒	12.09	17.5m <sup>2</sup>	
鹿田遺跡第21次調査D地点				34度39分06秒	133度55分15秒		59.4m <sup>2</sup>	
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
鹿田遺跡第21次調査A地点	河道	平安時代				陽物形木製品、墨書き有する板材、土師器、須恵器		
鹿田遺跡第21次調査D地点	溝	鎌倉時代		溝状遺構		瓦質土器		
	包含層	弥生時代				弥生時代後期土器		

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

---

---

2012年3月16日 印刷  
2012年3月16日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要  
2010

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
岡山市北区津島中三丁目1番1号  
(086) 251-7290  
印刷 友野印刷株式会社

---

---





(表紙) 平安時代の圓筒形木製品  
・養田遺跡第21次調査（B地点）

(裏表紙) 飛鳥時代の筒形木製（軽量木材複数）  
・養田遺跡第20次調査（B地点）